

と き わ な か の ち ょ う
常盤仲之町集落跡発掘調査報告

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第3冊

1978

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

この地の調査の話聞いたのは昭和51年の春早い頃であった。その頃はまだこの財団法人 京都市埋蔵文化財研究所の設立は話に出ていても、実現できるという見通しはつかない時であった。持ちこまれたのは緑地デザインの指宿真智雄さんである。日本電信電話公社が女子社員寮を建てる計画があり、その建築の基本設計を緑地デザインに依頼されていることにあったからである。指宿さんとは旧知の間柄であって、調査を依頼されたとするなら当然受けなければならなかったものである。もっとも指宿さんは、基本設計を受けたとするなら、その地の埋蔵文化財の有無を調べ、地下にある埋蔵文化財の在り方をわきまえて、必要以上に壊さないように努力すべきだということを信条とされていた。従って設計が依頼された時には、その設計費の中に埋蔵文化財調査費も含まれていたのである。そういうことで、それまでに調査もされ、また報告もされていた例のあることを知っておられた。このたびは、そこが名刹広隆寺に接する土地であることから、小生に相談されたのである。

調査が可能となり、再度面接した時は初秋となっていて、財団法人 京都市埋蔵文化財研究所が51年11月1日に発会式を挙げるというところまで進み、鳥羽離宮跡調査研究所の調査部門はそこに吸収されることが決まっていた時であった。その研究所が業務することは、それまでの残務整理ということに限られていたのであるから、それ以後に調査をといわれるなら、新しく発足する財団法人 京都市埋蔵文化財研究所において手をつけたいと申し入れ、その機を待ったのである。

その地について、この財団法人 京都市埋蔵文化財研究所が調査に入ったのは、年が昭和52年に改まって、早々であった。着手した当初には、広隆寺の瓦と思うようなものも出土したが、掘り進めるに従って3月末までには堅穴住居（6世紀末～7世紀）や、掘立柱遺構（古墳～平安）、溝渠、墓壙などで、中世・近世におよぶものが多く出土した。そのため調査を延期して、堅穴住

居の範囲を調べ、十分な精査をとげたのである。しかし、予想の広隆寺に係るものは出なかった。といて、それはそれだけ重要であるわけである。とくに古墳時代の竪穴住居をみつけたということは、このあたりに古墳が多く残されていることが知られているから総合的に把握することができるのである。この調査に入るすこし前にもここからほど遠からぬ、常盤東ノ町の稲栄織物株式会社構内で事前に調査を行った際、封土を削られて石室が残されている古墳をみつけているのであって、その当時ここは人の住む所であるという予想をかなえるようにして、竪穴住居が出土したのである。人の住む所、そういう所であればこそ寺院も建てられるのである。このように先史から古代を通して人の居た場所であったことは、ここが高燥の地であることを証明づけたといえる。このようなことが明らかにされたことは京都市の歴史を考える上にも、大きな拠点となって展開されるべき重要な資料をもたらしたといえるのである。

この調査がこのような成果となったことには、調査にあたり前例がないという最大の障壁を乗り越えて、それを容認して予算化し、施工中の難問題に対しても限りない支援を惜しまれなかった、日本電信電話公社の松本方一建設部長、多田・石貫両調査役、出崎・柏村両課長をはじめ、ご担当の方々に財団法人 京都市埋蔵文化財研究所を代表して深甚の謝意を捧げたいのである。また予想外に多くの遺構、遺物の整理に手間取り、この報告の出刊が遅れ、ご迷惑をかけた点についてはお詫びいたしたい。

1978年4月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所長 杉山信三

目 次

第1章 調 査

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	2
調査日誌抄	5

第2章 遺 跡

1 古墳時代	9
竪穴住居	9
掘立柱建物	15
小結	16
2 平安時代から鎌倉時代前期	19
掘立柱建物	19
溝	20
瓦溜	22
3 鎌倉時代後期から江戸時代	24
土壌墓群	24
溝	30
瓦溜	31
井戸	32
小結	32

第3章 遺 物

1 古墳時代	36
小結	37
2 平安時代から鎌倉時代	40
SD3 出土	40

3	中世から近世	47
	瓦質・土師質土器	47
	銭貨	53
	釘	54
	木器	55
4	瓦	56
	小結	62
第4章	結語	68
付章	日本電信電話公社嵯峨野住宅 集会所新築に伴う発掘調査	71
1	調査の経過	72
2	遺構	72
3	遺物	75
4	結語	75
別表	竪穴住居表	76
	土壙墓表	79
	土器観察表	85
	瓦観察表	94
	年表	102
英 文 要 約		105

図 版 目 次

〈遺跡実測図〉

- PL. 1 遺跡全体図
2 遺跡断面図
3 竪穴住居実測図
(2・3・14・16・18・24号)
4 竪穴住居実測図
(5・6・7・11・13号)
5 竪穴住居実測図
(1・4・8・10号)
6 竪穴住居実測図
(9・12・15・19～23号)
7 竪穴住居実測図
(1～24号)
8 掘立柱建物実測図
(SB4・5・6・8)
9 掘立柱建物実測図
(SB1・3・7)
10 掘立柱建物実測図
(SB2、SK1)
11 石垣溝実測図
(SD3)
12 土壙墓北群実測図
13 土壙墓実測図
(SK73、SK54・56・67)
14 土壙墓実測図
(SK4・25・30・39・46・52)

〈遺物実測図〉

- PL. 15 出土遺物実測図(1～29)
16 出土遺物実測図(30～48)
17 出土遺物実測図(49～74)
18 軒丸・軒平瓦実測図(1～6)
19 軒丸瓦実測図(7・8・9)
20 軒丸瓦実測図(10～20)
21 軒平瓦実測図(21～33)
22 丸瓦実測図(34・35・36)
23 平瓦実測図(37・38)
24 木器実測図(1～3)

〈遺跡写真〉

- 25 航空写真
26 調査地遠景、竪穴住居全景(北から)
27 竪穴住居1～3・14・16・18・
19・22～24号(東から)、5～7・
11・13号(東から)
28 竪穴住居4号(東から)、8・10号・
(北から)、12・15号(北から)
29 竪穴住居3号(北東から)、19号
(北から)、1号(北東から)、7
号カマド(南から)、20号(西か
ら)、5号(南から)
30 掘立柱建物全景(南から)、SB1
(東から)

- PL. 31 掘立柱建物 SB2(北から)、SB7
(北西から)
- 32 瓦溜 SK1(北東から)、SK22(東か
ら)、SX7(南東から)
- 33 石組溝 SD3(北西から)
- 34 土壙墓北群(北から)、
南群(東から)
- 35 土壙墓 SK73(北から)、SK5・
40(北から)、SX10(東から)、
SK4(南から)
- 36 土壙墓 SK(115(北から)、SK46(北
から)、SK56・67(北から)
SK62(北から)、SD2断面(南から)、
SE3 寛永通宝出土状況

〈遺物写真〉

- 37 竪穴住居出土土器
- 38 SD3、土壙墓出土土器
- 39 土壙墓出土土器
- 40 土壙墓出土陶器
- 41 軒丸瓦
- 42 軒丸瓦
- 43 軒丸・軒平瓦
- 44 軒平瓦
- 45 軒平瓦
- 46 丸瓦
- 47 平瓦
- 48 銭貨、木器、硯

挿 図 目 次

Fig. 1 調査地位置図..... 1

2 調査地割付図..... 3

3 調査状況..... 5

4 調査状況..... 6

5 調査状況..... 6

6 調査状況..... 7

7 調査状況..... 7

8 調査状況..... 8

9 竪穴住居位置図..... 11

10 竪穴住居カマド断面図..... 17

11 SD2 断面図..... 20

Fig. 12 SD9・10 断面図..... 21

13 SK22 平面図..... 23

14 土壙墓南群位置図その1..... 25

15 土壙墓南群位置図その2..... 26

16 SK30 上面検出状況
完掘状況..... 27

17 SK25 上面検出状況
完掘状況..... 29

18 SD1 断面図..... 30

19 SX8 断面図..... 31

20 土壙墓分類図..... 33

Fig. 21	SD3 出土土器実測図.....	41	Fig. 28	平瓦実測図	62
22	SD3 出土土師器、皿の器高、 口径による分布図	43	29	調査位置図	71
23	土師質土器・石硯実測図 ...	48	30	調査地付近図	72
24	SK39 出土土師器、皿 実測図	49	31	トレンチ実測図	73
25	鉢類実測図	51	32	調査地全景	74
26	銭貨拓影	53	33	溝と土壙	74
27	釘実測図	54	34	トレンチ北半ピット群 ...	74
			35	遺物実測図	75

表 目 次

Tab. 1	SD3 出土土器観察表... 45 ~ 46	Tab. 4	釘観察表.....	55	
2	中世・近世遺物観察表.....	52	5	瓦分類表.....	64
3	銭貨観察表	53			

例 言

- 1 実測図中の LH はレベル高であり、LH:0 は標高 45.877m である。実測図中に示す LH:-50cm とは、この標高 45.877m より 50cm 低いレベル位置となる。
- 2 実測図に示した方位は天測を行い、すべて真北を使用している。
- 3 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所の用例にしたがった。(ただし、竪穴住居を除く)
- 4 遺物の実測図は、土器・木器類は現寸の 1/4、瓦は 1/3、鉄器・古銭拓影は 1/2 に統一した。
- 5 遺跡の実測図において、掘立柱建物の柱穴断面図は、建物の桁行、梁行の柱中心線で切ることを基本としたが、柱穴がずれる場合はその柱穴の中央での断面図に振り替え使用した。
- 6 本報告書の Fig.1 の地形図 (1/2500 太秦) は、京都市長の承認を得て調整し、調査地位置図に使用したものである。

第1章 調査

1 調査に至る経緯

発掘調査の対象地は、京都市右京区常盤東蜂岡町15番地の、日本電信電話公社京都市管理部所有地である。同地はグラウンドとして使用されていたが、西隣りの社宅を増設することになり、埋蔵文化財調査の計画がたてられた。

同地は、太秦広隆寺の推定寺域北東部にあたると考えられ、調査が必要である。そのため日本電信電話公社は、調査費用を負担することで、緑地デザイン社と調査の運営および手続きの一切について契約した。同社は京都市文化観光局文化財保護課の指導のもとに発掘調査、資料整理、報告書作成などの埋蔵文化財調査の実施を財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託した。

昭和52年(1977)2月1日より発掘調査を開始し、同年6月9日に終了した。以後、調査資料の整理および報告書作成にとりかかった。

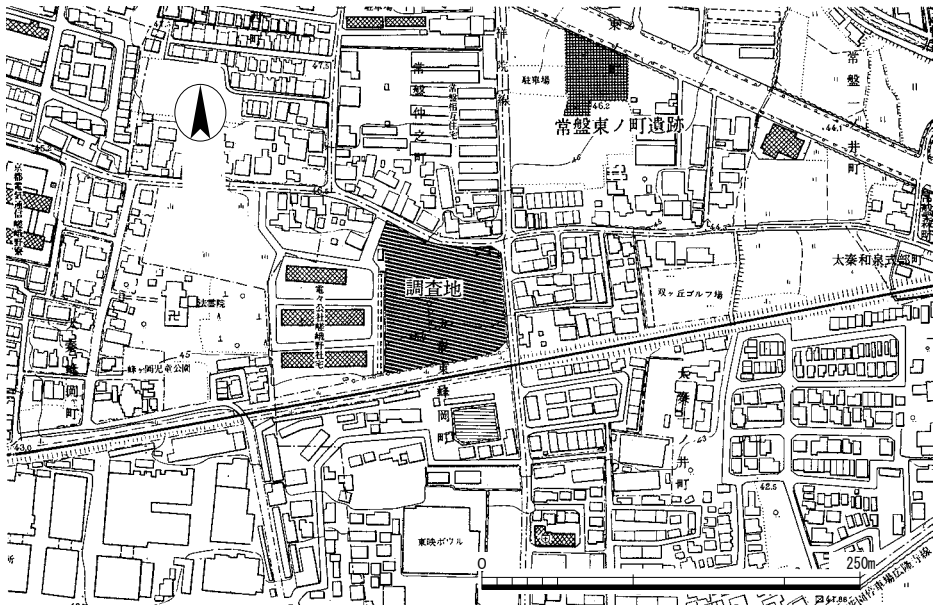


Fig.1 調査地位置図(1:5,000)

2 調査の経過

調査地は、国鉄山陰本線と府道宇多野吉祥院線交差点の北西側に位置し、南側が山陰本線をはさんで東映太秦映画村に隣接する。付近の地形をみると、北西から南東へ緩やかに傾斜している。調査地の北端は道路面と同レベルであるが、南端では山陰本線の軌道敷き面より1mほど高い段をなしている。グラウンドとして整備した際、盛土を行い平坦にならしたものであろう。

まず、調査の対象となっている新築予定の南北2棟の敷地の一部で、層序および遺構面の深さを調べるため、1m×2mの東西に長いトレンチを予定建物の四隅に設定し掘削した。その結果、北側では粗い砂・炭ガラなどからなる整地層30cm～40cmの下に黄褐色泥砂を検出した。同層上面から黒褐色泥砂による柱穴状の掘り込みがみられ、遺構面であると考えた。また南側の西トレンチでは、約1mほどの現代積土の下で、同様の遺構面を検出した。南側の東トレンチでは約1.5mで茶褐色砂礫層となり、遺構面と考えられる層は検出できなかった。

以上により、調査地の北半は浅いが堅く締まった整地層、南半は1m以上の現代の積土であることがわかり、南西端からパワーシャベルとダンプカーを使用して積土の排土、運搬を行った。掘削と平行して遺構面の確認をし、東側で検出した砂礫層は黄褐色泥砂層の下部につながり、地山と考えられた。このため、黄褐色泥砂層上での遺構検出を主眼とした。この段階で調査地の南側に、柱穴、土壇状の遺構、また堅穴住居とみられる方形の黒褐色泥砂の広がりを確認した。

北側で検出した遺構は、古墳時代の堅穴住居1戸、平安時代の掘立柱建物3棟、溝2本、中世～近世の土壇墓20数基があり、南側からは堅穴住居3戸、室町時代の溝と数基の土壇墓を検出した。また建物としてまとまらない柱穴を全域で100個近く検出している。以上の北側と南側の堅穴住居の広がり、掘立柱建物に寝殿造の配置がみられるので、他の一連となる建物の存在予測が可能になった。また、遺構の残存状況は良好であり、これらに関連した発掘区域外の遺構が、新築建物に付属した上・下水道管、暗渠の埋設で破壊される恐れがあるので、拡張調査の必要を認め、日本電信電話公社と協議を行った。その結果、公社側は追加調査の必要を承認され、4月1日より第2次調査に入り、表土の削除を機械で行うことからはじめた。

古墳時代の竪穴住居が検出された南側を重点的に広げたが、最終的には南北両調査区がつながることになった。また北端に石組みをもつ溝の一部が検出されていたが、その全容を明らかにするために拡張した。なお、この溝の検出できる遺構面までは浅いために人力で掘削を行った。

拡張調査でも大きな成果をあげることができた。第1次・第2次を合わせて古墳時代の竪穴住居24戸・掘立柱建物4棟、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物4棟・瓦溜11基、各時代の溝15本、中世～近世の土壌墓60基、井戸2基を検出した。調査のまとめとして、ヘリコプターにより空撮、細部写真撮影、実測を行い調査を終了した。



Fig. 2 調査地割付図(1:800)

総調査面積は3,040 m²におよび、全調査期間を通じて、延べ3,500人にのぼる参加者を得た。

発掘調査および整理作業に参加した財団法人京都市埋蔵文化財研究所の構成は以下のとおりである。

所 長 杉山信三

調査部長 田辺昭三

課長 浪貝 毅

資料部長 木村捷三郎

課長 江谷 寛

総務部長 松井克也

課長 村内義廣 西崎健次

職員 福西 喬 鎌田雅啓 村木節也 吉田悦子 福島京子

発掘調査担当者

調査員 本弥八郎 平田 泰 木下保明 家崎孝治 辻 裕司 中村 敦

鈴木廣司 牛嶋 茂（写真担当）

補助員 黒沢哲郎 天田 亨 西家淳朗 近森泰子 木宮一晃 川満昭夫

山口文吾 藤村明憲 中川慶太郎 小笠原義治 山田敏和 鈴木和佳

赤井 滋 馬淵一美 槌矢町子 足立須磨子 小杉 正 伊藤 潔

山城高校考古学クラブ有志

作業員 本田 勇 本田憲三 本田秋穂 本田寿正 本田 豊 本田敏子

加藤令之 加藤ももよ 山口正義 牧野 誠 平畑又六 上杉初雄

太田純之輔 石井初喜 石井春子 石 政利 井口義勝 若宮健次

上野美春 桜井忠男 中川一雄 中川重次郎 中川恵美子 畑中元二郎

三島俊夫

その他、短期間の参加者が多人数にのぼる。

調査にあたっては、現場事務所、宿舎などは共立建設に協力を願った。また田中 琢、原口正三、西田 弘、井上満郎の各先生方には有益な助言・指導をいただいた。記して感謝の意を表する。（敬称略）

整理作業

遺物の水洗、注記、接合、復元などの整理作業については鈴木が専従し、以下の諸君の協力を得た。

黒沢 西家 天田 木宮 中川 山口 山下俊弘 脇田智子 松井真弓 山川弘美
遺物観察記録

(土器・木器)鈴木 (瓦)中川 鈴木 (金属器)黒沢

報告書作成

報告書作成にあたり、立案、編集、調整は鈴木が主として行い、遺構・遺物などの図面の整理・トレースは黒沢、山下の協力を得た。遺跡の一部と遺物の写真撮影は牛嶋が行った。校正は小野ひとみの協力を得た。なお英文要約は浪貝 茂氏に依頼した。

本書の各章の執筆は以下のとおりである。

第1章 鈴木廣司、第2章 伊藤 潔・鈴木、第3章1 伊藤・鈴木、付章 平尾政幸、その他は鈴木が担当した。

調査日誌抄

1977・2・1～1977・6・9

- | | |
|--|--|
| 2・1 晴 試掘溝を入れる。 | 2・17 晴 A・B区の精査。SK3とした瓦溜の中にあるSE1の掘り下げ。 |
| 2・2 晴 試掘のつづき。掘削地の割り付け、機材搬入などを行う。 | 2・18 曇時々雪 A・B区の精査。 |
| 2・3 晴時々雪 本日より重機を入れる。 | 2・19 晴 A区I5～I6の攪乱を下げる。瓦溜のSK1を調査、実測、写真撮影。 |
| 2・4 晴 B区の重機による掘削。赤褐色泥砂層の精査を始める。 | 2・20 晴 休み。 |
| 2・5 雪時々晴 B区の精査。重機は休み。 | 2・21 雨のち晴 室内作業。 |
| 2・6 晴 休み。 | 2・22 晴 A区SK4・SK5の精査。B2・B3・C2・C3の清掃。 |
| 2・7 晴時々雪 重機による掘削と精査を行う。 | 2・23 晴 A区SK3を掘り下げる。SK5・7の上部を出す。B区SD1を掘る。 |
| 2・8～9 A区の機械による掘削、精査。 | 2・24 晴 A区G7・H7・I6・SD2を掘る。B区B3・C3・SD1を掘る。上部は砂礫、下部は泥 |
| 2・10 雪のち曇 室内作業。 | |
| 2・11 曇 A区の重機による掘削。 | |
| 2・12 晴 重機による掘削終了。
天測により、実測基準線にする真北をとる。 | |
| 2・13 晴 A区南部・北部の攪乱を掘る。
遺構面の精査。割り付けを開始。 | |
| 2・14～15 A区の精査及び割り付けの続き。 | |
| 2・16 晴 A区の暗茶褐色砂礫層はがしと精査、北西寄りに土壌墓群が検出され始める。 | |



Fig. 3 調査状況

砂となる。

2・25 曇のち雨 A区北部分の精査。SK9を掘り始める。SD2の精査。I3の環状遺構を掘り始める。B区SD1を掘りあげる。SX1を掘りあげる。

2・26 晴 A区I5～I6の落込の精査。G2・H2の遺構を精査。B区全景写真のための清掃。1号住居を掘り始める。



Fig. 4 調査状況

2・27 晴 A区西部分GH1～4の精査。SD3の精査。B区1号住居精査の続き。2号住居の精査を始める。

2・28 晴 A区南部の土壌(SX2)を掘る。H3～4区のピット・土壌を掘り下げる。B区2号住居の精査の続き。東半にサブトレンチを入れる。1号住居周溝を掘る。

3・1 晴 A区GH1～5の土壌とピット探し。同区の1/100平板図をとる。SD2北部の精査。B区C5～7の積土をとる。

3・2 曇のち雨 全景写真撮影の準備。

3・3 曇時々雪 A区SB1の柱穴掘り終了。SB2の柱穴を探す。B区B6・C6・C5各グリット暗褐色泥土を取り除く。

3・4 晴 A区西半全景写真のための清掃と撮影。B区C5を掘る。

3・5 晴 A区1/20平面実測の準備。B区の茶褐色砂礫層を掘る。

3・6 晴 休み。

3・7 晴 A区割り付け及び1/20平面図作成。H8・9の精査。さらに北西隅に新しくトレンチを設け、表土はぎを行う。

3・8 晴 A区東半の柱穴を掘る。掘り終えた土壌の平面・断面を実測。C区積土の排除。

3・9 曇時々晴 A区土壌墓群の平面実測。B区C6茶褐色砂礫層を排除。

3・10 晴 A区平面・断面実測。SK1最終写真撮影。B区B6茶褐色砂礫層を掘り下げる。C区暗灰褐色混礫土を排除。

3・11 晴 A区平面・断面実測。B区B5茶褐色砂礫、C区暗灰褐色混礫泥土の排除の続き。

3・12 晴 A区平面・断面実測。集石の土壌の精査、掘り下げ。C4茶褐色砂礫層の排除。

3・13 晴時々曇 SK6・7・11・13・15の写真撮影。SK6・7・5の掘り下げ。B区中央東西あぜを断面実測後、取りはずす。

3・14 曇のち晴 A区SK6・7・14の完掘と実測。C区の精査、石組の溝を検出。

3・15 晴 IJ3の拡張。B区堅穴住居部分を可能な限り西へ拡張する。



Fig. 5 調査状況

3・16 晴 A区全域土壌墓群の精査。B区西南の竪穴住居部分の拡張。

3・17 雨のち曇 A区瓦溜 SK22 を掘る。B区西南拡張の続き。一部室内作業。

3・18 雨のため休み。

3・19 曇 A区 SK22 の精査と SB1・SB2 の柱穴掘り。HI4～C区にかけて拡張。B区南西拡張区清掃後、1号住居を精査。

3・20 雨 室内作業。

3・21 晴 A区西北の拡張。H4・5の柱穴探し。SK18の掘り下げ。SK22の断面図をとる。

3・22 曇のち雨 A区北西部の拡張。SK22の写真撮影。4号住居の輪郭を確認。

3・23 雨のち曇 室内作業。

3・24 雨のち曇 室内作業及び平板実測。

3・25 晴 A区平板実測。SK22の1/10実測。

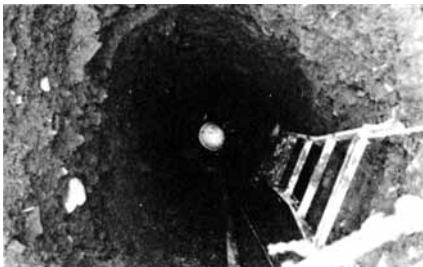


Fig.6 調査状況

北西拡張区積土・現代層・攪乱排除。

3・26 晴 A区北拡張区・積土・現代層排除終了。SK22の実測(1/10)。土壌群精査。

3・27 晴 A区 SX4完掘。近代(明治頃)のごみ穴と考えられる。SX5を掘り始める。

3・28 晴 清掃とSK2の断面図作成。第2次調査として、A区・B区間を重機により拡張。B区南西拡張区精査。

3・29 晴 北西拡張区SD3とSK42～45を掘る。SE3を発見。A区、B区間の重機による拡張。B区を南西に拡張する。C3暗褐色砂礫層掘削。



Fig.7 調査状況

3・30～31 雨 室内作業。

4・1 晴 A区、B区間の拡張作業を終了。

4・2 晴 井戸、溝、土壌の掘り下げ。

4・3 晴 B区SD1完掘。SX2拡張部分を掘る。SK25平面実測。

4・4～5 A区、B区間の拡張部の精査。土壌墓、溝、井戸の精査。

4・6 曇のち雨 拡張区の精査と土壌墓の実測。午後より雨のため作業を中止する。

4・7 雨のち曇 室内作業。

4・8 曇 拡張区の精査。土壌墓群の掘り下げを終えたものより実測にかかる。

4・9 雨時々曇 室内作業。

4・10 晴 休み。

4・11 快晴 拡張区、SD3の精査。

4・12 曇のち雨 拡張区の精査、のち室内作業。

4・13 雨のち曇 室内作業。A区SD3の精査。B区及び拡張区中央部の精査。検出を終えた遺構の実測。

4・14 晴 拡張区、土壌と溝の精査、実測。

4・15 晴 新たに検出した土壌墓の実測。拡

張区とSD3の精査。

4・16 曇時々雨 室内作業。溝の精査。

4・17 晴のち曇 中央部の土壙墓の実測と精査。拡張区と瓦溜SX7・8の精査。

4・18 晴時々曇 中央部石列と土壙墓の実測。

4・19 晴時々曇 拡張区、遺構検出と瓦溜SX7・8の精査。

4・20 晴 土壙の精査及び実測。溝の精査。

4・21 晴 中央拡張区の平板測量。溝と土壙の精査。

4・22～23 雨 室内作業。

4・24 晴 土壙の断面写真撮影、実測、精査。

4・25 雨 室内作業。

4・26 曇 拡張区検出の土壙と瓦溜の精査。土壙平面・断面の写真撮影と平板測量。

4・27 晴のち雨 中央拡張区、土壙の精査。B区の平板実測。午後より雨のため室内作業。

4・28 雨のち晴 午前中室内作業。午後から調査区内に溜まった水を排除。

4・29～30 竪穴住居・土壙・土壙墓・溝の精査。

5・1～2 土壙墓の精査。

5・3～4 土壙の平面実測と精査。B区、拡張区竪穴住居部分の精査。

5・5 雨 室内作業。



Fig. 8 調査状況

5・6 曇 全景写真撮影のための清掃。

5・7 晴 全景と部分写真撮影。

5・8 晴 拡張区平面実測のための割り付け。

5・9 晴 休み。

5・10～11 竪穴住居の検出作業。土壙の実測。

5・12～13 土壙の実測。竪穴住居の精査。1/20 平面図作成。

5・14 晴 A・B区の精査。竪穴住居の精査と覆土断面図の作成。

5・15 雨 室内作業。

5・16 晴 竪穴住居の精査・写真撮影と断面・平面実測。土壙と溝の精査、実測。

5・17～21 竪穴住居の精査。

5・22 曇のち雨 休み。

5・23～25 竪穴住居の精査、実測。柱穴・土壙群の精査、検出と平面図作成。

5・26 雨 室内作業。

5・27～31 竪穴住居の精査、実測。柱穴・土壙群の検出と実測。

6・1～2 竪穴住居・土壙の精査。

6・3 晴 柱穴・土壙の精査と写真撮影。

6・4 晴 カマド（竪穴住居）の断ち割り・写真撮影と実測。柱穴の検出もれの有無を確かめる精査。

6・5～6 柱穴・竪穴住居・カマドの断ち割りと実測。断面写真撮影と平面図作成。

6・7 雨 室内作業。

6・8 晴 各竪穴住居の断ち割り・断面図作成。溝の写真撮影と実測。

6・9 晴 柱穴の断ち割りと図面作成。現場の調査を終了する。（鈴木廣司）

第2章 遺 跡

1 古墳時代

今回の調査で、古墳時代後期に属する竪穴住居を24戸、掘立柱建物を4棟検出している。ほとんどの竪穴住居は、方形から隅丸方形の平面形を呈し、4本の支柱をもつ。床面は貼り床が認められ、カマドは13戸に検出している。これらの個々について述べたのち、古墳時代後期の遺構の全体について考えて行きたい。

竪穴住居

1号住居 (PL.5・27)

1号住居の平面形は南北4.9m、東西2.1m以上で、西半分は調査区域外であるが、ほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは調査区域では認められない。住居の主軸方向はN-5°-Wを示す。覆土は暗褐色泥砂と暗茶褐色泥砂の2層に分けられ、レンズ状に堆積する。床面は、暗褐色泥砂と黄褐色泥砂が混じり合う貼り床である。壁の残存高は平均10cmでほぼ垂直である。周溝は東壁の一部分をのぞいて周り、幅15cm、深さ5cmである。柱穴は東側2個が確認され、柱間は2.4mである。遺物は覆土中にわずかな土師器小片を認めた。

2号住居 (PL.3・27)

2号住居は14号住居を切ってつくられ、平面形はやや歪んだ隅丸方形を呈し、3.2m×2.8mの規模で全掘した。住居の主軸方向はN-55°-Wを示す。覆土は茶褐色泥砂層が堆積している。壁高は10cm前後で外側に傾いている。周溝は認められない。床面の南東コーナー付近は貼り床である。カマドは東壁にわずかに痕跡が認められる程度である。柱穴は4個検出され、その柱間は1.5mで方形を呈している。遺物は覆土中から土師器、須恵器の小片が少量出土したにすぎない。

3号住居 (PL.3・27)

3号住居の平面形は隅丸方形を呈し、南北3.5m、東半分はSD1によって切られている。住居の主軸方向はN-25°-Wを示す。

この住居はSD1を調査した際、西肩断面で検出したものであり、黄褐色泥砂を切り込んで造られている。覆土は4層に分けられ、レンズ状に堆積している。壁高は深さ20cm前

後であり、やや外方に傾いている。周溝は壁下に認められ幅 10cm、深さ 6cm 前後である。床面は暗茶褐色砂泥と黄褐色泥砂とが混じり合う貼り床である。柱穴は西側 2 個が確認され柱間は 2.1m である。カマドは北壁ほぼ中央に位置し、壁より 20cm 以上外に出ているが、SD1 によって破壊されているため、全貌はつかめない。現状では中央が陥没して馬蹄形を呈しているが、もとは楕円形と思われる。カマドの中央には支脚と考えられる河原石が立っていた。覆土内から出土した土器は、須恵器杯蓋の小片と土師器甕の小片だけである。床面からは土師器細片がわずかに出土した。

4 号住居 (PL. 5・28)

4 号住居の平面形はほぼ方形を呈し、4.8m × 4.7m の規模で全掘したが、南東コーナー付近は削平が著しく、わずかに痕跡が確認できる程度である。主軸方向は N-27°-W を示す。覆土は 2 層に分けられ暗褐色泥砂と淡褐色泥土である。壁高は北側と西側では 8cm を計測でき、ほぼ垂直である。周溝は幅 18cm、深さ 5cm で西および北東コーナーに認められる。柱穴は 4 個を認め、柱間は 2.6m と 1.9m で、それを結んだ形は長方形になる。カマドは北壁中央に認められ、東側の半分近くが欠損するが馬蹄形を呈している。西側の端部に土師器の甕の胴部片を使用し、壁の保護を行っていた。またカマドの西側に貯蔵穴状の土壇が認められ、土師器の杯 (PL. 15-22) 小片が数点検出された。遺物は覆土中にも多量に検出されているが、ほとんどが土師器の破片である。

5 号住居 (PL. 4・27)

5 号住居は、7 号住居を切り、6 号住居に切られている。平面形は南北 4.65m、東西 4.6m の方形を呈している。主軸方向は N-21°-E を示す。覆土は 4 層に分けられ、褐色泥砂、暗褐色泥砂、黄褐色砂礫、暗茶褐色泥砂である。壁高は平均 25cm でやや外方へ傾いており、周溝は幅 15cm、深さ 8cm で北壁・東壁に認められる。柱穴は 4 個認め、それらを結んだ形はほぼ方形をなす。柱間は 2.5m であるが、南西側 1 個がずれている。カマドは北壁やや東寄りに位置し、壁を切らずに造られており、その規模は 110cm × 130cm であり、中央に石柱が認められる。遺物は覆土中より須恵器の杯蓋 2 個 (PL. 15-1・2) と土師器杯 1 個 (PL. 15-23) と小片が多数出土した。

6 号住居 (PL. 4・27)

6 号住居は 5, 7, 11 号住居を切っており、平面形は南北 4.6m、東西 4.7m の方形を呈している。主軸方向は N-16°-W を示す。覆土は上層から茶褐色砂礫、暗茶褐色砂礫、淡褐色泥砂、暗褐色泥砂の 4 層に分けられる。壁高は平均 20cm でほぼ垂直である。周溝は北東コー

ナーから東壁にかけて幅 15cm、深さ 6cm で認められる。柱穴は 4 個認められ、その柱間は南北 2.7m、東西 3m である。カマドは北壁中央に壁を切り込まずに造られている。遺物は覆土中より土師器甕の小片、床面からは須恵器杯蓋片・甕片、土師器甕小片が出土している。

7 号住居 (PL. 4・27)

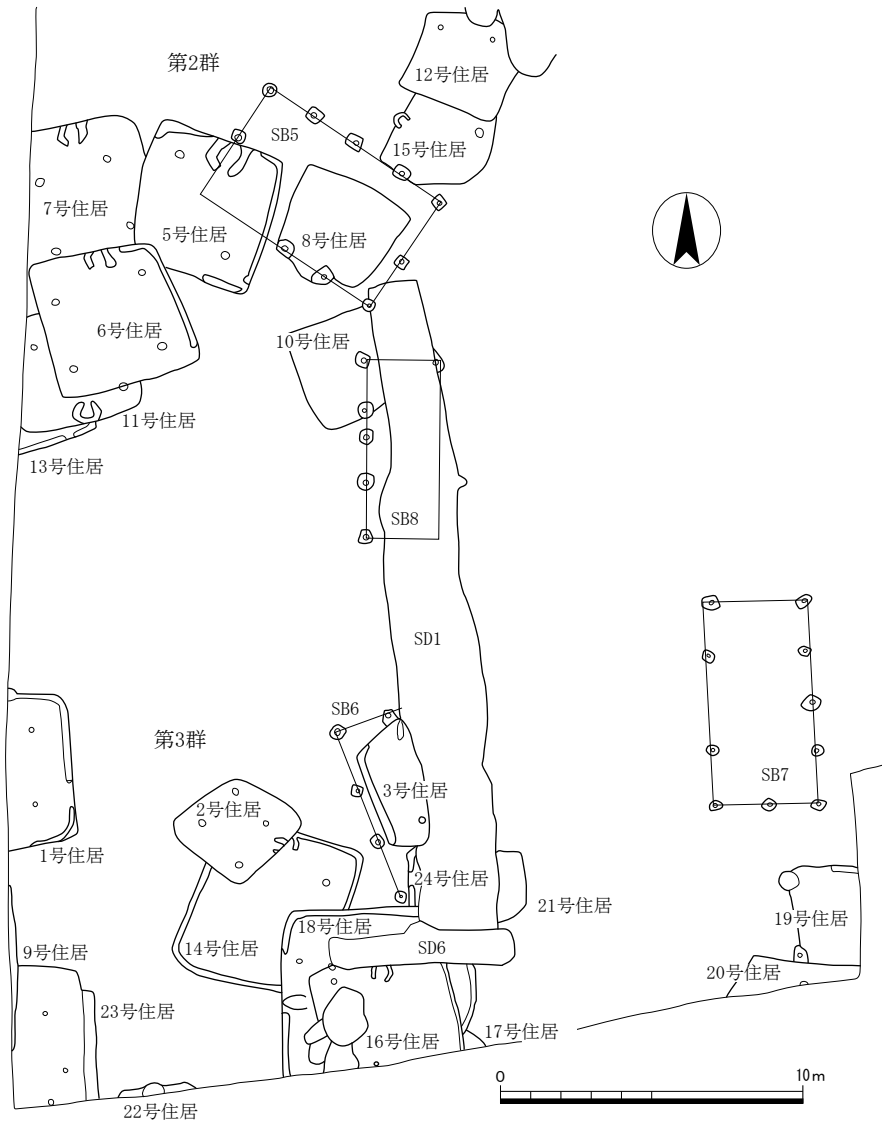


Fig. 9 竪穴住居位置図 (1:250)

7号住居は5号・6号住居に切られており、平面形は隅丸方形を呈する。住居の主軸方向はN-17°-Wを示す。覆土は4層に分けられ、レンズ状に堆積している。床面は平坦である。壁高は平均20cmと高く、ほぼ垂直であり、周溝は認められない。柱穴は3個確認されており、柱間は南北2.3m、東西2.5mを測る。カマドは北壁ほぼ中央に認められ、壁を切り込まずに造られており、規模は70cm×95cmである。中央に川原石の支脚を検出することができた。遺物は床面より須恵器杯蓋片、甕片、土師器の破片が少量出土したにすぎない。

8号住居 (PL. 5・28)

8号住居はSB5に切られており、平面形は東西3.5m、南北は南壁が削平されており、規模は不明である。壁高は約10cmあり、周溝は認められない。床面は平坦であり、貼り床は認められない。柱穴は検出できなかった。遺物は覆土中より横瓶(PL. 15-19)と、土師器甕の細片が出土したにすぎない。

9号住居 (PL. 6)

9号住居は、23号住居を切って造られているが、調査区の南西隅で検出されたため、その規模は不明である。平面形は方形を呈する。壁高は平均25cmと高く、外方へ傾いている。周溝は認められない。覆土は分層できず、茶褐色泥砂が堆積しており、床面は平坦である。柱穴は東側2個が確認され、柱間は3mである。遺物は土師器の甕(PL. 15-28)が出土している。

10号住居 (PL. 5・28)

10号住居の平面形は南北3.3m、東西はSD1に切られているが、残存長3m以上の方形を呈する。壁高は平均7cmと低く、覆土は分層できなかった。床面は東方へ緩く傾斜している。周溝、柱穴は検出できなかった。遺物は覆土中より須恵器甕(PL. 15-15)、杯身(PL. 15-10)、壺口縁(PL. 15-13)・底部(PL. 15-17)、甕小片、土師器高杯(PL. 15-21)が出土した。

11号住居 (PL. 4・27)

11号住居は6号住居に切られ、13号住居を切って造られている。平面形は南北3.85mで、東西は西壁が調査区外にあるため、規模は不明であるが隅丸方形を呈する。住居の主軸方向はN-13°-Wを示す。壁高は約35cmであり、周溝は認められなかった。柱穴は3個確認されており、柱間は南北1.8m、東西2.3mを測る。カマドは南壁やや東寄りに壁を切らずに造られており、その規模は80cm×90cmである。遺物は須恵器杯蓋(PL. 15-4)、土師器碗(PL. 15-25)が出土している。

12号住居 (PL. 6・28)

12号住居はSD7・SK58に切られ、15号住居を切って造られており、平面形は南北3.3m、東西3.5mの規模を呈する。壁高は9cm前後で、覆土は分層できなかった。床面はほぼ平坦であるが、わずかに南側へ傾斜している。周溝は検出できなかった。

13号住居 (PL. 4・27)

13号住居は、11号住居に破壊されており、南壁の一部が確認されただけである。壁高は35cmと高く、やや外方へ傾いている。壁下に幅20cm、深さ5cmの周溝が認められた。遺物は検出されなかった。(11号住居覆土中より、須恵器杯蓋片、土師器甕片、カマド内より土師器細片がわずかに出土したにすぎない)

14号住居 (PL. 3・27)

14号住居は2・16・18号住居に切られているが、平面形は5.15m×5.15mの正方形を呈する。覆土は2層に分けられる。壁高は平均8cm前後あり、やや外方へ傾いている。周溝は壁下に認められ幅15cm～30cm、深さ6cm前後で全周する。カマドは北壁中央に位置するが、2号住居によって破壊されており痕跡をとどめるだけである。柱穴は4個確認されており、柱間は2.9mである。遺物は須恵器甕頸部(PL. 15-14)、杯身(PL. 15-5～8)、壺底部(PL. 15-18)、大形壺頸部(PL. 15-20)が覆土中より出土している。

15号住居 (PL. 6)

住居の平面形は南北3.1m、東西3.3mの方形を呈するが、北壁は12号住居に切られ、南東・南西の2コーナーは削平されている。住居の主軸方向はN-57°-Wを示す。壁高は平均10cm前後であり、壁下に周溝は認められなかった。覆土は分層できなかった。床面は平坦であり、黄褐色泥砂の貼り床である。柱穴は1個確認できた。カマドは西壁ほぼ中央に認められ、壁に両袖を切り込んで造られ、規模は50cm×50cmである。遺物は他の住居に比べて多く、覆土中からは、須恵器甕(PL. 15-16)、杯蓋、杯身、甕の破片(PL. 15-27)、土師器甕の破片、カマド内より土師器細片が出土している。

16号住居 (PL. 3・27)

16号住居はSD6に切られており、平面形は東西4.5m、南北3.3m以上の方形を呈し、18号住居の上に造られている。カマドは北壁中央に位置し、川原石の支脚が置かれている。住居の主軸方向はN-8°-Wを示す。覆土は暗褐色泥砂層で、床面は18号住居床面より深く造られている。壁高は平均20cmあり、ほぼ垂直である。周溝は東壁にのみ認められ幅15cm、深さ5cmである。柱穴は西側2個が確認され、柱間は2.7mである。北西の柱穴の

底に河原石が据えられている。遺物は覆土中より須恵器杯蓋、土師器甕・杯の小片、カマド内から土師器甕小片、床面からは土師器・須恵器の小片が出土した。

18号住居 (PL. 3・27)

18号住居はSD1、SD6、16号住居に切られている。平面形は東西6.5m、南北5m以上の方形を呈する。カマドは西壁ほぼ中央に位置するが、痕跡しか認められない。住居の主軸方向はN-90°-Wを示す。覆土は暗茶褐色泥砂層で、床面は黄褐色泥砂と暗茶褐色砂礫とが混じり合う貼り床である。壁高は平均10cmあり、ほぼ垂直である。周溝はカマド付近を除き、幅15cm～20cm、深さは8cm前後の規模ではほぼ全周する。柱穴は西側2個が確認されており、柱間は2.6mである。遺物はカマド内より土師器深鉢の口縁部の破片(PL. 15-26)と、周溝内より須恵器杯蓋(PL. 15-3)の2点が出土したのみであった。

19号住居 (PL. 6・27)

19号住居は南側を20号住居に切られている。東側は調査区域外であり、北西コーナーが確認できただけであるが、隅丸方形を呈すると考えられる。住居の主軸方向はN-10°-Wを示す。壁高は平均12cmと低く、周溝は北壁下に幅12cm、深さ6cmでわずかに認められるだけである。床面は平坦である。柱穴は西側2個が検出され、柱間は2.1mである。遺物は少なく、覆土中よりわずかな土師器小片が出土したにすぎない。

20号住居 (PL. 6・29)

20号住居はSD14に切られ、19号住居を切って造られる。平面形は方形を呈するが、南側と東側が調査区域外であるため規模は不明である。壁高は10cmあり、ほぼ垂直である。周溝は幅10cm、深さ2cmで北壁下に認められる。床面は平坦であるが、19号住居の貼り床は締まっていない。遺物は覆土中より須恵器杯身、甕の破片、土師器の小片が多数出土している。

21号住居 (PL. 6)

21号住居はSD1の東側の肩で確認された。北壁と焼土が検出されたが、溝・土壌で破壊されている部分が多いため規模は不明である。壁高は10cmでほぼ垂直である。覆土は2層に分けられ、茶褐色泥砂と暗茶褐色砂礫である。焼土層内から、近江系と考えられる口縁部から体部が「く」の字状に外反する土師器甕(PL. 15-29)のほか、覆土内からは土師器片が多量に出土している。

22号住居 (PL. 6・27)

22号住居は、調査地の南西に北側の一部と焼土のみが検出されている。大部分が調査区外で全体の規模は不明であるが、隅丸方形を呈すると考えられる。壁高は平均20cmあり外へ傾く。覆土は暗茶褐色泥土の1層である。北壁をわずかに切り込むように焼土が堆積しており、カマドであったと推定される。遺物は出土しなかった。

23号住居 (PL. 6・27)

23号住居は9号住居に切られており、東北コーナーと東壁の一部を確認したにすぎないが、平面形は方形を呈するものと思われる。遺物は出土しなかった。

24号住居 (PL. 3・27)

24号住居はSD1の西肩断面で検出できたが、北西のコーナーのみである。壁高は10cmほどで、幅10cm、深さ5cmの周溝を持つ。覆土は暗茶褐色泥砂の単層である。遺物は含まれなかった。

掘立柱建物

SB4 (PL. 8)

4号住居の南西にあり、建物中央にSD10とグラウンドの排水溝が走っている。柱穴を7個確認している。2間×2間で、梁間が1.7mと1.4mであり、桁行はばらつきがある。総長は3.4mと計測できる。建物の主軸方向はN-28°-Wである。柱穴は暗褐色泥砂で埋められているが、底部の柱あたりの部分に黄褐色粘土が1cm～2cmくらいで突き固められ、根固めにされているのが認められた。柱穴の掘形より検出された遺物は土師器片が数点である。

SB5 (PL. 8)

8号住居を切りこみ、5号住居に切られる形で柱穴を10個確認している。4間×2間で主軸方向はN-57°40'-Wと考えられる。梁間は4m、桁行は6.6mと測定できるが、柱間寸法は一定でなく1.6m～2.3mの間でばらつく。柱穴はほぼ50cm×50cmの隅丸方形をなすものが多いが不整形なものも混じる。深さは平均40cmほどである。地山の砂礫層に柱を据えたと考えられ、特別な仕事の跡はみられない。掘形内より土師器の甕片、小片が数点検出されている。

SB6 (PL. 8)

3号住居を囲むL字型で柱穴を6個確認している。東側をSD1に、南側をSD6に切られ

ているため全体の規模は不明である。主軸方向はN-20°50′-Wと推定できる。柱間寸法は一定でなく1.6m～1.9mの間である。柱穴はほぼ60cm×60cmの隅丸方形をなし、深さは平均25cmほどであり、柱を据えるのに特別な仕事はみられない。掘形内より須恵器片、土師器片が出土しており、竪穴住居と同時期と考えられる。

SB8 (PL. 8)

10号住居を切り、SD1に切られるL字型で、西側の柱穴を5個確認している。主軸方向はN-4°-Wと考えられる。柱間は一定ではなくばらつく。柱穴は平均して50cm×50cmで深さ30cmほどである。掘形内からは須恵器、土師器の破片が出土している。

小結

以上が各竪穴住居・掘立柱建物の概要である。竪穴住居は24戸検出したが、集落の中心部が調査区域の南半にあり、西側、南側へのびているため、集落全体の規模をつかむことはできなかった。

竪穴住居の平面形は、隅丸方形と方形の2種類あるが、後者が多い。規模は2号住居の3.2m×2.8mが最小で、一辺6.5mの18号住居が最大であるが、ほとんどは一辺が3.5mか4.5m前後の住居である。

当遺跡で検出した竪穴住居は、調査区南側の住居群、調査区中央西側の住居、独立した4号住居と次のように3つのグループに分けることができる。

第1群：4号住居、SB4

第2群：5・6・7・8・10・11・12・13・15号住居、SB5・8

第3群：1・2・3・9・14・16・18・19・20・21・22・23・24号住居、SB6

第3群は第2群に比べて全般に規模の大きい住居が多いが、中に最小と最大の住居を含んでいる。

第1群とした4号住居は、2・3群とは離れ、1戸だけ独立して造られており、4.65m×4.9mと規模も大きい。また、完掘された住居の中では、当住居だけが貯蔵穴を確認している。このようなことから4号住居は、特別な意味を持っているかもしれないが、付属施設などが認められず、遺物も細片が少量しか出土しておらず明確にできなかった。

当遺跡で検出された竪穴住居24戸の内、カマドの確認された住居は13戸を数える。カマドは壁を切り込んで造られているものが2基(3号、15号)であり、他は壁を切り込まずに造られている。カマドの構造は、床面を掘り込み、周りを粘土で馬蹄形に壁を築く。

ここでは他の遺跡で見られるような、土師器、須恵器を利用した支脚は認められず、川原石が用いられている。支脚から前庭部にかけて焼土、灰、炭が厚く堆積しており、前庭部床面は焼けている。支脚を境にして奥には焼土、灰の堆積がほとんどみられなくなる。なお、7号住居のカマドは、下が深く掘り込まれており、その堆積土には焼土や炭などが多く含まれ、造り替えられた可能性を持っている。

各住居の付近には、住居とほぼ同時期と考えられる4棟の掘立柱建物が検出されている。これらは、各群について1、2棟ずつ付属しているが、建物としての全容をとらえられるのは、SB5のみである。そのほかは、傾きも一定ではなく、竪穴住居と方向を一致させるものもないが、切り合い関係と掘形に含まれる遺物より同時期と判定できた。竪穴住居群の中における掘立柱建物の役割は、例えば高床の倉庫として使用されたものか（床束が検出されていない）、主権者級の住居なのか、寄り合いの場になるのか決め手となる資料が少なく、竪穴住居に伴って検出されたと報告するにとどめておきたい。

各住居とも出土遺物は少量で時期比定は困難であるが、5・10・14号住居から比較的大きな破片がみつき、6世紀終末から7世紀前半に比定できた。遺物の時期差が少なく、各グループ内の切り合いが激しいことなどから、何らかの理由によって、短期間に何回もの住居の建て替えが行なわれたものと考えられることができるが、各住居とも火災などの痕跡はまったく認められなかった。各地における集落の調査例でも当遺跡のような報告例は認

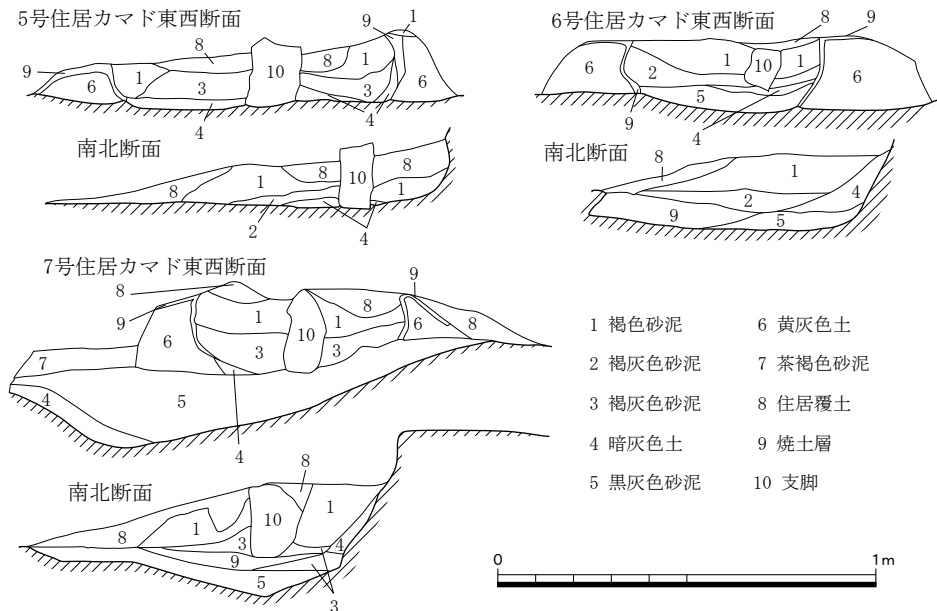


Fig. 9 竪穴住居とカマド断面図

められない。

なお近畿地方における当遺跡と同時期の集落跡の調査例は、大阪府土師ノ里遺跡辻本地¹点、百舌鳥陵南遺跡²、大園遺跡³、群家今城遺跡⁴、宮ノ前遺跡⁵、京都府正道遺跡⁶、中臣遺跡⁷、奈良県小墾田宮推定地⁸、滋賀県真野遺跡⁹、和歌山県吉田遺跡¹⁰などの遺跡を知ることができる。しかしこれらの遺跡でも集落跡の全掘は少なく、当遺跡の出土遺物もきわめて少量であり他遺跡と比較検討しがたい点もあるため、今後の古墳時代後期の集落跡の調査の蓄積を待って、再度の考察を進めたい。

(鈴木廣司・伊藤 潔)

註

- 1 『土師遺跡発掘調査報告書その1』堺市教育委員会 1976年
- 2 大阪府教育委員会『百舌鳥陵南遺跡』（大阪府文化財調査概要第14輯 1974年）
- 3 大阪府教育委員会『大園遺跡Ⅱ』（大阪府文化財調査概要第15輯 1974年）
- 4 『高槻市文化財年報昭和50年度』高槻市教育委員会
- 5 『高槻市史』第1巻 高槻市史編纂委員会
- 6 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第1集 城陽市教育委員会 1973年
- 7 『京都市埋蔵文化財年次報告 1974-Ⅲ』中臣遺跡調査団 1974年
- 8 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報4』1974年
- 9 大津市教育委員会『真野・神田遺跡』（大津市文化財調査報告書5 1976年）
- 10 和歌山県教育委員会『吉田遺跡』（吉田遺跡第2次調査概報 1971年）

2 平安時代から鎌倉時代前期

この時期に属すると考えられる遺構として掘立柱建物、溝、瓦溜、土壇墓などを検出している。溝は石垣を持つSD3など3本。瓦溜SK1・22などには同種の一括資料になる瓦類が出土しており興味深い。土壇墓は、羽釜を蔵骨器に転用したSK73、石を投げ込んだ土壇墓などに分けられる。以下順次述べて行きたい。

掘立柱建物

SB1(PL.9・30)

調査地の北西寄りにあり4号住居を切っている。平安時代後期の瓦を含む瓦溜や中世・近世の土壇に切られた柱穴を16個確認している。建物は3間×5間の東西棟で南側に廂を持つ。総長は梁間方向8.5m、桁行方向13.4mと測定できる。棟方向は真北に対しN-92°20′-Wが測れる。柱間は身舎と廂で異なる。まず身舎の梁間2間は2.4m、3.3mであるが、これも西側と東側で寸法が逆となる。廂部分の柱間は3.3mである。桁行は身舎では両端の柱間が2.5mとなり、内3間が2.8mである。廂の桁行の柱間はすべて2.68mと計測できる。SB1の特徴は、身舎の梁間2間のうち、中間の柱が側柱と側柱を結んだ梁の線より外に出て棟持柱様になる。これは神社建築の一形式である大社造りの建物にみられる例である。柱穴はほぼ80cm×80cmの方形が多く、一部これ以上の寸法を示すものもある。深さは10cm～30cmほどでやや浅い。掘形内より須恵器、土師器、瓦片が多量に出土している。しかし他の遺構との切り合い関係や、出土遺物などの比較から平安時代であろうという見当はついても、確実な年代は決め難い。

SB2(PL.10・31)

調査地の中央やや東寄りにあり、建物中央にSK1を含む。現代のごみ捨て穴に南東側を破壊された形で、柱穴を8個確認している。建物は2間×3間の南北棟であり、寸法は梁間方向が4.8m、桁行方向が7.8mと測定できる。主軸方向は棟に対しN-1°-Eが測れる。柱間は梁行が2.4mであり、桁行は両側柱2間が2.7m、中央が2.4mとなる。柱穴は80cm×80cmの方形で、深さは10cm～30cmほどで浅い。掘形内からは土師器片が数点出土しているだけであり、時期の判定は難しい。しかし建物中央に位置するSK1からは鎌倉時代前期と考えられる巴文軒丸瓦(PL.18-6)・連珠文軒平瓦(PL.18-5)が出土しており、これ

より新しくなることはない。

SB1 と SB2 は配置から双方が関連する建物とも思えるが、軸方向が真北に対し 3° 以上の開きがあること、建築時期の確実な比較ができないことなどから、同時期の一連のものとして計画された建物群であるとは確認できない。

SB3 (PL. 9)

調査地の北東部で検出。北半は調査区域外のため不明。南側で柱穴 4 個と、瓦器や平安時代後期の瓦を含む落込の底から柱の痕跡を 2 個検出した。棟方向が不明なため、軸方向は明確ではない。東西総長は 4.5m と測定できる。柱間は東西 3 間が各 1.5m である。南北 1 間は 1.2m である。

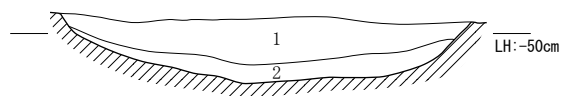
SB7 (PL. 9・31)

調査地の南東寄り、19 号住居の北側で検出。一部、近世の落込で破壊されているが、柱穴を 10 個検出した。2 間 \times 4 間の南北棟で総長は梁間方向 3.4m、桁行方向 6.6m、棟の軸方向は $N-4^\circ-W$ と測定できる。柱間は一定でなく梁間・桁行とも 1.6m \sim 1.8m の間をばらつく。柱穴は 50cm \sim 60cm の不揃いな円形をなし、深さは 30cm \sim 40cm ほどである。掘形内からの遺物は須恵器片、土師器片がかなり出土している。しかし近世のものを除いて、他の時代の遺構との切り合いがみられず、確実な建築時期が求められない。

溝

SD2

調査地の北東にあり、北西から南東に向かって流れる溝で長さ 17m を検出している。北側は下水管と攪乱により不明で、南は調査区外にのびる。幅は出入りがみられるが 2m ほどとなる。深さは北側で



- 1 淡黄褐色泥砂
- 2 黄褐色泥砂



Fig. 11 SD2断面図(1:40)

20cm、南側で 50cm ほどになり、かなりの傾斜を持っている。溝内の堆積は 2 層に分かれ、淡黄褐色泥砂と黄褐色泥砂である。層内には黒色土器片、および丸・平瓦片が多数検出されている。

SD3 (PL. 11・33)

調査地の北端にあり、北西から南東に流れる溝で、石組で護岸した肩を持つ。溝は北西

端から SE3 に南肩を切られ、現代のごみ捨て穴によって破壊されるあたりまで長さ 7.5m、幅 2m。石組みの天場を除く黄褐色泥砂の肩からの深さは北西部で約 18cm、南東部の SE3 付近で 45cm とかなりの傾斜を持っている。SD3 はごみ捨て穴の東側に続き、南側の肩は、東西に通る下水管により破壊されている。この下水管の会所にあたるまでの約 3m の間を、北側の肩のみであるが、石組みを残した状態で検出している。幅は不明だが、深さは平均 50cm である。会所を境にして東側は不明である。精査の限りでは、会所より南の遺構面からは、溝の続きとみられる遺構は検出していない。再び北へ曲ったのち、調査区外を西へのびると推定できる。

石組みは平均 2 段で一部 3 段残っている。石は山石、川原石が混在しており、大は 50cm × 30cm × 15cm、小は 20cm × 10cm × 5cm ほどで、比較的扁平な長方体のものが多い。これらを溝の内側に長辺を横にし、粗く面をそろえて据えている。石と石のすきまや、据えた石の安定のために小礫を充填しているものもあった。溝の堆積は 4 層に分けられ、上層から淡茶褐色泥砂、灰褐色泥砂、黄褐色泥砂、淡灰褐色砂泥の順に堆積する。下部 2 層に多量の土師器皿類などが厚さ 3cm ～ 10cm で出土した。土師器皿類のほか、瓦器碗 (Fig. 21-25)、巴文軒丸瓦 (PL. 20-10) 5 点、花文軒丸瓦 (PL. 20-11) 2 点、唐草文軒平瓦 (PL. 21-23 と同範) 10 点、巴文軒平瓦 (PL. 21-24)、平瓦、丸瓦片が検出されている。瓦器碗を始め、いずれも平安時代後期に比定されるものである。他の層に新しい時代に属する遺物が発見されていないことから、SD3 は平安時代後期～鎌倉時代初期と考えられよう。

SD9

調査区中央西寄りにある。南北に蛇行する溝で、長さ 16.5m、幅 12cm、深さは北で 5cm ほど、南の深い部分で 34cm ある。堆積は 2 層で、淡褐色泥砂と淡赤褐色泥砂である。この溝の蛇行する肩部近くには、土師器皿の堆積が数箇所で見られた。他に須恵器片、瓦器片、瓦片などが出土した。

SD10

調査地中央にあり、SB4 を切る。南北 6.4m が残り、西に曲がって途切れながら 9m を確認した。幅は南北部が 1.1m、深

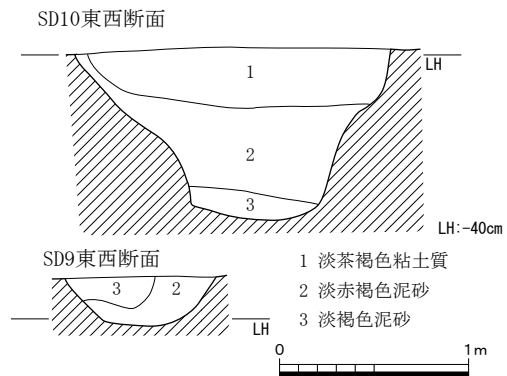


Fig. 12 SD9・10断面図(1:40)

さ 50cm。東西部が幅 35cm、深さ 10cm～20cm である。堆積は 3 層に分かれ、淡茶褐色粘質土、淡赤褐色泥砂、淡褐色泥砂である。出土遺物は土師器片、瓦片などである。

瓦溜

SK1 (PL. 10・32)

掘立柱建物 SB2 を切る瓦溜である。東側を現代の攪乱で破壊されているが、掘形は南北約 1.8m、東西 2.4m を測る。底面は東に傾斜しており、深さは西側で 9cm、東側で 32cm である。堆積は暗褐色泥土の単層であるが、上部は土よりも瓦の堆積の方が多く、瓦の間に土がまばらにある状態であった。出土遺物は巴文軒丸瓦 (PL. 18-6)、蓮華文系軒丸瓦 (PL. 19-8)、連珠文軒平瓦 (PL. 18-5 同範)、丸瓦部表面全体に唐草文軒平瓦のタタキを持つ丸瓦 (PL. 22-34)、斜格子のタタキを持つ丸瓦 (PL. 22-35) のほかに、ほぼ全体を知ることのできる丸瓦、平瓦が多量に出土している。土器類の出土は少なく、土師器、須恵器片が数点である。

SK2

A 区南東の大きな攪乱を掘りあげたのち、その北東端の底部から検出された不整形の瓦溜。径は 3m ほどで、深さは 10cm であるが、瓦の堆積がみられた。出土した瓦は SK1 と同型、同質であり、一連のものと考えられる。瓦当は梅鉢型花文軒丸瓦 (PL. 19-7)、巴文軒丸瓦 (PL. 18-6 同範) が出土している。土器類は土師器、須恵器片が数点認められたのみである。

SK3

調査地北東にあり SD2 を切り、SE1 に切られる。掘形は南北 4.8m、東西 4.2m の不整形で、深さは約 40cm で垂直の壁を持つ。掘形内の堆積は 3 層に分けられ、上層より暗褐色砂礫、黄褐色泥砂、茶褐色泥土である。各層とも火災を受けた瓦を多量に含み、下 2 層には焼土の含有もみられた。遺物は瓦当が花文軒丸瓦 (PL. 20-11 同範)、蓮華文系軒丸瓦、唐草文軒平瓦 (PL. 21-23) 3 点、別種の唐草文軒平瓦が出土している。土器類は土師器、須恵器片が少量出土したのみである。

SK10

掘立柱建物 SB1 の廂部分を切る瓦溜。掘形は南北約 3.5m、東西約 2.5m の不整形で、深さは約 10cm ほどである。掘形内の堆積は暗褐色泥砂の単層で、土と同量ほどの瓦片が含まれていた。遺物は、瓦では幾何学文軒平瓦 (PL. 21-30)、土器類は土師器、須恵器、瓦器、磁器、中世陶器片などがかなり出土している。

SK22 (PL. 32)

調査地の A 区東南端近くにある。掘形は南北 2.5m、東西 4.1m の楕円形を呈し、深さ約 40cm で、壁はほぼ垂直である。掘形内の堆積は 2 層に分けられ、上層は黄褐色粗砂のレンズ状堆積で無遺物層である。下層が暗褐色泥土の瓦堆積層で西寄りに集まっている。SK22 と SK1 で出土した瓦と、形態・質が同じであり、接合する丸瓦 (PL. 22-34) もある。SK1 出土の前面と SK22 出土の後面が接合した。他にも平瓦、丸瓦で接合したものが数点あり、SK1 と同時期に形成されたとみられる。土器類の出土点数は少なく、須恵器、瓦器、磁器片を合わせて 5 片にすぎない。

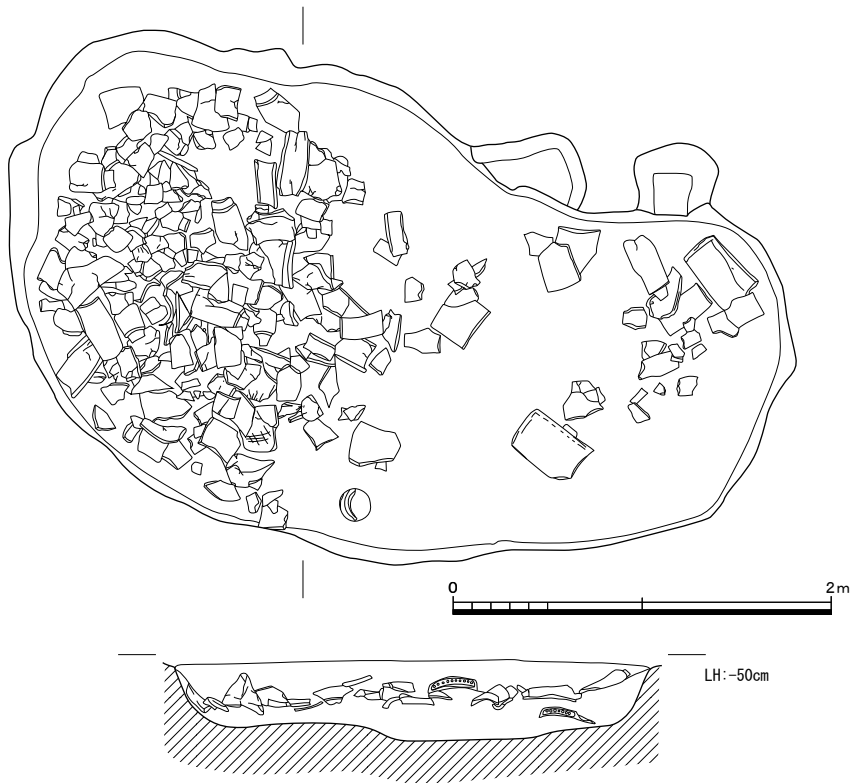


Fig. 13 SK22 平面図 (1:40)

3 鎌倉時代後期から江戸時代

ここでは鎌倉時代から江戸時代に至る遺構の概説を行う。遺構の時期区分は粗いが、中世から近世中葉まで営まれた土壙墓群を述べるのに、細かい時期区分は繁雑で理解しにくいと考えた。墓壙以外の遺構は、室町時代の溝・瓦溜の他に、江戸時代の井戸がある。

土壙墓群

土壙墓群をそれぞれの属する地区で北群(PL. 12)、南群(Fig. 14・15)とした。検出した土壙墓は北群35基、南群25基で計60基となる。土壙墓の営まれた時期は、鎌倉時代中期以降から江戸時代中期にわたり、かなり広い幅を持っている。土壙墓の掘形の平面形態、断面形態、堆積状態がそれぞれの属する時期により異なりをみせる。これを時期、形態別に3形態7種類に分けた。またこれらに含まれないものも3基検出されている。まず7種を時期の古いものから順にA～Gとし、このグループに含まれない形態を持つ土壙墓を適時加え、概説したい。また土壙墓個々については、別表にまとめたので、そちらを参照していただきたい。

鎌倉時代～室町時代

A型 掘形の形態は、平面形が平均1.9m×1.5mで長楕円から隅丸の長方形に近い。断面形は、すりばち状から浅い皿状をなす。今回検出したA型のものはすべてが浅く、30cmを越すものはみられなかった。しかし土壙墓が造成時のままで残っているとは考えられないため、もともとそれほど深く掘られていたものではないと推測している。掘形内の堆積状態は、SK4(PL. 14)のように、平均的に2～3層で単純である。上層は礫層であり、下層は茶褐色泥砂でほとんど礫を含まず、遺物の混入もわずかであった。上層の礫は5cm～10cmほどのものが多く、無秩序に落ち込んだ形で意識的な様子はない。また礫に混入してSK1・22などの瓦溜にみられた鎌倉時代前期頃の瓦片を含む。瓦についてはこれ以上新しいと考えられるものはない。土器類は、土師器皿、土師質羽釜・鍋、常滑、信楽などを検出している。しかし、これらは破片がほとんどで、副葬品、蔵骨器と考えられるものではない。同様の形態を持つ墓壙と考えられる遺構は、近年京都市内における発掘調査で相当例検出されており、当研究所だけでも数箇所の発掘調査地で検出している。共伴する遺物から、時期的には鎌倉時代中期から室町時代まで存続したと考えられる。またA型

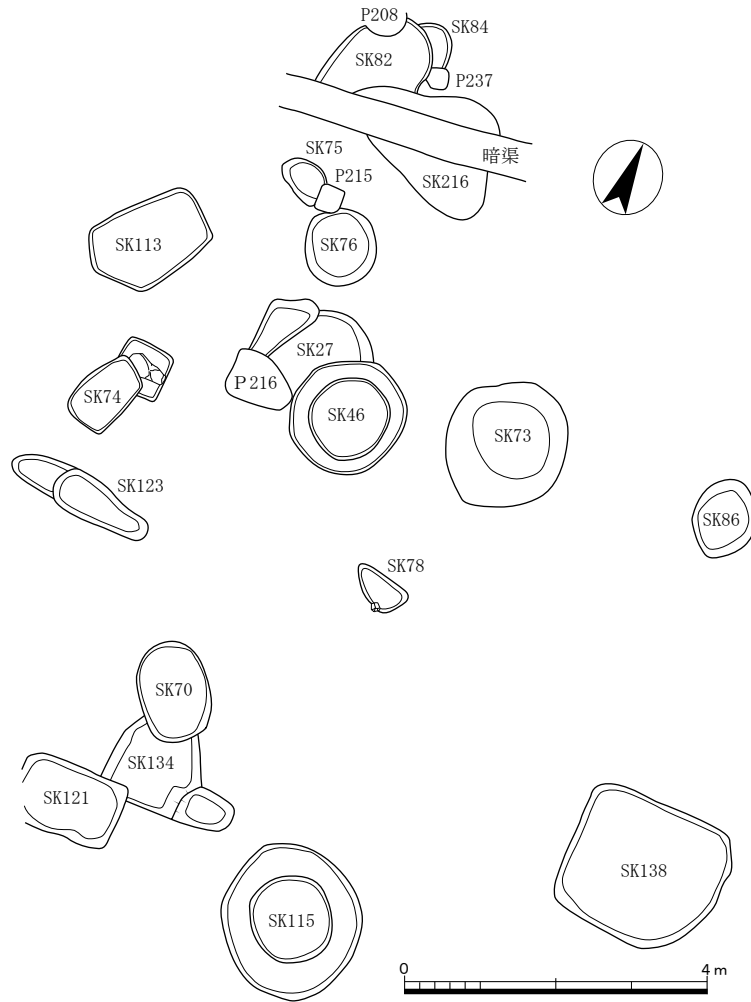


Fig. 14 土壙墓南群位地図その1(1:100)

は、北群のみにみられる形態であり、やや南に外れるSK55を除けば、すべて調査地の北西一画に集中している。

B型 掘形の形態は平面形が平均1.5m×1.0mで長方形から隅丸長方形をなす。断面形はすりばち状から、やや緩い傾斜の壁面を持ち、30cmより深いものはほとんどない。底は丸みを持つものが多く、概してA形に類似するが、掘形内にほとんど礫を含まないのが特徴である。掘形内の堆積は1～3層の単純なレンズ状堆積で暗褐色の粘性の少ない泥砂

であり砂礫を含まない。B型のいくつかの掘形から釘が検出されているが、棺に使われたとは堆積状況からもみられない。検出された遺物は、土師器皿、土師質羽釜・鍋類が多く、常滑、信楽も何点かみついている。特に副葬品と考えられる土師器皿は、土壌底部の一隅に大小混じっておかれている。これが数例あった。他の遺構との切り合い関係や、遺物からみて室町時代終り頃までのものと考えている。またB型は遺跡全体にちらばり、A型のように北群にのみ集中するということはない。

C型 掘形平面形は、平均1.6m×1.5mの方形から隅丸方形をなし、断面は壁をほぼ直立させた方形で深く、底面は平坦。全体の形は箱型である。掘形内底部に大きな礫をかなり含んでおり、SK56(PL.13)のように人の頭大を持つものもあった。掘形内の堆積は様々で、平均的な堆積状況を述べるのは困難なためSK56を例にしたい。3層の堆積で上層から黄褐色泥土、茶褐色泥砂、灰褐色泥砂である。下2層に前述の礫が含まれており、遺物の大部分もここから出土している。上層は礫・遺物とも少量の出土であった。C型から出土する遺物は土師器皿、土師質羽釜・鍋、陶磁器類、瓦であり、特別に副葬品と考えられるものはない。時期としては室町時代から江戸時代初頭と考えているが、個別の差が若干みられるので、形態上での時期比定にはやや苦しいところがある。調査地の南群に散在するが、北群には一例も検出されていない。

SK20 どのタイプにも属さないうちの一つである。掘形の平面形は長方形で2.5m×1.5m

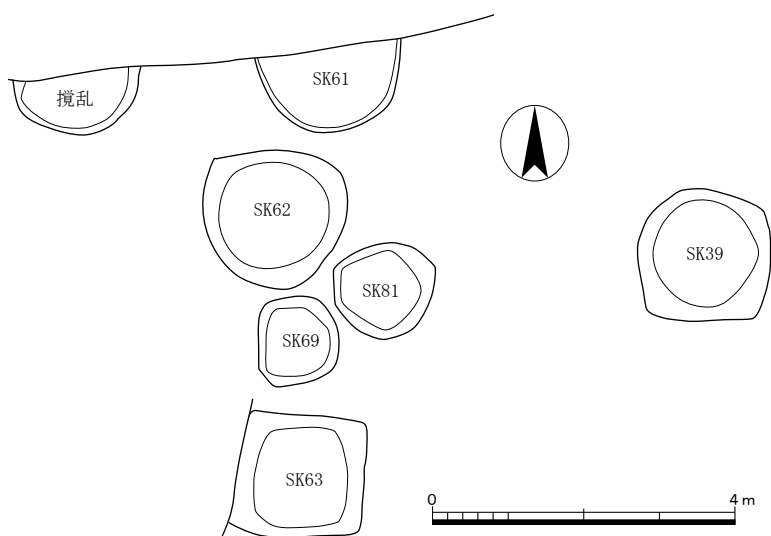


Fig. 15 土壌墓南群位置図その2(1:100)

とかなり大形である。断面形は長方形で、壁高がほぼ垂直で深さ 55cm あり、底は平坦である。掘形内の堆積は複雑で、礫はほとんどみることができず、茶褐色系統と黄褐色系統の砂質の少ない泥砂のブロック状の層が入り込んでおり、一時に埋め戻された状況がうかがえる。遺物は土師器皿、土師質羽釜・鍋、中世の無釉陶器、瓦と多量に検出されているが、特に鍋、釜類が多い (PL. 16-31・33・35～38・40・42)。しかしこれらは礫に混入した形で出土し、蔵骨器や副葬品と考えられる状況ではなかった。時期としては、鎌倉時代の終り頃から室町時代の初期であると推定している。北群に位置する。

SK30 (PL. 14) 別タイプの一つ。掘形の平面形は、2.1m × 1.35m である。断面形は長方形をなし、壁がほぼ垂直で深さ 50cm あり、底部は平坦である。掘形内の堆積は 4 層に分かれるが最下層の茶黄色土を除き径 10cm ～ 20cm ほどの礫がぎっしりとつまっていた。これらの礫は不規則に投げ込まれているだけであり、石室を構築するように積まれたものとは考えられない。礫が上部まで入っていたのはここだけであり、上部の構造にかかわるものと考えられる。遺物は、土師器皿、土師質羽釜・鍋、白磁、常滑、滑石製釜片、瓦などが礫に混入して出土しているが、副葬品と考えられるものはない。時期は鎌倉時代に比定できるが、確証はない。北群に含まれる。

SK73 (PL. 13) 別タイプの一つである。平面形は、1.9m × 1.7m のやや不揃いな隅丸方形をなし、中央に口径 33cm を持つ羽釜が据えられていた。ただしこの羽釜は底が抜けており、口縁部も半分近く欠損するが、蔵骨器とみなして良いものだと考えている。掘形は浅く、壁の断面形はだらりとした緩い傾斜を持っており、明確に土壌として掘り込まれたという形ではない。深いところで 25cm、浅いところで 8cm ほどであり、底部はデコボコしている。土層は上部の暗褐色泥砂と礫を含む灰褐色泥砂がある。礫はこの層中に規則性を持たずに配置されているが、中央の羽釜を固定する目的を持っていることはまちがいない



Fig. 16 SK30 上面検出状況 (左) 完掘状況 (右)

い。

礫層に混入する瓦は、隣接する SX7 のものではなく、SK1・22 のタイプのものであり、礫層中から検出された花文軒丸瓦 (PL. 20-12) は平安時代後期のものである。土器類は、土師器皿、土師質鍋、平安時代の須恵器などが検出されている。また瓦器の三脚を持つ羽釜のミニチュア (PL. 16-39) が礫層上より出土している。時期は鎌倉時代と考えられ、今回検出の土壌墓では、最も古いうちの一つと考えられる。南群の北端近くに位置する。

近世

D 型 掘形の平面形は平均 1.5m × 1.1m の長方形から隅丸長方形をなし、断面形は緩い傾斜を持つ。皿状であり、深さが 30cm を超すものはない。底部はやや丸みを帯びる。掘形内の堆積は平均 2 層で、上層はこぶし大の礫を多く含む暗褐色土であり、下層が底部に薄く堆積する黄褐色泥砂である。

D 型のこれまでの形状は A 型と酷似するが、ただ掘形内の遺物においては明らかな異なりをみせる。中世までの土器しか含まなかった A 型に比べ、D 型は明らかに近世陶器を含んでおり、椀、すり鉢、甕片などが多くみられる。また他に土師質羽釜・鍋、中世の無釉陶器、瓦類が検出されている。副葬品とは考えられない。時期は近世でも初頭と考えている。D 型も北群に固まっており、南群にはみられなかった。

E 型 掘形の平面形、断面形とも D 型と類似する。E 型としたのは礫がほとんど含まれないか、わずかであることによる。掘形内の堆積は 2～4 層となり、単純なレンズ状の堆積と、複雑な堆積のものに分かれる。同一形態にしているが、棺を持っていたと推定できるものもあり、画一的でないことをうかがわせる。タイプとしては B 型の系統に入り、その流れをくむ。出土遺物は近世陶器を含み、他には、土師器皿、土師質羽釜・鍋など多種にわたっている。金属製品では釘のほか、キセルの雁首、吸口なども検出されている。また副葬品として考えられる陶器の茶碗、香炉などが出土した土壌もある (SK38, PL. 17-58・59)。時期としては、近世初頭から中頃までとみられる。北群、南群に関係せず分布していた。

F 型 掘形の平面形は円形と隅丸方形の 2 種類になるが、内部構造が同一であるため個別差としている。直径、辺長とも平均して 1.9m である。

F 型の平面形上の特徴は、精査の段階で、掘形が二重 (内側はほぼ正円 1.3m ～ 1.5m) になって検出されることである。土壌の中に収めた棺が腐食して土が落ち込み、このよう

な平面形を呈するようになったと思われる。

断面形は、壁面がほぼ垂直になり深さ 50cm ほどである。棺の部分も壁面が崩れずに垂直に立ち、底部も一本溝状のものを持つがほぼ平坦である。したがって断面形は長方形を呈していると言える。堆積状態は棺の外側が黄褐色泥砂と暗褐色泥砂の混入するもの（北群）、暗黄褐色砂礫のもの（南群）に分かれるが、これは土壌の形成される地山の土の違いのみである。棺内部は 2～4 層で下層には必ず径 30cm～50cm ほどの礫をかなり含む。上層では棺の部分に土が落ち込み、窪みに別の土が堆積した状態がみられるものがあった。棺の部分には、まだ壁面に木質部を残しているもの（SK-62・81）、底部に木質部を残しているもの（SK39・41・115）と、ほとんど腐食するが明らかに桶形の棺の痕跡を残しているものがある。それらの板の痕跡から、板材の木目、幅を知ることができる。柱目の板どりが多く、幅は 10cm～15cm の間で縦長にとっている。板を継ぎ合わせるために釘を使う仕事はしていない。F 型に共通することとして棺部の底に一条の幅 15cm 以内の浅い溝がみられることであり、3cm 前後の短い釘が先端を上に向けて立った状態で 5～8 本検出される。ここからは木質片こそ検出されないが、釘には木質部を残しているものがあり、棺の底部に棧があったことがうかがえる。なお底部に大腿骨の一部を残す土壌（SK115）が一基検出されているが、他の土壌からは人骨をみるができなかった。

出土遺物は多種多様で、礫に混じって石臼・五輪塔などの石製品、土器類は土師器、須恵器を始め近世陶器までを含む。F 型は陶器碗や土師器皿の副葬品を持つものが多く、棺内より数個体検出される。SK25(PL. 17-49・50・55)、SK31(PL. 17-56)、SK62(PL. 17-51・52)の陶器類および SK39 の土師器皿 (Fig. 24) などがそれである。副葬品とは考えられないが、SK40 から棧瓦質の盤 (PL. 17-71)、SK115 より信楽のすり鉢 (Fig. 25-4) が出土している。F 型は近世の中頃に集中すると考えられ、それほど長期間にわたって続いた型ではないと考えている。調査地全域にわたって分散している。

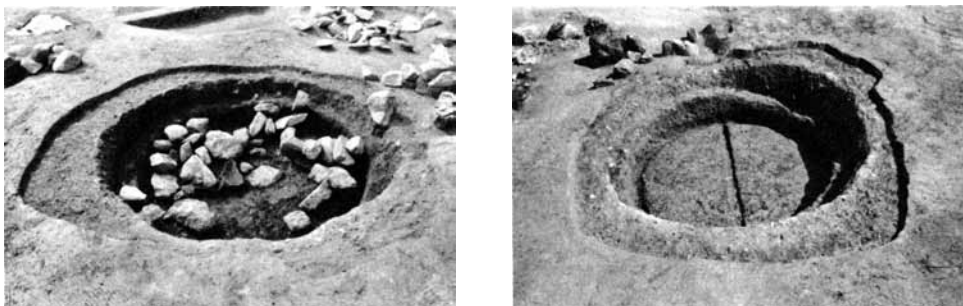


Fig. 17 SK25 上面検出状況（左） 完掘状況（右）

G型 掘形の平面形は、平均1.4m×1.2mほどのやや不揃いな円形から楕円形をなす。断面形は壁面がほぼ垂直からわずかに傾斜する程度で、深さは深いもので50cmのものがみられる。掘形内の堆積状態は2～4層に分かれ、礫をまったく含まないか、わずかに含む程度である。形態としてはF型と類似するところもあるが、異なることは掘形が二重に見えるような棺を持つ痕跡がないこと、底部付近に礫が堆積しないことなどである。出土する遺物は、土師器皿、土師質羽釜・鍋、近世陶器類、棧瓦などである。副葬品として特別に考えられるものはなく、埋め戻す際に混入したと思われる破片くらいである。この型は、近世初頭から中頃まで続いたと考えられ、調査地全域に分散している。

溝

SD1

調査地の南にあり3・10・21・24号住居、SB6・8を切り、SD6に切られる。長さ21mの南北溝で、幅は平均2mあり、深さは30cmほどである。肩口は緩く傾斜し、一部直立する部分もある。堆積は2層で、暗黄褐色粗砂、黄褐色砂礫である。北端でまっすぐに途切れ、北にのびる様相を示さない。南はSD6に途中で切られて調査地南壁断面に続く。出土遺物は土師器片、須恵器片、瓦器片、信楽、備前、常滑、瓦質火鉢、瓦片。軒瓦は五輪塔形軒丸瓦(PL.20-14)、巴文軒丸瓦、剣頭文軒平瓦2点、十曜文形軒平瓦が出土している。

SD7

調査地中央にあり、12号住居を切り、土墳墓SK91・65・88に切られる。南北溝で長さ6m、幅1.2m、深さ65cmほどで肩はわずかに外傾する。堆積する土は暗褐色泥土の単層であり、空堀状になっていたのが一時に埋められたと考えられる。出土遺物は、土師器片、須恵器片、磁器、陶器片、瓦などがある。瓦は瓦当で、長門三ツ星文形軒丸瓦(PL.20-18)、巴文軒丸瓦片2点が出土している。

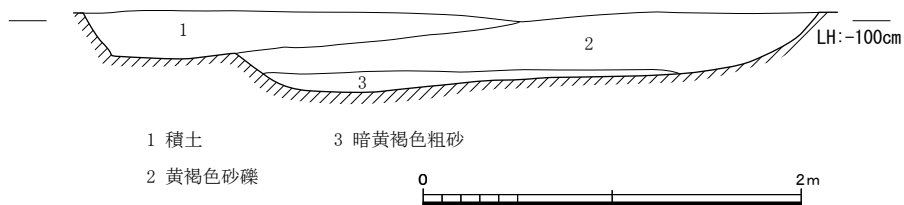


Fig. 18 SD1断面図(1:40)

瓦溜

SX7 (PL. 32)

調査地の中央東寄りにあり、平面形は不整形で、規模は南北が11m、東側は調査区域外になるが東西を6mで検出している。SX7は平均15cmで全体に浅く、最も深いところで30cmほどあり、落ち込み状になっているところに瓦を投棄している。堆積状況は、暗茶褐色泥土の単層に礫、瓦などが多量に混入する。SX7から出土する遺物は年代にかなり幅があり、瓦は唐草文軒平瓦(PL. 21-25)のような平安時代前半の瓦や、SK1・22から出土するタイプのものもみられ、かなり混乱している。土器類も土師器、須恵器片や中世の陶器類が検出されている。古銭は一枚で景德元宝(Fig. 26-1)が出土している。室町時代初期に形成されたと考えている。

SX8

調査地の南西部に位置し、近世の土壙墓SX15に切られる。掘形の形態はやや台形状をなし、南北の最大長7m、東西の最大長4.5mである。深さは40cmほどで、肩はなだらかに傾斜する。掘形内の堆積は3層で、上層から暗褐色泥砂、炭混焼土、茶褐色砂泥となり、上2層に瓦の堆積が集中している。SX8から出土する軒平・軒丸瓦を始めすべてが同一時期、同系統に属している(PL. 18-1～4)。これらは火を受けており、一時に廃棄されたものと考えられる。

SK11

SB1の身舎南側の一部を切る。南北約3m、東西約3.1mの不整形で、深さ35cmほどである。4層の堆積がみられるが、最下部の1層を除き、どの層にも瓦と礫が多く含まれていた。出土した遺物は瓦のほかに土師器、須恵器、瓦質羽釜・鍋片、陶器片、五輪塔の一部がある。近世後半に入るものと考えている。

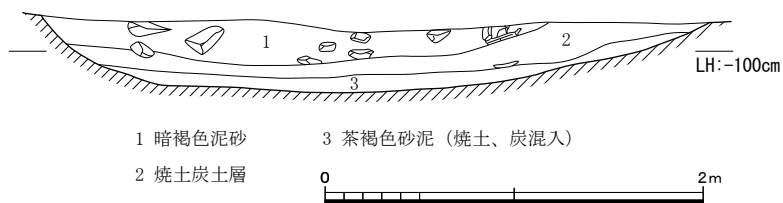


Fig. 19 SX8断面図(1:40)

井戸

SE3 調査地の北側にあり SD3 を切る井戸。素彫りであり掘形は 1.9m × 2.1m の楕円形である。深さは 6m 以上になるが、最低部を確認するには至らなかった。出土遺物は、陶器、瓦類のほか、木器ではつるべが 3 個体と柄杓、尺杖が検出されている。また地表より約 5m 下で寛永通寶 91 枚が紐に通された形で (PL. 36) みつかっている。この寛永通寶はすべて 18 世紀中頃までのもので、それより新しいものは出土していない。寛永通寶のみつかった地表下 5m の層は、上記の木器類や、同時代と考えられる陶器類などが検出されている。地表下 3m あたりでは現代に近くなりガラス片などが混じる。長く野井戸となっていたのを、廃棄する際にごみ捨て穴に利用したのであろう。

その他に不明な遺構として SK54 (PL. 13) がある。石積みの遺構で、南北 2.6m、東西 2m の規模を持ち、遺構面より 30cm 近く積みあげられている。石積みの下は焼土、炭層になっており、深さ 20cm ほどの堆積である。出土遺物は瓦が多く、他に土師器皿、磁器、須恵器片などがみられる。遺物からは鎌倉時代頃であることがうかがえるが、遺構の性格は不明である。

小結

土墳墓を形態により 7 種類に分類し、さらにこれを大きく 3 群に分けた。すなわち① -A・B・D・E の長方形から長楕円形の平面形をなすもの。② -C の方形、隅丸方形の平面形をなすもの。③ -F・G の円形の平面形をなすものである。これにより、各群を存続時期別にグラフ (Fig. 20) を造ってみた。

①グループの A・D は礫を多く含む型で、棺は持たないと考えられる。しかし直葬としては土壌が浅く土量も少ない。また堆積状態も、他の土葬と考えられる墓と比較すると単純なものが多い。このことより A・D は火葬墓である可能性も考えられる。最も火葬墓として確実な根拠となる火葬骨、蔵骨器などは発見されておらず、一部の土壌に焼土、灰が礫下面にわずかにみられるのみであり、積極的な根拠には乏しい。しかし A の頃には一般庶民にも火葬が広まった時期であり、蔵骨器をみても土器、金属器に限ることなく布状のもので包むだけのものもあり、拾骨した火葬骨を土壌内に収め、積み石した埋葬^{註1}であっても良いと考えている。しかし今回の調査では火葬所と思われる遺構や、火葬所 = 埋葬所と

考えられる遺構は検出できなかった。

B・E型には、土壌の隅に釘がみられるものがあり、棺を持っていたものもあると考えられる。また底部付近にわずかに焼土がみられるものもある。が、多くは直葬であったと考えられる。

②群C、③群F、Gは明らかに土葬の墓ばかりである。中でもFは棺を持っており「槨」状であったことが明瞭である。Cは明瞭な棺の痕跡を残していないが、釘などが多く検出され。Gは棺の有無が不明瞭である。今回の場合、墓と考えられても人骨などの残る土壌はSK115に一例みられただけであり、骨の残りはよくない。何度かの土地の改修などで破壊されたと思われる、上部構造のわかるものは一例も検出されていない。

前項でタイプ別に北群、南群に分けたが、各タイプの群構成において目立つのは、A・D型が北群に、C型が南群にだけみられることである。しかし土壌墓の時期が新しくなるに

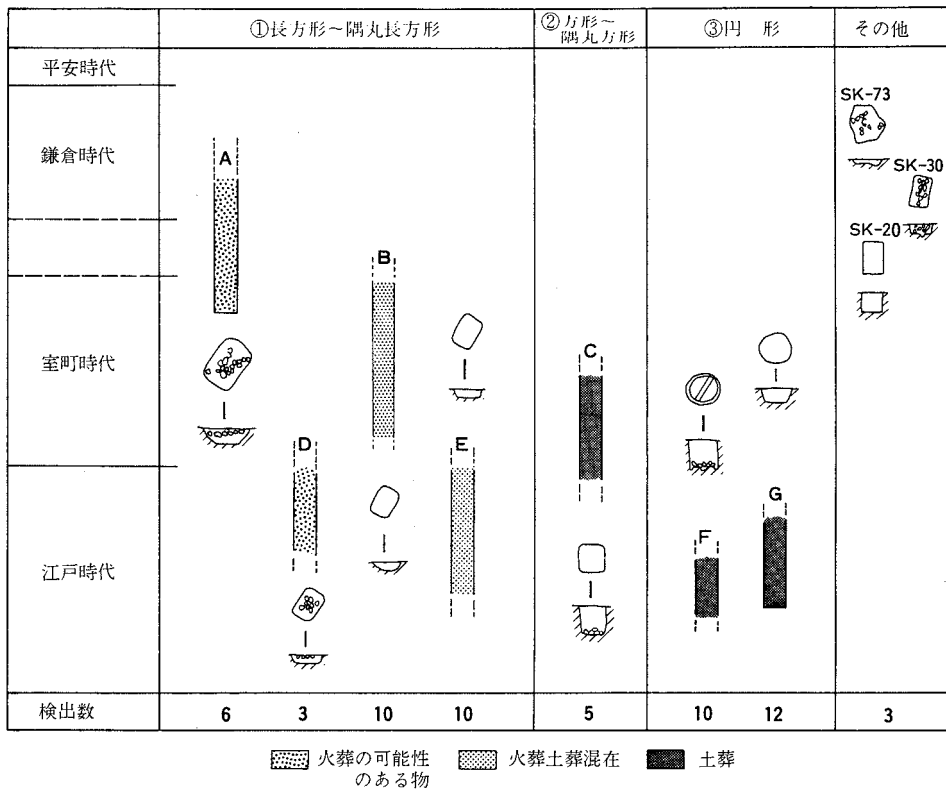


Fig. 20 土壌墓分類図

従い、この形態はみられず、それぞれ入り混じるようになる。さらに2群に分けたとおり、墓壇はSK4・34・40・55がやや集中する傾向をみせる。そのためSB2やSD9のある調査地中央にはSK55以外にはみられない。このように集中することと、タイプ別で群として固まる傾向については、墓域の規定や、村落の惣墓的、同族の家墓的な性格もあったのではないかと考えられる。

今回の場合、特に墓域を規定すると思われる溝や柵状の遺構は検出されていないが、鎌倉時代から江戸時代にわたり長期間使用され続けてきたことは、墓域としてかなり強い認識があったと考えられる。この南北両群の土壇墓域で、鎌倉時代以後の遺構がまとまらない柱穴群ばかりであることは（南群の柱穴も室町時代以降は激減する）、その意識の表われともみられる。このことを地域的に概観してみると、調査地は太秦広隆寺の北東にあたり、広隆寺の寺域に入るのではないかと推定されていた地域である。寺院付近に墓所を設けることについては『日本紀略』^{註2}に9世紀前半に恒世親王を鳥部寺に、10世紀中頃に藤原忠平を法性寺の付近に葬ったという記事が載せられており、行われていたのは明らかである。これより時代が下るにつれて庶民の間にも寺院付近に墓所を設けることが次第に広がり、江戸時代の寛永11年(1634)の寺請制度によって寺と庶民のつながりが密接になるに従い定着したといえる。今回の調査で検出した墓壇群が広隆寺に関するものであるかどうかは定かではないが、広隆寺は、室町時代から江戸時代には、大きな変動はみられなかった^{註3}が、寺域の北東付近を墓地として利用していたとみられる。

後世、寺域内に墓地が形成されて行く例は、畿内では奈良市の元興寺極楽坊^{註4}、大阪府河内長野市の天野山金剛寺^{註5}が知られている。元興寺極楽坊は墓碑あるいは舟形五輪板碑などの紀年銘などから16世紀初頭には墓地となっていたことがわかる。また極楽坊からは羽釜などの蔵骨器が多く出土しており、火葬であったことがうかがえる。またこれら羽釜などを転用した蔵骨器には、墨書で「南無阿弥陀仏」などの念仏のほか、紀年銘の記されたものがあり、北朝年号康永元年(1342)、応永5年(1398)が読みとれる。これらの年号は、墓碑などに記された年号(16世紀初頭)以前であり、直接埋葬には使用されなかったが、寺院がその中に遺骨を納めることを認めた事例としてあげられよう。また天野山金剛寺も中世の墓地であるが、ここでは墓地の運営に計画性がみられ、墓道の設置、広場の設置、区画整理などがされている。これは元興寺極楽坊の墓地にも多少うかがえ、ある程度の復元は可能であると言われている。

今回の調査地では、前記のとおり、溝、柵、墓道などの検出はされなかったが、北群と

南群の間に広場が残っていることは、ここでもある程度の計画性が保たれていたものとみられる。また調査地の北側を通る道が古道の可能性があり、交通の便が良くなること、南向きの台地上にあること、寺院の周辺であることなどを合わせ、墓地の立地として十分条件を満たしている。

人々は先史時代からの生活の繰り返しのなかで、葬送の際には多様な方法での埋葬を行っている。今回検出された遺構は、そのわずかを物語るものであるが、中世～近世の埋葬方法の一端を知ることができたとみている。 (鈴木廣司)

註

- 1 香川県高瀬町上高瀬出土の銅製蔵骨器内面に布痕が認められる。(『墳墓』仏教考古学講座第7巻 雄心閣 1975年) これより蔵骨器を伴わず、布で火葬骨を包むだけの埋葬もありうると想定した。
- 2 『日本紀略』新版増補国史大系 吉川弘文館 1975年
- 3 石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』第一書房 1944年
- 4 『仏教民族』元興寺仏教民族資料研究所 1967年
- 5 『天野山金剛寺中世墓地発掘調査概要』『河内長野市文化財調査概要』金剛寺坊跡調査会 1975年)

第3章 遺物

各時代の遺構に伴う遺物が出土している。総量は、整理箱にして291箱あるが、瓦類が最も多量であり全体の80%を越える。次いで中世から近世の土師器皿、土師質鍋・釜、陶磁器類となり。竪穴住居が属する古墳時代では、土師器・須恵器類はわずかであり、全出土量の3%にも満たない量であった。

図版に示した個々の遺物の観察記録は、後付の遺物観察表に記述した。ここでは、各時代の遺物の全体的な所見について記述したい。

1 古墳時代

図版(PL. 15-1～29)の1～20までが須恵器、21～29までが土師器である。前述のとおり出土点数が非常に少ないが、土器類から知り得たことをあげておきたい。

須恵器では杯の蓋・身、長頸壺の口縁部、甕の口縁部・頸部以上が欠けるもの・体部片、壺の底部・体部片、大甕の口頸部・体部片、肩部に円形の簡易な突起を持つ提瓶の体部上半がある。他に各器種の細片が出土している。量は土師器と比較して1/3にもならない。器形別の特徴としては、杯の蓋・身の口径が小型化してきており、復元の誤差を差し引いても15cmを越すものではなく、器高も全体に低くなってきている。調整方法も簡略化が目立つ。杯蓋は2種類がみられ、天井部がロクロの回転を利用したヘラ切りのみで平坦になり、ほとんど調整を行わず、体部との境界線が明瞭に認められるタイプ(PL. 15-1・3)と、もう一方は天井部の調整が若干みられ、天井部から体部にかけて丸みを持ち境界線が不明瞭なタイプ(PL. 15-2)がみられる。口縁端部は両タイプとも、やや尖り気味に丸く収めている。杯身は肉厚で鋭さに欠けた立ち上がり部、受け部を持つ。立ち上がり部は内傾の度合いが強く、低くなるが、立ち上がり部と受け部の高さが接近するものはない。受け部の端部は丸みを帯びる。また、立ち上がり部がやや肉薄でわずかに長く、鋭さのなごりをとどめるもの(PL. 15-5・8)もあるが、個体差の範囲にとどまり、明らかな形式上の差とはならない。胎土は全体に、長石などを含む細かい砂粒が多く、緻密ではない。焼成、色調は、淡青灰色から暗灰褐色を呈するものが硬質で、淡灰色から黄灰色を呈するものが軟質で焼きが甘い。

土師器は、ヘラミガキのある杯、椀類と、ハケメ調整のある椀、深鉢、壺、甕類が検出

されている。ヘラミガキによる調整のものは、内面に放射状の暗文を施し、外面は口縁部から体部中ほどまでヘラミガキを行うが、簡易に済ませている。杯類では口縁端部が外反する高杯と考えられるもの (PL. 15-21)、体部に丸みを持ち、口縁部から上方にのび、端部を丸く収めるもの (PL. 15-22・23)、口縁部内面に段を持つもの (PL. 15-24) に分かれる。全般に焼成は良好で、色調は赤褐色をなし、胎土は砂質が少なく緻密である。壺、甕、鉢類を含めた出土破片約 300 片あまりのうち、体部の内外両面にハケメによる調整がみられるもの (A) が 60% をしめる。他に外面にハケによる調整を行い、内面をナデ、あるいは指オサエによる簡易な調整を行うもの (B) が 20%。摩滅が激しく、ハケメ、ナデなどの観察ができなかったもの (C) が 20% となった。胎土に長石、石英などの細かい粒子を多く含むものは (A) に多く、(C)・(B) はグループ中の半数にも満たない。焼成・色調は全体に淡赤褐色のものが硬質で、黄白色を帯びるものはやや軟質になる。この他 (B) には、焼成のむらがなく薄手で、暗茶褐色を呈しやや硬めの破片があるが、量としては 20 数片である。甕は口縁部を残すものは数少ないが、口縁部が外傾し「く」の字状を呈しそのまま端部に至るもの (PL. 15-29) と、内湾気味に上方にのびるものとがみられる。口縁端部の調整は上端を平坦にするもの、丸く収めるもの、端部内側にわずかにつまみ出された凸線を持つもの、外側に凸線を持つものなど四つの手法がみられた。また口縁部にもナデのほか、ハケメによる調整を行っているものが数点みられた。

小結

以上に記した須恵器、土師器の観察より導き出されることは、形態的に当遺跡の属する嵯峨野一带の古墳、群集墳を調査された報告書『嵯峨野の古墳時代^{註1}』にあげられている 6 世紀末～7 世紀前半の土器類に平行すると考えられる。須恵器の杯の蓋・身でいえば、編年されている第Ⅲ期から第Ⅳ期にあたる。特に杯蓋において、第Ⅳ期にされている天井部を平坦に切ったもの、杯身の立ち上がり部、受け部の肉厚さ、底部に回転ヘラ切りがみられることなどは、今回出土した杯類に酷似するといえる。また、当研究所が昭和 49 年 (1976) に発掘調査を行った今回の調査地の北東に近隣する常盤東ノ町古墳群 (以下『東ノ町』と略す^{註2}) の石室内から出土する須恵器にも同様のタイプが多くみられる。ただし『東ノ町』の場合には『嵯峨野の古墳時代』で編年された第Ⅱ期の『陶邑Ⅰ^{註3}』の (編年では TK-209 に比定されている) 時期に比定できる杯の蓋と身 (2 号墳出土の一部) から、『陶邑Ⅰ』では TK-217 から出現した宝珠形つまみを持つ蓋、杯蓋を反対にした形で杯身としている

タイプ(3号墳出土)と形式差が明らかであり、今回出土のものは東ノ町1号墳、2号墳出土の一部のものしか共通点がない。『東ノ町』の場合では、須恵器の編年を念頭に置けば、上限、下限が半世紀前後の差とみられるのに比べ、さらに限定された短期間に住居が造り替えられたことになる。このことは『嵯峨野の古墳時代』の編年で与えられた年代比定と合わせ考えてもいえることである。前述の今回の調査において出土した須恵器からは、東ノ町3号墳でみられたような、宝珠形のつまみを持つ蓋や、杯蓋を反対にして杯に使用した形のもの、またそれに高台を付けた形の杯などの破片すら検出していない。他の器形では7世紀前後になってからみられるタイプである長頸壺(PL. 15-13)や、小形化してくる提瓶(PL. 15-19)、甕(PL. 15-16)は検出されたが、これらより古い形式に属すると考えられるものは出土していない。したがって、上記した年代が与えられよう。

一方、土師器については、杯にヘラミガキのあるタイプで口縁部がやや内湾気味に上方に立ち上がるもの(PL. 15-22・23)がみられる。これは飛鳥・藤原宮発掘調査による出土の土師器杯類で、例えば坂田寺跡調査で第2期7世紀前半にされているSG100出土のCⅡ類、CⅢ類とされている杯や、これも7世紀前半に比定されているSG070^{註4}の杯と(これらの飛鳥・藤原の土師器は、同遺構内に宝珠形のつまみを持つ須恵器の蓋を共伴する)、今回出土の土師器の口縁径を同じくする杯類とでは、口縁部の外傾度はさらに少ないと言える。今回出土の杯類とヘラミガキ、暗文などの手法についても大きな差は認められない。また暗文の間隔がやや広く、低い位置にあるという違いはあるが、同時期ないしは、より近い時期であると思われる。特にSG100の場合、須恵器に宝珠形のつまみを持つ杯蓋・身のセットのほかに、今回の調査で検出されたものと同様な、立ち上がり部の低い杯身や杯蓋が共伴して出土しており、杯類は少なくとも7世紀前半までには収まると考えられる。また、PL. 15-24の杯は、口縁端部をやや内側に巻き込むタイプで、口径がやや広く器高が低くなる器形から奈良時代に入るものと考えられるが、堅穴住居から出土したものではなく、一応時期決定の資料外としたい。

次いで、壺、甕になるが、前記のように体部内外両面、さらには口縁部の内外両面にハケによる調整がみられるものがあるが、これは近江・山城系の土師器に多く行われる調整である。今回出土の土師器には、この調整法のみでなく、口縁部が「く」の字状を呈し、やや内湾気味に上方に開く器形(PL. 15-27～29)の、近江・山城系の甕であると考えられるものがある。滋賀県の湖西線調査報告書^{註6}で6世紀後半とされている甕類に類型がみられる。また椀も、同報告書内に同系統の端部を持つもの(口縁端部をわずかに外反させる)

がみられ、他の地域の同時期にこれらがみられないことから、6世紀末～7世紀前半に考えてよいと思われる。

したがって、これらの須恵器、土師器類から引き出される時期は、大まかに6世紀末から7世紀前半とみられる。須恵器は、7世紀前半でも相対的な年代しか与えられないが、比較的年代が限られる土師器と合せても半世紀を越えることはないと考えられ、竪穴住居群の大まかな存続期間の把握はできる。ただし、実際には、個々の竪穴住居から出土する遺物を比較しても、明らかな時期差を認めることはできず、各住居個々の成立、存続時期を明確に求めることは困難であった。

(鈴木廣司・伊藤 潔)

註

- 1 京都大学考古学研究会『御堂ヶ池群集墳発掘調査報告』「嵯峨野の古墳時代」 1971年
- 2 京都市埋蔵文化財研究所『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 I 1977年
- 3 田辺昭三『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ 1966年
- 4 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 3』奈良国立文化財研究所 1973年
- 5 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 I』奈良国立文化財研究所学報 第27冊 1976年
- 6 湖西線関係遺跡発掘調査団『湖西線関係遺跡調査報告書』 1973年

2 平安時代から鎌倉時代

平安時代の遺物は瓦類と SD3 の土師器、瓦器を除いてみるべきものがない。

瓦類については、後節で出土瓦個々についての記述を行なうため、ここでの解説は省きたい。

SD3 出土

SD3 より出土する遺物は土師器皿が大部分を占め、完形品、復元可能なもの、実測、観察可能なものを総合すると 1,500 点余りを数える。さらに接合、実測に至らなかった細片は遺物箱にして 5 箱と多量である。他の土器類は出土点数、種類とも乏しく、瓦器、磁器が少量みられるのみである。瓦は遺構の章にも記したが、瓦当を持つもの 10 数点のほか、破片も多く出土している。SD3 より出土の土師質土器類は Fig. 21-1 ~ 22・24 に示した。これらは完形品の一部であるが、その他の実測可能なものにおいても、たいした器形差はなく、いずれかのタイプに含まれると考えられるため、SD3 の土師質土器の代表的器形例として扱いたい。1 ~ 22・24 の土師器皿、23 の青磁杯、25 の瓦器碗の個々の観察記録は Tab. 1 に記しておいた。

1 の粘土板を簡易に成形しただけのものは発生の時期に問題があり、明解な答えが出ていないが、今回の場合少量ではあっても SD3 の堆積状態、出土状況からみて、他の出土遺物と共伴するものであると考えられる。

2、3 は平底で口縁部が内側に折り曲げられるタイプである。折り曲げの角度はそれほどきついものでなく、口縁端部も丸く収められている。口縁部のナデは底部近くまでおよぶものがほとんどである。出土例も多く、京都市内で行なわれた発掘調査では平安京左京四条一坊跡^{註1}（以下、『左京四条一坊』と略する）、鳥羽離宮跡^{註2}の一連の調査のものが代表にあげられよう。

4 ~ 13 までの土師器皿は口縁径が平均して 9 cm ~ 10 cm のものであり、同口径のものでグループとしてとらえられることから、仮に I 群としておきたい。I 群でも器形の特徴的な部分をとらえて分類すると 10 タイプに分かれる。それぞれのタイプは Fig. 21-4 ~ 13、Tab. 1-4 ~ 13 に示したとおりである。各器形の細かい部分にとらわれず、大まかにみれば 3 種に分けられる。A 内湾気味の体部を持ち、口縁部の器壁が底部より薄く上方に直

立気味になり、口縁端部は丸く収まる。胎土には砂が少なく緻密なものであり、焼成は硬く締まる (Fig. 21-4・6・11・12)。B 外傾する体部を持つものと、内湾する体部を持つものがあるが、Bとしたのは共通して体部外面のナデの強さにより、中ほどあるいは底部との境に明瞭な段を形成するからである。口縁端部は内方にやや尖り気味に成形されるものが多い。胎土には微砂、細砂をかなり含むが、粗砂は含まない。焼成は硬質のものもあるが、全体にAに比較すると甘いものが多い (Fig. 21-8・9・10・13)。C 器高が低く、体部が緩やかに外傾し、口縁部が上方につまみ上げられ、端部をやや内方に尖り気味にするタイプである。胎土は砂をかなり含むものが多い。焼成は良く、硬く焼きしめられている。すべての底部内面にタテナデが施されている。Fig. 21-7・5がCタイプに含まれると考えられる。種別の器形の特徴は、Aのほとんどが比較的端正でまともな形を保っているのに対し、B・Cの多くは口縁部、体部に歪みを持ちやや雑である。

以上のように器形による分類は3種であるが、胎土面からは2系統と考えられる。即ち砂をほとんど含まず、緻密な胎土を持ち焼成も良いもの (A)。長石、石英などを含む細かい砂がかなり胎土中にみられ、焼成のやや甘いものが多い (B・C)。同様に、15 cm前後の土師器皿 (Ⅱ群とする) についても、器形、胎土で分類することができる。Ⅰ群のA

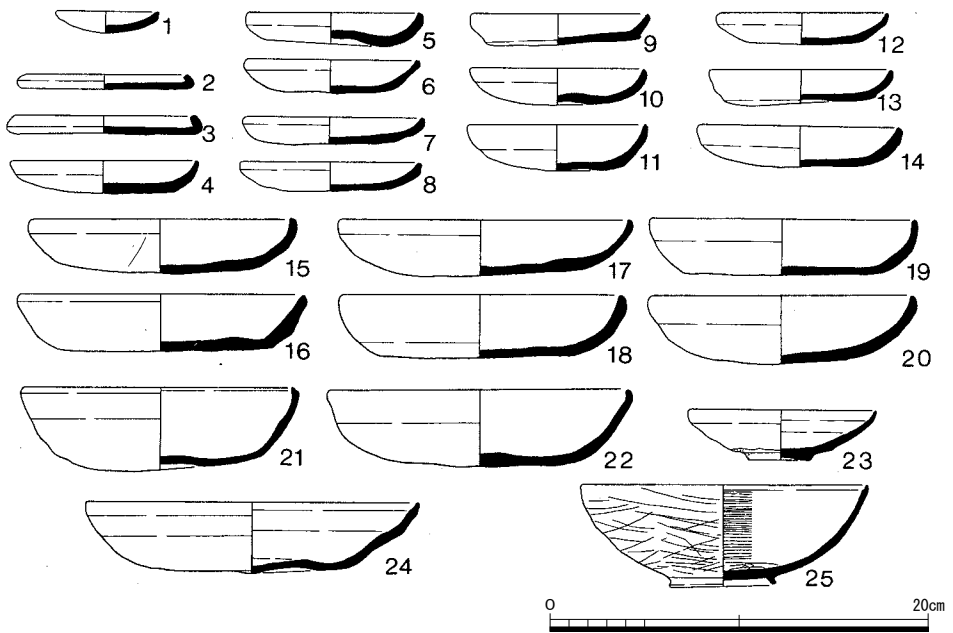


Fig. 21 SD3 出土土器実測図 (1:4)

にあてはまるものは、Ⅱ群ではFig. 21-15・17・19であり、全体的な器形、胎土、焼成の特徴と共通するものを持つ。Ⅰ群のBにあてはまるものはⅡ群ではFig. 21-16・18・20であり、器形、調整、胎土、焼成の特徴ともやはり共通する部分を持つ。しかしⅠ群のCにあてはまるような低い器高、体部の緩い傾斜を持つものはⅡ群には検出されていない。Ⅱ群は二つに分けることができたが、Ⅰ群よりも器形の個体差が著しく、Fig. 21にあげた6タイプがⅡ群の代表ではあるが、中に少数の例外があることを断っておきたい。

この例外とできるFig. 21-21・22・24がある。21の口縁径は15cm弱であるが、器高は深く4.5cmを測り、むしろ椀に近いものである。系統的にはBに含まれる。22は口縁径、器高ともⅡ群の平均より増大するものであるが、系統的にはAに含まれる。24はSD3から出土した土師器皿のうちでは最大のものであり、器形・調整法ともA、Bとは異なる。しかも24は一品のみの出土であり、SD3出土の土師器群の中では特異な存在といえよう。

以上のように24を除いたⅠ群、Ⅱ群の土師器皿はA、B(Ⅰ群のみCが認められる)のどちらかに区別できた。このような判別が可能であるのは器形、調整、胎土に明確に差が認められるためで、これは生産地が異なることで生じたと考えられる。また今回分けたA、Bにしても、平安京内の平安時代後期～鎌倉時代前期の遺構では併存して検出されるタイプであり、遺構による偏りはみられないことから、これらの生産地を割り出すことが今後の課題といえよう。またSD3出土の土師器皿の時期比定については、左京四条一坊跡・常盤井殿町^{註3}の報告書中の編年を参考にさせていただいた。これらによると、今回出土の土師器皿は、『左京四条一坊』の平安時代Ⅲ期前半にあてはまり、その内の寛治5年(1091)墨書の土器の時期よりは新しいと考えられる。また鎌倉時代Ⅰ期とされた土師質土器群の中にみられた、平底で口縁部を内側に折り曲げるタイプの皿で、口縁端部が尖り気味になる傾向や、成形が簡略化される傾向は、今回の同じ形態を持つ皿の中にはみられず、鎌倉時代Ⅰ期以前のものであると推定される。これらより、まず時期を平安時代後期から鎌倉時代初期の12世紀頃とし、他のSD3における遺物を参照することで時期を限定したい。Fig. 21-25の瓦器椀は、やや丁寧さに欠ける傾向はあるが、体部外面のへらミガキが口縁部付近から底部の高台近くまで施されており、体部内面のへらミガキもかなり密に施され、底部近くに至る。また底部内面の螺旋状の暗文も、簡略化されたものでなく花を模した感じが明らかに認められる。口縁端部は内側に段を有し、端部上面は丸みを帯びる。高台は端部がやや外方に張り出しぎみで、外方にふんばる形となる。この瓦器椀の手法、形態状の特徴は鳥羽離宮跡から出土する一連の瓦器椀と酷似する。鳥羽離宮の経営は応徳3

年(1086)から13世紀初頭までとされているが、今回出土の瓦器椀と比較できるのは東殿跡(1137年造営)出土、田中殿跡(1152年造営)出土の瓦器類である。また今回出土の瓦器椀を『左京四条一坊』の編年資料と比較しても、平安時代Ⅲ期前半のSE8出土の瓦器椀より形式的に新しいと考えられ、鎌倉時代Ⅰ期の瓦器椀よりは、体部・内外面のヘラミガキの密度、高台部の外反の度合いなどを考慮に入れるなら、より古い形を保っている。

瓦は瓦当面を持つものが、花文軒丸瓦(PL.20-11)、巴文軒丸瓦(PL.20-10)、唐草文軒平瓦(PL.21-23)と出土している。これらは鳥羽離宮跡に多く出土しているものと同範であり、前期の瓦器椀のタイプおよび今回出土のものと同タイプの土師皿と同時期に考えられる瓦当である。SD3出土の丸・平瓦片もタタキ目、布目を有し、平安時代後期に増加してくる小型化、成形・調整の簡略化、焼成の軟化した瓦が出土することからも平安時代後期をSD3の時期と推定できる。

特に今回SD3から出土した土器類の時期比定に使用した、左京四条一坊跡SE8出土の寛治5年の墨書一括の土器類は、基準資料として考えられ、今回の土器の上限を定めることができた。鳥羽離宮跡出土の遺物は、同離宮が文献において、その存続時期の上・下限が明確であるため、遺物の位置付けが可能であった。これらのことを総合すると、SD3の時期は12世紀中頃から末期頃と考えてよからう。

SD3出土の土師器皿を1～3の例を除いて、口縁径、器高の寸法を対象にしてグラフを作成すると(Fig.22)のようになる。このグラフは口縁径、器高とも計測可能な約1,200点に対して行なった結果である。ただし完形品の皿にしても、正円をなすものはほとん

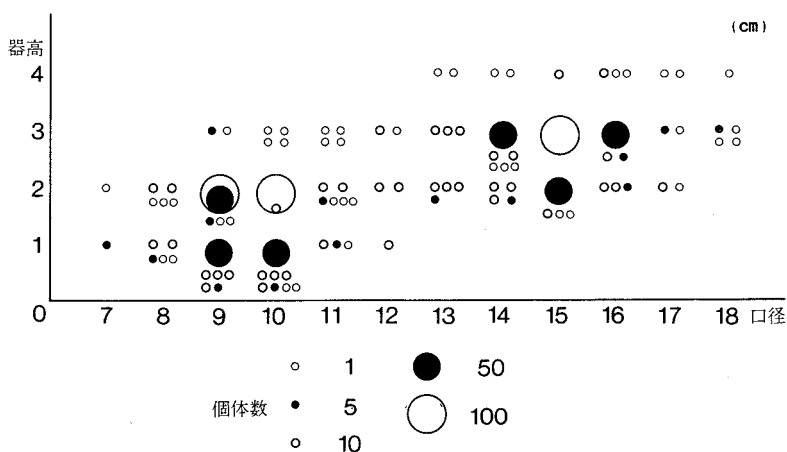


Fig. 22 SD3出土土師器皿の器高・口径による分布図

どなく歪みを持っている。口縁部片については円周の1/10以上で底部まで残るものと限定したが、完形品に歪みが認められる以上必然的に誤差は生じる。したがってこれらの誤差域を含めての1cm単位の目盛りの範囲に収めることにしたため、例えば実測値で口縁径9.4cm、器高2.2cmと計測できたものについても、口縁径9cm、器高2cmのグラフの位置に収めた。したがって実際には各単位の間隔の内に細かいばらつきがあると考えられるが、端数を四捨五入してグラフを作成している。(口縁径で7cm未満のものではなく、また器高も1cm未満のものはない) グラフの示すように集中するのは口縁径9cm～10cm、器高1cm～2cm(Ⅰ群)の所と、口縁径14cm～16cm、器高2cm～3cm(Ⅱ群)の所である。これら二箇所の周囲に若干数がみられ、離れると極端に数量が減少するのがわかり、ある程度基準を持って造られていたという推測が成り立つ。しかしこれも口縁径、器高を大まかに決めただけであろうと考えられ(重量、容量ともばらつきが激しい)、文章にして残すほどの厳格な規定はなかったようだ。

註

- 1 平安京調査会『平安京跡発掘調査報告 - 左京四条一坊 -』 1975年
- 2 杉山信三『院の御所と御堂』 1962年
京都府教育委員会『埋蔵文化財調査概報』1965・66・67・68・70年
鳥羽離宮跡調査研究所『鳥羽離宮跡』 1972年
「史跡・西寺跡・鳥羽離宮跡」『京都市埋蔵文化財年次報告』1973年 - II
「鳥羽離宮跡・史跡西寺跡」『京都市埋蔵文化財年次報告』1974年 - IV
- 3 同志社大学校地学術調査委員会『常盤井殿町遺跡発掘調査概報』 1978年

挿図 番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	焼成色調	胎土	備考
1	土 師 皿	小皿	全体に丸みをおび、均一な器壁をもつ。	粘土板を、型に布を敷きおしあて成形。外面オサエ。	硬質 淡赤褐色	砂少なく 緻密	10点に満たない。
2 3		平坦な底部に短く折り曲げられ内傾する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。	口縁部外面、底部内面をナデ。底部外面はオサエのみ。	やや軟質 淡茶褐色	砂少なく 緻密	完形品が少なく出土量も50点ほどある。	
4		平坦な底部に内湾気味の体部がつづき、口縁部はほぼ直立する。口縁端部に至るにつれ器壁は薄くなるが、上端面は丸くおさまる。	口縁部体部内外面ナデ、底部内面タテナデ、底部外面オサエ。	硬質 赤褐色	砂少なく 緻密		
5		底部中央が盛り上り内湾気味の体部をもつ。口縁端部は内傾気味に内方に尖らされる。	口縁部体部内面ナデ、底部内面タテナデ、底部外面オサエ。	硬質 淡褐色	わずかに 砂を含む		
6		外傾する体部が、口縁端部に至り短く上方につままれる。口縁部の器壁は底部より薄い。口縁端部は丸くおさまる。	口縁部体部内面ナデ、底部外面オサエ。	硬質 淡茶褐色	砂少なく 緻密	端正な仕上がりのも が多い。出土点数も多 い。	
7		器高が低く、緩やかに外傾する体部から口縁端部が内方に尖り気味に上方にのびる。平均して底部は平坦になる。	体部内外面にナデ。口縁端部のみ再度ナデを施す。底部内面タテナデ、外面オサエ。	硬質淡 赤褐色	砂をかなり 含む	このタイプは全体に口 縁部の歪みが大きである。 出土点数多い。	
8		丸みをもち外傾する体部とほぼ直立する口縁部が、体部外面にナデにより成形された稜線で分けられる。口縁部はやや肉厚になり、端部は丸くおさまる。	口縁部体部内面ナデ、体部外面、底部オサエ。	やや硬質 淡赤褐色	微砂をか なり含む		
9		体部外面で底部近くまでナデが施され、段を成形する。体部は外傾気味にまっすぐ口縁部に至り端部は丸くおさまる。	体部内外面ナデ、底部外面オサエ。	やや硬質 淡赤褐色	微砂をか なり含む		
10		内湾気味の体部口縁部をもつ。体部外面にナデによる段が認められる。口縁端部は内方に尖り気味にされる。底部中央が盛り上る。	体部内外面ナデ、底部外面オサエ。	硬質 淡赤褐色	砂をかな り含む	このタイプも出土点数 は多い。	
11		器高が深く、内湾気味の体部にまっすぐ上方にのびる口縁部をもつ。端部は丸くおさまる。	体部内面、外面の程までナデ、底部オサエ。	硬質 淡茶褐色	砂少なく 緻密	同口縁径の群中では器 高が深いタイプ。出土 点数は少ない。	
12		外傾気味の体部にまっすぐ上方にのびる口縁部をもつ。端部は丸くおさまる。	口縁部体部内面ナデ、底部オサエ。	硬質 茶褐色	砂少なく 緻密		
13		内湾する体部、口縁部をもち体部外面と底部との境に段を成形する。口縁端部は内方にやや尖り気味にされる。	体部底部内面までナデ、底部外面オサエ。	やや軟質 淡茶褐色	細砂をか なり含む	このタイプの出土点数 も多い	

Tab. 1 SD3 出土土器観察表 (Fig. 21 参照)

挿図 番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	焼成色調	胎土	備考
14	土 師 器	皿	外傾する体部は肉厚になり口縁部に至る。口縁端部は内方に尖り気味につままれる。	体部内面、外面中ほどまでナデ。底部内面タテナデ、外面オサエ。	硬質 淡赤褐色	砂少なく 緻密	4～13までに比べて口縁径がひと回り大きい。
15			内湾気味の体部をもち、口縁部はほぼまっすぐ上方にのびる。口縁端部上面は平坦にされる。	口縁部、体部内面ナデ。底部オサエ。	硬質 淡茶褐色	砂少なく 緻密	同口縁径のタイプでは出土量が多い。
16			外傾しやや肉厚になる体部をもつ。口縁端部は内方に上端面をもつが、総じて丸くおさまる。体部中ほどにナデにより成形される軽い段をもつ。底部は平坦。	体部内面、外面中ほどまでナデ。底部内面タテナデ、外面オサエ。	やや硬質 淡茶褐色	砂をかなり含む	
17			全体に丸みをもち、内湾気味の体部に、短く器壁の薄い口縁部が上方にのびる。口縁端部はやや尖り気味。	口縁部、体部内面ナデ。底部外面オサエ。	硬質 淡赤褐色	砂少なく 緻密	出土量の多いタイプ。
18			内湾し、やや器壁の厚くなる体部、口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさまる。	口縁部、体部内面ナデ。底部はオサエ。	硬質 淡茶褐色	砂少なく 緻密	やや器高の深いタイプ。
19			やや内湾気味の体部に、ほぼまっすぐ上方にのびる口縁部をもつ。端部は丸くおさまる。底部は平坦になる。	口縁部、体部内面、外面中程までナデ、底部はオサエ。	硬質 淡赤褐色	砂をかなり含む	出土量の多いタイプ。
20			全体に丸みをもつ。口縁端部は丸みをもつが、上端部はわずかに平坦面をもつ。	口縁部、体部内面ナデ。底部はオサエ。	硬質 淡茶褐色	細砂を多く含む	
21			器高がかなり深く、器壁が薄い。内湾気味の体部口縁部をもつ。口縁端部は内傾し、丸くおさまる。底部中央がやや盛り上る。	口縁部、体部内面ナデ。底部体部外面オサエ。	やや硬質 淡茶褐色	砂少なく 緻密	口縁部片を合わせても10数点の出土である。
22			器高が深く内湾気味の体部に口縁部が上方にまっすぐのびる。体部外面中程にナデによる軽い段がみられる。口縁端部は丸くおさまる。	体部外面、外面中程までナデ。口縁端部は再びナデを施し調整。	硬質 淡茶褐色	砂少なく 緻密	15～21より口縁径が広い。出土点数2例。
23			青磁	杯	全体に丸みをもつ。口縁部が斜め上方にのびる。口縁端部は薄く丸い。体部内面中ほどに沈線をもつ。	口縁部ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラミガキ。底部外面はヘラ切り。	硬質 淡緑色の釉
24	土師器	皿	体部は凹凸をもちながら、外傾気味に口縁部に至る。口縁部は上方につまみあげられ、端部の器壁は薄くなるが丸くおさまる。	体部内外面とも中ほどまでナデ、口縁端部は再びナデを施し調整、底部は内外面ともオサエ。	硬質 暗茶褐色	砂少なく 緻密	出土点数1例のみ。
25	瓦器	椀	全体に丸みをもち内湾する体部、口縁部をもつ。丸みをもち、器壁の薄い口縁端部内面に段を有し凹線状をなす。底部外面に外にふんばる高台が付く。	体部内外面とも底部近くまでヘラケズリ。底部内面に螺旋状の暗文が施される。底部外面高台の内側はナデ。	硬質 灰黒色	緻密	やや光沢にかける。1点のみ出土。

SD3 出土土器観察表

3 中世から近世

ここでも瓦類は後節に回し、主に土器類の記述を行う。

瓦質・土師質土器

土壙墓より出土した、瓦質・土師質羽釜・鍋類・皿などが中心である。

瓦質・土師質鍋・釜類

鍋は、大きく分けて3種類がみられる。A 口縁部が内湾気味に外方にのび、体部はほぼ直線で平底 (PL. 16-34)。B 口縁部がほぼ水平に外方にのび、端部上面がつまみ上げられた形で上方にのび、体部はやや内湾気味である (PL. 16-31・35・36・37)。C 口縁部が成形の際に一度下方に曲げられ、再びBのように端部を上方にもち上げるように造られたため溝状に見える。体部は緩く外傾し、直線的である (PL. 16-30・32)。

調整は、A～Cを通じて口縁部・体部内面は横ナデ。体部外面はオサエのみである。調整の手法は変わることはないが、ただAからCに至るにつれて、口縁部が低く平坦に水平方向へ広がり、口縁端部断面の三角形状が強くなり、ナデなどの調整が簡略化されてくる。なお (PL. 16-32) は口縁部の形態が他と異なり、外方に張り出す部分が非常に少ない鉢とも考えられるが、体部にスガが多く付着しており、鍋として使用されていたと考えられる。

鍋の年代順を、遺構の切り合い関係、共伴する遺物から考えて行くとA、B、Cの順になる。各タイプの出土例としてはAが左京四条一坊跡に数例、Bが同じく左京四条一坊跡、京都大学農学部構内遺跡^{註1}などに、Cは常盤井殿町遺跡に口縁部の推移の一タイプとして示されているのみである。

釜は、口縁径が5cm程度の三脚を持つミニチュアの羽釜 (PL. 16-39) から、口縁径35cmのもの (PL. 16-48) まで幅広く検出されている。口縁径だけでなく、器形にも多様さがみられ、同じ遺構内から出土した個体でも均一な形態は持っていない。しかし口縁部の形により大別して3種類に分けられる。A 内湾する体部に続く口縁部は内傾し、外面に1～3の段、あるいは凹線を持ち、口縁端部上面を平坦に整える (PL. 16-38・39・40・47・48)、B ほぼ直線か、やや内湾気味の体部に短い口縁部がつながる。口縁端部上面は平坦に整えられるが、ややふくらみ気味で断面形が台形状になる (PL. 16-41・43・46)、C 体部・口縁部とまっすぐであり、口縁部はA・Bに比べ長く、段を有する。口縁端部上面は

平坦なもの、丸みを持つものがある(PL. 16-42・44)。つばの形は先端部が平坦なものや丸みを持つものがA～Cに長短を含めて分散しており、AからCのうちで一定のパターンを持つというのではない。

調整の方法について共通するのは、体部外面のオサエぐらいである。口縁部外面からつばに至るナデは、つばの先端部からのもの、つばの下面の体部からのものがある。体部内面は、ハケで調整するものとナデ調整されるものがあり、これらはA～C中に混在する。

釜はAからCの順に新しくなる傾向を持つと考えられる。しかし、鍋・釜類を出土する遺構は、一つのタイプに限られることがない。これはA～Cの釜ともに鍋の所であげた3つの報告書に類例がみられる。これらに正確な年代比定を行うのは早計であり、資料が蓄積してからにしたい。

土師器皿、石硯

Fig. 23 は平安時代以降のもので、SD3を除く各遺構から出土した小壺(1・2)、塩壺(17)、大小の形態の異なる皿で、口縁径が5cm～6cmの小さいもの(3・4)、へそ皿(5～8)、やや深く口縁部が直立気味のもの(9)、底部と体部の境の内面に浅い沈線を持つもの(10)、丸みを持ち底部と体部の境がはっきりしないもの(11～13)、外反気味の体部から水平方

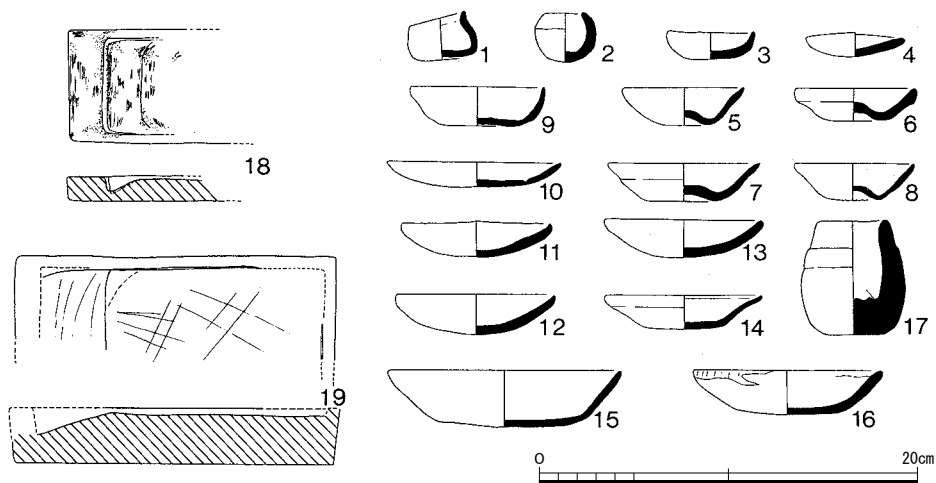


Fig. 23 土師質土器、石硯実測図(1:4)

向に開き上方にのびる口縁部を持つもの(14)、口縁径13cmほどで器壁が薄く斜め外方に体部・口縁部がのびるもの(15)、口縁部で器壁が厚くなるもの(16)などがある。

石硯はいずれも土壙墓よりの出土であり、18は赤色の石灰岩系で、19は暗灰色の粘板岩製である。

近世の土壙墓SK39(PL. 14)より出土の土師器皿は、副葬品として考えられ、10枚が土壙の棺部の底に置かれていたものであるが、その内でもタイプがいくつかに分かれることもあり、取り上げて若干の考察を加えてみたい(Fig. 24)。

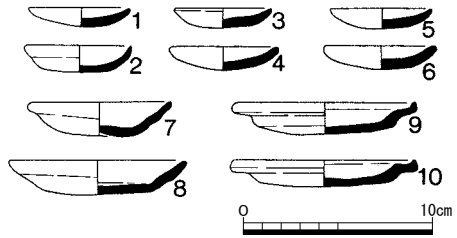


Fig. 24 SK39 出土土師器皿実測図(1:4)

1～6は口縁径6cm以内の浅い皿である。その内A-1・3・5は、肘に粘土をあてて成形するタイプで、最深部が一方に寄るものである。3個ともナデなどの調整は施さず、外面にオサエの跡が残るだけであり、内面には肘の圧痕が残る。色調は赤褐色をなし、緻密な胎土を持ち、硬質に焼き上がっている。

B-4・6はAより一回り大きく肉厚であり、同じく外面のオサエのみで、内面から口縁端部に目の細かい布の痕跡が残る。底もAのように一方に片寄るのではなく丸みを持つ。このことから型に布をあて、粘土を押しつけたのであろうと推測できる。色調は淡茶褐色で砂を多く含み焼成は硬質。2は手づくねであり、口縁部内面のみわずかにナデ調整がされ、他はオサエている。色調は淡黄灰色で、緻密な胎土を持ち、A・Bに比べると焼きはやや甘い方である。7はヘソ皿の系統である。外傾する体部を持ち、口縁部を外方へわずかにつまみ出すものである。体部内面はナデが施されるが、他はオサエのみであり、成形はかなり雑である。色調は暗褐色で、わずかに砂を含み焼成はしっかりしている。8はやや外反する体部に肥厚する口縁部を持ち、底部と体部の境内面に沈線が認められるタイプである。ナデはこの沈線を境に口縁部内側、口縁端部にのみ施される。体部外面はオサエのみである。色調は淡赤褐色で、緻密な胎土を持つ。焼成は良好で硬質である。

C-9・10は平坦な底部に外傾する短い体部を持ち、口縁部は水平に外方に引きのばされ、端部で広く上方に直立する。2個とも口縁径に比べ器高は低い。色調は淡赤褐色で、砂をわずかに含み、焼成はやや甘い感じである。

小さい皿類で三種、大きいものも7を入れて三種に分かれる。小さめの皿で、AとBは

これらのタイプがさらに簡略化される以前のものと考えられ、前述の Fig. 23-4 より成形は丁寧である。B としたタイプのもは、今回の調査でも SD3 から数点出土しており、出現は少なくとも鎌倉時代初期にまでさかのぼると思われる。しかし A は江戸時代以前にはさかのぼらないと考えられる。これらは、報告例が少なく左京四条一坊跡に数点類例がみられるのみであり、明確な発生時期、編年は、今後の資料を待たねばなるまい。

大きい皿類では C が SK39 の時期に伴出したことが注目される。もともと C のタイプは前述の報告書、および常盤井殿町遺跡の報告でも、11 世紀～12 世紀中頃までにみられる器形であり、それ以後すたれる傾向にあったが、今回、明らかに近世と認められる土壇の底部に他の遺物と共伴して出土した。他の 7・8 については明らかに江戸時代のもであろう。

陶器、磁器、土師質・瓦質土器 (PL. 17)

この図版に取り上げた土器類は時期も広くまたがり、器種・器形も多様なため、個々は別表にまとめておいた。

PL. 17-49～57 までは陶器、磁器の椀である。54・57 を除き土壇墓よりの出土で、副葬品として考えて良いものである。56 のみ疑問であるが、他は京焼であると考えられる。58～62 は香炉である。器種は 58・59・61 が陶器、60 が土師質土器、62 が瓦質土器となる。58・59・62 は土壇墓よりの出土であるが副葬品とは認めがたい。おそらく葬儀に使用し、廃棄されたものの混入であろう。65 は古瀬戸のおろし目を持つ片口の皿である。65 は SD3 の溝が検出される直上の灰褐色泥土から出土している。60・70 は瓦質の鉢・茶釜であり SK67 から出土している。71 は棧瓦と同質の胎土、焼成を持つ盤である。SK40 からの出土であるが、副葬品や供物となるものではなく礫と混じり投入されたものである。72～74 は土師質・陶質の壺・甕の口縁部である。いずれも遺構面より上層の出土であり遺構の性格を知るための資料とはなり得ない。

その他に Fig. 25 に示した鉢類がある。1 は信楽製のすり鉢底部で、SK115 の土壇墓より礫と混じって出土した。体部内面の縦方向の櫛目が底部で重なる形で刻まれている。体部はナデ、底部はヘラで切り離しただけである。長石・石英などを含むが、少なめである。硬質に焼き上り赤褐色をなす。江戸時代のものと考えられる。2 は常滑製と考えられる片口の鉢である。B6 暗褐色泥砂出土。口縁端部に稜線を有し、端面上部はつまみ上げられて隆起する。そのため端部に凹線がめぐるように見える。胎土は砂を若干含むが密である。暗褐色を呈し、やや甘い感じの焼き上りである。3 は H2 暗茶褐色砂礫出土、室町時代初

期頃の製品であろう。器高は低く外傾する体部に水平方向に広がる口縁部を持つ。口縁端部は上方につまみ上げられた形でのび、また下方に張り気味となる。平底と考えられる。胎土には粒子の粗い砂を多く含む。茶褐色を呈し焼成は堅牢である。4は備前である（SK11より出土）。外傾する体部に、直立する口縁部が付き、端部は丸みを持つ。片口を持つかは同部分が検出されていないため不明。体部と口縁部の境がやや尖りぎみに外方に張り出す。内部の櫛目は広い間隔を持ち配されるが、口縁上部や底部近くまでは至らない。胎土は長石や石英類を含み、やや粗い感じがする。暗褐色を呈し、非常に堅牢な焼き上がりである。室町時代中期から後期にかけてのものである。

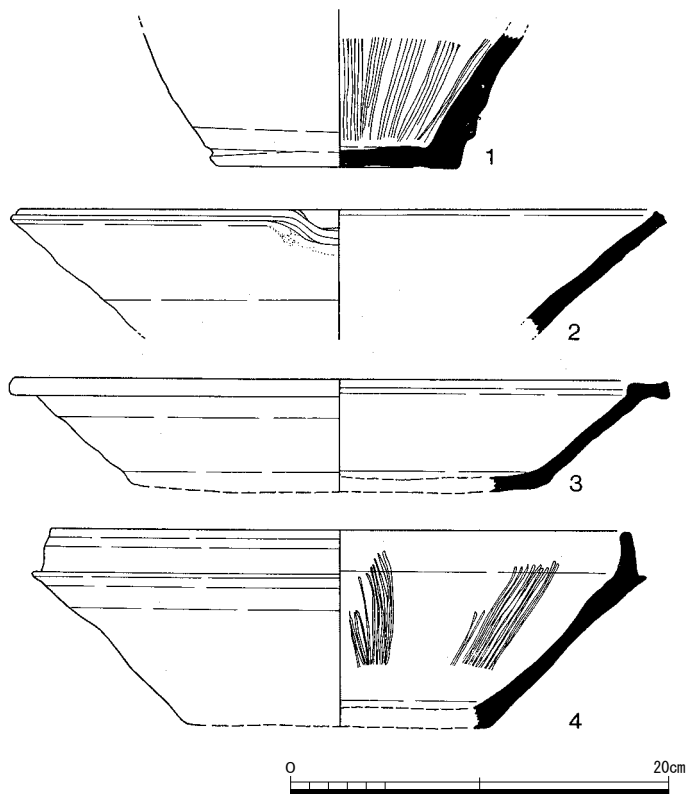


Fig. 25 鉢類実測図 (1:4)

註

- 1 京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会
『京都大学構内遺跡調査研究年報』1976年

挿図 番号	器 種	器 形	出 土 地 点	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	焼成色調	胎 土	備 考
1	土 師 質 土 器	小 壺	E6	張り気味の体部に直立気味の口縁部をもつ平底	体部内面ナデ 他はオサエ	硬 淡茶褐色	砂少なく 緻密	近世。
2			SK34	球状をなす。	同上。	硬 淡茶褐色	砂少なく 緻密	近世。
3		小 皿	SK34	平底にはぼまっすぐ上方にのびる口縁部をもつ。	口部内外の面と体部内面ナデ。	硬 淡茶褐色	砂少なく 緻密	近世。
4			SX3	一方が深く、体部、口縁部とも不揃いな形。	肘などに粘土を押しえつけて成形。オサエのみ。	硬 淡茶褐色	砂少なく 緻密	近世。
5		へ そ 皿	H3	外傾する体部に尖り気味の口縁端部をもつ。	体部内面のみナデ。	硬 淡茶褐色	わずかに 砂を含む	室町時代。
6			E4	口縁端部が肥厚し、丸みをおびる。	口縁部、体部内面ナデ。	やや硬 淡黄灰色	わずかに 砂を含む	室町時代。
7			SK73	外傾する体部に外反気味の口縁部がつく。口縁端部は尖り気味。	口縁部内・外面、体部内面ナデ。	硬 淡茶褐色	砂少なく 緻密	鎌倉時代。
8		SK82	やや外反気味に外傾する体部をもつ。口縁端部は尖り気味。	体部内面ナデ。	やや軟 淡黄白色	やや砂を 多く含む	室町時代。	
9		H4	内湾気味の体部に直立する口縁部をもつ。	体部外面中ほどから口縁部、体部内面ナデ。底部内面タテナデ。	硬 淡茶褐色	砂少なく 緻密	室町時代。	
10		J4	浅く、底部と体部の境内面に沈線をもつ。	体部内面のみナデ。	やや硬 淡茶褐色	わずかに 砂を含む	近世。	
11 12 13		SX3 SD8	丸みをもち体部・底部の境がはっきりしない。	口縁部端部、体部内面ナデ。	硬 赤褐色 13 は 淡茶褐色	わずかに 砂を含む	近世。	
14		SK44	体部は外反し、水平方向に開き、口縁端部は上方にのびる。	口縁部外面、体部内面ナデ。	やや軟 淡赤褐色	やや砂を 含む	室町時代。	
15		SK11	外傾する体部に、やや肥厚し丸みをもつ口縁端部がつづく。	体部内面、口縁部外面ナデ。	硬 淡茶褐色	砂少なく 緻密	室町時代。	
16		SK64	外傾する体部に、端部に至るほど厚くなる口縁部をもつ。	口縁部外面、体部内面ナデ。	硬 茶褐色	砂少なく 緻密	近世。口縁端部一面にすすがつく。	
17		塩 壺	SK34	底部器壁とも厚く、口縁端部は直立し端面は丸みをおびる。	粘土のまきあげが残る。	やや硬 淡赤褐色	やや砂を 含む	近世。
18		石 硯	SK55	長方形の平板。		赤褐色		近世。石灰岩。
19			SK68	長方形の平板。		暗灰色		近世粘板岩

Tab. 2 中世・近世遺物観察表 (Fig. 23 参照)

錢貨

今回の調査で検出された古銭は北宋銭5種、邦銭2種で計98枚であるが、その内の91枚がSE3出土の寛永通寶で占められている。土壙墓からの検出は二箇所ですら3枚だけであった。六道銭として副葬される例はSK56に可能性があるが、他では見当たらない。

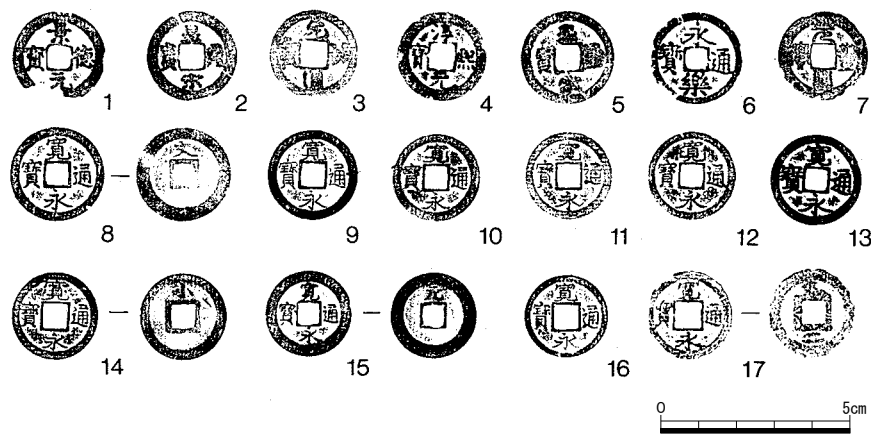


Fig. 26 錢貨拓影 (1:2)

番号	名称	出土地点	铸造年	備考
1	景德元寶	SX7	1005	潤縁
2	皇宋通寶	B区C4 暗褐色泥土	1039	
3	元祐通寶	SE3	1093	
4	淳熙元寶	SX8	1174	潤縁
5	皇宋通寶	E4 暗茶褐色土	1039	摩滅している
6	永樂通寶	B区 暗茶褐色土	桃山期・天正年中	
7	元豊通寶	F4 暗灰褐色混礫土	1078	背「文」
8	寛永通寶	SE3	享保年中	
9	寛永通寶	SE3	1700	京都七条銭
10	寛永通寶	SE3	1737	東北地方倣銭
11	寛永通寶	SE3	1740	江戸深川平野新田銭
12	寛永通寶	SE3	1738	江戸亀戸銭
13	寛永通寶	SE3	1636	
14	寛永通寶	SE3	1738	江戸小梅銭, 背「小」
15	寛永通寶	SE3	1741	背「元」、潤縁
16	寛永通寶	SE3	1708	江戸亀戸銭、四ツ寶銭
17	寛永通寶	SE3	元文年中	背「二」

Tab. 3 錢貨観察表

釘

検出された釘の大部分は土壙墓からである。溝、瓦溜からも出土するが少量である。大きさは大小あり、SE3 出土のつるべに打たれていた Fig. 27-2・3 のように 2.8 cm くらいのもから、瓦溜 SK3 出土の Fig. 27-26 の 12.2 cm を測るものまである。破損しており全長が不明であるが Fig. 27-22・27 などにはさらに大きいものであると考えられる。断面形は、方形、長方形に限られる。頭部の形態はおよそ 4 タイプに分けられ、A 頭部を短く一方に折り曲げるもの (Fig. 27-4, 8, 24 など)、B 頭部を長めに一方に折り曲げるもの (Fig. 27-14, 21, 22 など)、C 頭部を両方に開くもの (Fig. 27-15, 19, 23, 25 など)、D 頭部を一方にのぼし巻き込むもの (Fig. 27-10, 13, 20) である。木目を残すものもいくつかみられるが、ほとんどが全面に錆を付着させ腐食が進んでいた。中世から近世のものばかりであり、古墳時代に属する金属製品は 1 点も検出されていない。

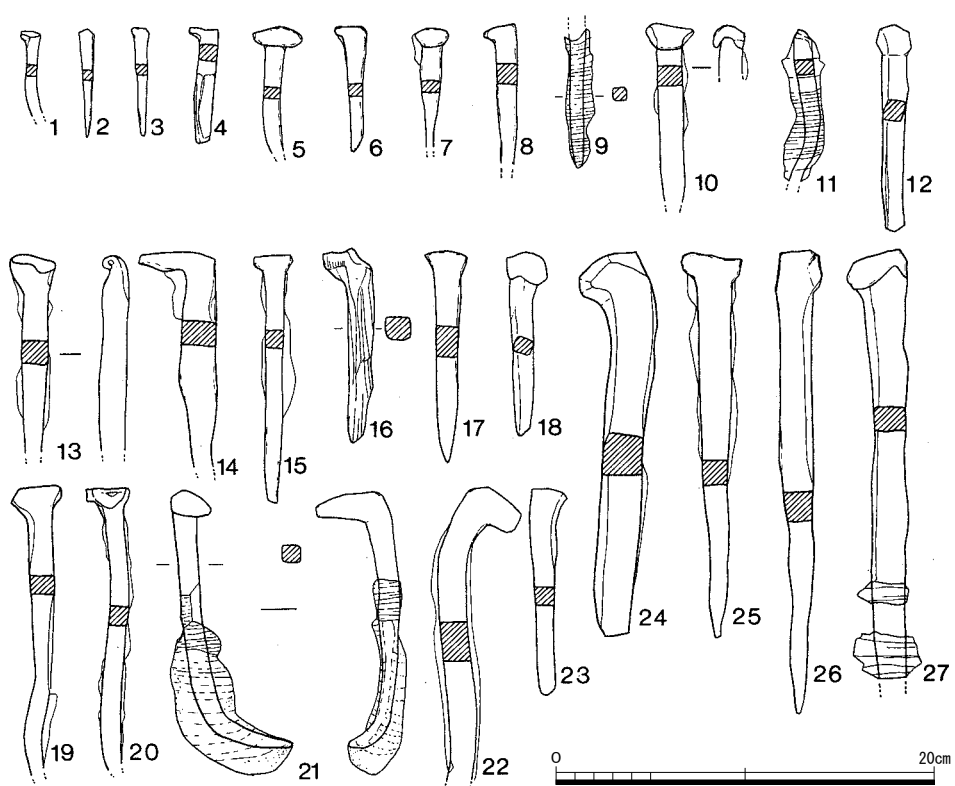


Fig. 27 釘実測図 (1:4)

							単位 (cm)	
図番号	出土遺構	完全長	残存長	体 部		頭 部		備 考
				断面形態	寸 法	形 態	寸 法	
1	SK43・44 付近		2.3	方 形	0.3 × 0.25	一方に折り曲げ叩きしめる	0.5 × 0.4	
2	SE3	2.9		方 形	0.25 × 0.25	薄く叩かれ頭部先端は厚みをもたない	0.4 × 0.1 以下	つるべに使用されていたかくし釘
3	SE3	2.8		方 形	0.3 × 0.3	方頭だが叩かれて丸みをおびる	0.5 × 0.2	
4	SE54	3		方 形	0.5 × 0.5	一方に折り曲げ叩かれている	0.7 × 0.4	下半部を叩き平坦にしている
5	SK56		3.5	長方形	0.45 × 0.25	薄く圧延され楕円形をなす	1.3 × 1.2	体部に比べて頭部は大きい
6	SD8	3.2		方 形	0.4 × 0.4	一方に折り曲げ叩かれている	0.9 × 0.3	
7	SD10		3.2	長方形	0.5 × 0.3	薄く叩いて折り曲げられ台形状をなす	0.9 × 0.5	
8	SK18		3.7	方 形	0.6 × 0.6	一方に折り曲げ叩かれている	0.8 × 0.6	
9	SK49		3.5	方 形	0.35 × 0.35	頭部欠損		全体に横目に木質が付着している
10	SD1		4.7	方 形	0.7 × 0.6	薄く叩いて折り曲げられている	1.2 × 1.0	焼けたらしく色調は暗紫色
11	SK46		4.1	方 形	0.5 × 0.5	不 明		全体に横目に木質が付着している
12	SK19	5.3		方 形	0.6 × 0.5	方頭だが叩かれて丸みをおびる	0.8 × 0.5	
13	SK3		5.2	方 形	0.7 × 0.6	薄く叩いて折り曲げられている	1.2 × 0.4	
14	SK40		6	長方形	0.8 × 0.6	一方に折り曲げ叩かれている	2.1 × 0.4	
15	SD7	6.5		方 形	0.5 × 0.4	薄く叩いて折り曲げられている	1.1 × 0.4	
16	SK5	5.1		方 形	0.6 × 0.6	一方に折り曲げられている	1.4 × 0.7	全体に横目に木質が付着している
17	SX2	5.6		長方形	0.8 × 0.5	薄く叩いて折り曲げられている	1.2 × 0.9	
18	SK24	4.7		方 形	0.5 × 0.4	薄く叩いて折り曲げられている	1.2 × 0.9	
19	SK54		7.5	長方形	0.7 × 0.5	薄く叩いて折り曲げられている	1.2 × 0.7	
20	SD13		7.5	方 形	0.6 × 0.5	薄く叩いて折り曲げられている	1.2 × 0.6	
21	SK46	7.1		方 形	0.5 × 0.5	一方に折り曲げられている	1.7 × 0.6	上から 3.5cm を境に交差して横目に木質が付着
22	SK18		8.1	長方形	0.9 × 0.7	一方に折り曲げられている	1.5 × 1.1	
23	SX8	5.4		方 形	0.5 × 0.5	方 頭	0.9 × 0.5	
24	SX7	10.1		方 形	0.9 × 1.0	一方に折り曲げられている	1.7 × 1.0	
25	SK3	10.1		方 形	0.7 × 0.7	頭部先端は薄く叩きのぼされる	1.7 × 0.3	
26	SK3	12.2		方 形	0.8 × 0.8	方頭だが叩かれて丸みをおびる	1.3 × 0.5	
27	SX3		11.3	方 形	0.8 × 0.7	薄く叩いて折り曲げられ楕円形をなす	1.7 × 1.7	上から 8.7cm、10.1cm の所に部分的に木質が付着

Tab. 4 釘観察表 (Fig. 27 参照)

木器 (PL. 24)

木器の全部が SE3 からの出土である。SE3 は地表面より 6m 以上と深く、そのため木器の残りは良好であり、つるべが 3 個体、柄杓、尺丈、曲物の底板が出土した。

つるべは平面形が方形となり、正面形は逆の側辺の長い台形をなす。長辺部に棒状の柄部分が付けられ、中央部に紐の巻きつけられた痕跡を残す。3 点とも全板材は釘を打ちつけて作り上げられている。材質は、松・檜の系統であろう。柄杓は長円筒形の曲げものに先を尖らせた柄を差し込むだけで、釘類は一切使用されていない。裏面には「極天」の焼き印が押されている。これらはすべて江戸時代中頃までしか遡り得ないものである。

4 瓦

今回の調査で多量の瓦を検出している。瓦当面を持つ軒平瓦、軒丸瓦を合わせて 33 種類、500 点余が出土している。まず瓦当面を持つ瓦の 1 形式ごとに (PL. 18 ~ 21) 解説を加えて行きたい。また遺構の章でも述べたとおり、SK1・2・22、SX8 など一括の資料となるものが検出されており、これについては小結の所で考察を加えたい。

軒丸瓦

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (PL. 18・41-1) 主文は複弁八葉からなり、凸式中房内に「十」字を表わす。外区に間隔・大きさともやや不揃いな小粒の珠文を 12 個配する。瓦当部側面は左回りのナデ。胎土は粗く小礫などを混入する。SX8 から 168 個出土。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (PL. 18・41-3) 主文は複弁八葉の短い花卉からなり、やや大きい凸式中房内に「卍」を置く。外区は 12 個の珠文をめぐらす。瓦当部側面はナデ。胎土は粗く小礫などを混入する。SX8 から 24 個出土。

三巴文軒丸瓦 (PL. 18・41-6) 全体に大振りで、やや粗雑な造りである。巴は大きく、彫りが深く、頭部は左回りである。珠文は間隔・大きさとも不揃いで 21 個置く。瓦当部裏面の中央部には、丸瓦との接合の際にオサエを行った凹みがみられる。瓦当部裏面・側面ともナデで仕上げる。胎土は緻密。SK1 から 4 個出土。

花文軒丸瓦 (PL. 19・41-7) 主文は梅鉢様六葉の花弁からなり、中房との間に雄蕊帯をめぐらす。小さい中房に 5 顆 (1 + 4) の蓮子を配する。外区は珠文 38 個が密に置かれる。瓦当部裏面中央部に指頭による凹みが認められる。瓦当部裏面・側面ともナデで仕上げる。胎土は緻密。SK2 から 1 個出土。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (PL. 19・41-8) 花卉は複弁八葉で、それを雄蕊帯がとりまく。中房には 9 顆 (1 + 8) の蓮子を配する。外区には小粒の珠文を 24 個置く。瓦当部裏面中央部に指頭による凹みが認められる。瓦当部裏面・側面ともナデで仕上げる。胎土はやや砂を含むが密である。SK1 から 3 個出土。

三巴文軒丸瓦 (PL. 19・41-9) 巴は彫りが深く、頭部は左回り、尾部はやや長くのび、圏線に接合する。外区には大きさ、間隔とも不揃いな珠文を 23 個めぐらす。瓦当部裏面、側面ともナデで仕上げる。胎土は緻密。SK22 から 1 個出土。

三巴文軒丸瓦 (PL. 20・41-10) 巴は浅く平坦で、頭部は右回り、尾部は圏線に接合する。外区は小粒の珠文を 15 個配する。瓦当部裏面下半は丸みを帯びた断面形をなす。丸瓦と

の接合は、今回出土の軒丸瓦と同様の接合式であるが、10は丸瓦凸面側に添え土を置くため、ややいかり気味になる。瓦当部裏面、側面ともナデで仕上げる。胎土は若干砂を含みやや密。SD3から4個出土。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦 (PL. 20・41-11) 花卉は角張り、弁子は長方形で比較的大きい。弁間文は先の尖った単線で表現されるが、三箇所抜かれている。中房は平坦で、6顆(1+5)の蓮子を配する。花文と周縁の間に圏線をめぐらす。11も10と同様で、瓦当部裏面下半に丸みを持ち、また凸面側はいかり気味である。瓦当部裏面中央部には押圧による凹みがみられる。瓦当部裏面、側面ともナデで仕上げる。胎土はやや粗く、砂をかなり含む。SK3から1個、SD3から4個出土。

花文形軒丸瓦 (PL. 20・43-12) 瓦当部右上約1/3の周縁部から中房までの破片である。花文は丸みを帯びた複弁六葉と思われ、中房との間に短く密な雄蕊帯をめぐらす。大きく低い中房には7顆(1+6)の蓮子を配する。瓦当部裏面、側面はナデで仕上げる。胎土はやや粗く細砂をかなり含む。SK73から1個、包含層から3個出土。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (PL. 20・42-13) 瓦当上部と周縁が所々欠損する。花文は複弁八葉で平坦である。中房は大きい不明瞭である。二重の外区を持ち、内側に小粒の珠文を密に推定36個おき、外側には左回りの唐草文をめぐらし、周縁は細い線で表現される。瓦当部裏面には押圧痕がみられる。焼成は硬く須恵質をなす。胎土は粗く小礫、砂などをかなり含む。中央拡張区から4個出土。

五輪塔形軒丸瓦 (PL. 20・42-14) 周縁部と外区の一部を欠損する。主文の五輪塔部は、地輪に蓮花を、水輪に梵字「𑖀」を入れる。外区は大粒の珠文をやや密にめぐらす。胎土は粗く小礫を多く含む。SD1から1個出土。

三巴文軒丸瓦 (PL. 20・43-15) 巴文と周縁下部の破片。巴はやや角張った断面を持ち、彫りが深く、頭部は右回り。瓦当部裏面に押圧痕がみられる。胎土は粗く小礫などをかなり含む。SX8から4個出土。

三巴文軒丸瓦 (PL. 20・42-16) 主文の巴はやや細身で、頭部に細かい突起がみられ、右向き。外区にやや大粒の珠文を13個置く。瓦当部裏面には押圧による窪みがみられる。胎土はやや粗く、砂を若干含む。B区包含層から1個出土。


三巴文軒丸瓦 (PL. 20・43-17) 瓦当の約右半分、周縁から巴にかけての破片。内区は外区よりやや低い。主文の巴は頭部が右回りで高く彫られる。外区にはやや大粒の珠文を配する。胎土は粗く小礫などを含む。SX8から53個出土。

長門三ツ星文形軒丸瓦 (PL. 20・43-18) 瓦当部下半約 2/3 の破片。主文はいわゆる長門三ツ星文で、3 個の大きな珠文を三角形状に配し、上に長方形を横長に置く。外区は小粒の珠文をめぐらす。瓦当部裏面、側面はナデで仕上げる。胎土は若干細砂を含むが緻密。SX4・7 より各 1 個、他より 3 個出土。

十曜文形軒丸瓦 (PL. 20・42-19) 周縁部、外区の一部を欠損する。主文は十曜文からなる。外区に推定 16 個の珠文を置く。珠文は三段階に大きさが変り、外側のものほど小さくなる。胎土は細砂を含むが緻密。SX65 より 1 個出土。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦 (PL. 20・43-20) 瓦当部左半 1/4 以下。周縁部と花卉の一部のため詳細は不明であるが、菱形の弁間文を持つことは認められる。胎土は若干砂を含むが緻密。SX122 より 1 個出土。

軒平瓦

剣頭文軒平瓦 (PL. 18・44-2) 中央に「」状の中心飾りをおき、左右に単位文様を 4 個ずつ割り付ける。瓦当部は平瓦広端部を折り曲げて成形する。平瓦部凹面広端縁（瓦当部上面）を面取り。頸部には折り曲げの際に生じた粘土のしわ（曲げじわ）がみられる。頸部はナデ。側面はヘラケズリ。平瓦凸面に押圧痕。胎土はやや粗く小礫などをかなり含む。SX8 から 12 個出土。

剣頭文軒平瓦 (PL. 18・44-4) 剣先がやや丸みを帯びた単位文様を 6 個置く。周外縁を持つ。瓦当部は折り曲げ。平瓦部凹面広端縁を面取り。頸部の曲げじわをとどめるものとナデで消すものがある。頸部はナデ。側面はヘラケズリ。平瓦部凹面から瓦当部に至る布目がみられる。胎土はやや粗く小礫などを含む。SX8 から 8 個出土。

連珠文軒平瓦 (PL. 18・44-5) 珠文 10 個を横一列に配し、周縁との間に圏線をめぐらす。瓦当部は平瓦部凸面広端部に粘土を貼り付け成形し、ナデで仕上げる。平瓦部凹面広端縁を面取り。瓦当面および平瓦部凹面に離れ砂の痕跡がみられる。側面はヘラケズリ。胎土は緻密。SK1・22 から 4 個出土。

剣頭文軒平瓦 (PL. 21・44-21) 文様の配置、成形方法、胎土などは 2 と同様であるが、21 は剣頭文が全体にやや大きくなり、剣先がやや鋭さを欠くことなどで異なる。SX8 から 45 個出土。

剣頭文軒平瓦 (PL. 21・44-22) 両端部が欠損する。単位文様を 6 個置く。瓦当部は折り曲げ。頸部の曲げじわをナデで消す。平瓦部凸面広端縁を面取り。頸部はナデ。胎土はやや粗く小礫などを含む。SK18 から 1 個出土。

唐草文軒平瓦 (PL. 21・45-23) 文様は彫りが浅く「Q」状の中心飾りをもつ非対称の唐草文である。瓦当部は平瓦部広端部を半折り曲げて成形するため、平瓦とは鈍角で接合される。平瓦部凹面広端縁まで布目がみられ、布端は浅い溝状となり凹面端部に残る。顎部は二段のヘラケズリ。側面もヘラケズリ。胎土は若干砂を含みやや密。SD3 から 20 個出土。

連巴文軒平瓦 (PL. 21・45-24) 瓦当面両端部を欠く。頭部が右回りの三巴文を連ねる。瓦当部は平瓦部凸面広端部に粘土を貼り付け成形する。顎、頸部はナデで仕上げる。平瓦部凸面には斜格子のタタキがみられる。胎土は緻密。I5 淡褐色泥砂から 2 個出土。

緑釉唐草文軒平瓦 (PL. 21・45-25) 中心飾り部分の破片。瓦当面と平瓦部に約 10cm 幅で緑釉がかかる。胎土は細砂を含むが緻密。SX7 から 1 個出土。25 の軒平瓦は明らかに平安時代前期の瓦で、岩倉幡枝の窯のものと同範と考えられる。また平安宮大極殿で使用されるものであり、今回出土の 25 は瓦溜の混入であろう。

唐草文軒平瓦 (PL. 21・43-26) 瓦当部左側の破片。太い線で周縁部と唐草の文様区とが分けられる。平瓦との接合は、平瓦端面を粘土で包み込む形で成形したと考えられる。顎部は横方向に数条の浅い沈線がみられる。胎土は若干砂を含むがやや密。SK22 から 1 個出土。

唐草文軒平瓦 (PL. 21・45-27) かなり簡略化された非対称の唐草文である。瓦当部は平瓦部広端部を折り曲げて成形する。平瓦部凹面広端縁を面取りする。顎部はナデ。頸部には曲げじわがみられる。側面はヘラケズリされる。胎土はやや粗く小礫などを含む。SX8 から 33 個出土。

剣頭文軒平瓦 (PL. 21・45-28) 瓦当部の右側下半分が欠損。4 と同様の文様配置・成形方法がとられているが、剣頭文の大きさ、剣先がさらに丸みを帯びることなどで異なる。胎土はかなり砂を含みやや粗。SK82、その他から 11 個出土。

剣頭文軒平瓦 (PL. 21・45-29) 左半分の破片。中心に、頭部が右回りの二巴文を置き、剣頭文 4 個を配している。瓦当部は折り曲げ。顎部はナデ。頸部および平瓦部凸面に指頭痕がみられる。側面はヘラケズリ。胎土はやや粗く小礫などを含む。SX8 より 1 個出土。

幾何学文軒平瓦 (PL. 21・43-30) 左端部の破片。内区は斜格子であり、各格子の内部に縦長の珠文を入れる。外区には小さな珠文をまばらに置く。顎、頸部はナデで仕上げる。側面はヘラケズリ。胎土はやや粗く小礫などを若干含む。SK10、包含層から 2 個出土している。

唐草文軒平瓦 (PL. 21・43-31) 右辺の中間部の破片。主文は細い線で描かれた唐草文を

配する。外区には小粒の珠文をやや密に置く。瓦当部と平瓦の接合は包み込みの手法をとると考えられる。顎、頸部はナデ。焼成は硬く須恵質を呈する。胎土は若干砂を含むが密。中央拡張区から1個出土。

唐草文軒平瓦 (PL. 21・43-32) 右端部の破片。主文は平坦で幅の広いやや雑な唐草文を配する。外区はやや大きい珠文をまばらに置く。瓦当部および平瓦部を一時に成形するもので、今回出土の軒平瓦類の成形方法とは異なる。顎、頸部はナデ、側面はヘラケズリ。頸部には指頭痕がみられる。胎土は砂を含みやや粗。D4 暗褐色泥砂から1個出土。

連珠文軒平瓦 (PL. 21・43-33) 平瓦部よりはずれた瓦当の下部で右端を欠損する。主文は、珠文を10個おき、これを圏線がめぐる。また平瓦との接合は貼り付けと考えられ、離れ部分にカキ破りがみられる。顎部はナデで、頸部にかけてなだらかな曲線を描く。胎土は細砂を含むが緻密。中央拡張区より1個出土。

丸瓦

丸瓦 (PL. 22・46-34) 凸面全体に唐草文軒平瓦の範によるタタキを持ち、凹面に布目がみられる。玉縁、丸瓦部後部の一部が欠損するが、残存する部分での寸法は丸瓦部長さ27.5cm、外径14.5cm、凹部中央付近で弧深5cm、縦断面は前部が厚く、玉縁に向かって薄くなる傾向にあるが、中央部付近で測った断面の厚みは2.5cmである。胎土は石英などの細かい粒子を含むがかなり密である。焼成は硬質で須恵質に近く、色調も淡青灰色をしている。前断面、側面および凹凸面両側縁をヘラケズリして面取りを行っている。凸部の唐草文のタタキは軒平瓦の範を用い、丸瓦部前断面に対して縦に右から左へ、前面から後部へとタタク。タタキの間隔は不揃いで、文様の重複する部分が多く、傾きも一定でない。軒平瓦の範であるが、前記の文様の重複などで全体の形がわかる部分が少なく不明瞭になっており、どの形式でどの程度の大きさを持つかについては確信を得ることはできなかった。SK1・22 出土。

丸瓦 (PL. 22・46-35) 凸面に斜格子状のタタキを持ち、凹面玉縁に布目がわずかに認められるが、全面ナデで擦り消されている。前部の一端と玉縁部の一部が欠損するが、ほぼ全体を知ることができる。全長は31.5cmで丸瓦部は26cm、幅は前断面から玉縁に向かい狭くなっている。中央部付近では外径12.5cm、弧深5.3cm、断面の厚さは2cmとなる。胎土は砂が少なく緻密で、焼成は硬質、色調は淡灰色で一部赤褐色を呈する。丸瓦部と玉縁部の境に隆起がみられ、やや乱雑ではあるがヘラケズリされている。玉縁部凸面はナデ。前断面、側面はヘラケズリで凹凸面両側縁に面取りを行なっている。斜格子のタタキ

はほぼ長さ 9cm、幅 5cm の単位で、前端面に向って右から左へ玉縁の方にタタいている。SK1 出土。

丸瓦 (PL. 22・46-36) SK1, 2, 22 から出土するタイプの一例である。SK22 出土で、前端面の一部が欠損するがほぼ完形品である。凸面はナデによるスリケシであり、わずかではあるが細い縄目によるタタキのうかがえる部分もある。凹面は布目がみられ、凹面前端部は幅 6 cm にわたりヘラケズリを行っている。玉縁部凸面はナデである。寸法は全長 36.5cm、丸瓦部 30cm、外径 16.5cm、中央部弧深 5.5cm、厚さ 2cm となる。胎土は、黒色の砂・石英などを若干含有するが、かなり密といえる。焼成は硬質に近く、色調は黒褐色、一部暗灰色を呈している。前端面・後端面・玉縁部後端面、側面・側面内側をヘラケズリ調整している。

平瓦

平瓦 (PL. 23・47-37) SK22 から出土した完形品である。SK1・2 からも出土するタイプである。凸面は無文様でザラザラしており、砂を巻いて平板でタタいたと考えられる。凹面は型からおこすのに砂を用いており（離れ砂^{註1}）、凸面同様非常にザラつく。また凹面には『型』の構造を知ることのできる痕跡がある。広端部から狭端部にかけて、幅平均 3cm ほどの平行する条線がみられることで、『型』を構成する板の痕跡と考えられよう。寸法は全長 36.5cm、中央部付近の幅 24.5cm、弧深 5.8cm、厚さ 2cm となる。胎土は砂をわずかに含有するが密であり、焼成は硬質で、色調は黒褐色を呈している。広端部はヘラで切り取ったのみで未調整である。狭端面および凹面狭端縁を 2cm にわたりヘラで面取りを行なっている。側面もヘラケズりする。

平瓦 (PL. 23・47-38) 凸面全体は斜格子のタタキ、凹面にはやや粗い布目が残る。寸法は全長 34.5cm、中央部付近の幅は 20.5cm、弧深 5.5cm、厚さは 1.5cm である。胎土は石英・長石・黒色砂などを多量に含有し、焼成は硬質であり色調は黒褐色を呈する。広端面・狭端面・側面・凹面狭端部中ほどと凹凸面側縁はヘラで面取りを行っている。右端に「フ」のヘラ記号がある。凸部のタタキの単位は幅 3.8cm ほどで、長さは 38 の全長とほぼ同じで、ヘラ記号のある狭端部の右から左の方向へタタいている。SK1 出土。

平瓦 (Fig. 28-39) SX8 より出土する熨斗瓦と考えられる一例である。広端面の一部が欠損するがほぼ全体がわかる。寸法は全長 22.5cm、中央部付近で幅 13.8cm、弧深 1.2cm、厚さ 1.3cm である。凸面はタタキの痕跡が認められずに押頭痕がみられ、オサエか、スリケシと考えられる。凹面は離れ砂を用いて型よりおこしている。胎土は砂が少なく緻密で

ある。焼成は再び火を受けているためやや軟質になっている。色調もそのため赤褐色に近い。広端部・狭端部・側面各端面ともにヘラケズリを行っている。

平瓦 (Fig. 28・PL. 47-40) 寸法は全長 24cm、中央部付近の幅は 16cm、弧深 1.35cm、厚さ 1.6cm である。凸面は縄目タタキで、狭端部は 4cm にわたりヘラケズリをしている。凹面は離れ砂を用い型よりおこしている。胎土はやや密である。焼成は非常に硬く須恵質で、色調は淡青灰色を呈している。広端面・狭端面・側面とも比較的丁寧にヘラケズリされる。

小結

今回の調査における瓦の出土地点は、主要な瓦溜の他、溝、土壇、遺構面である。中でも特に瓦溜 SK1・2・22、SX8 に限定できる。また溝 SD3 出土の瓦も、土師質土器との共伴関係で重要ともいえ、SD3 の時期比定の資料となるものであった。今回の調査で出土した瓦の一括資料となるものを取り上げてみたい。

遺構の章でも記したように SK1・2・22 は一連のものであると考えられる。この三箇所からは図版にあげた軒丸瓦 (PL. 18-6、PL. 19-7・8・9)、軒平瓦 (PL. 18-5)、丸瓦 (PL. 22-34・35・36)、平瓦 (PL. 23-37・38) が出土している。これらのうち丸瓦・平瓦については特殊

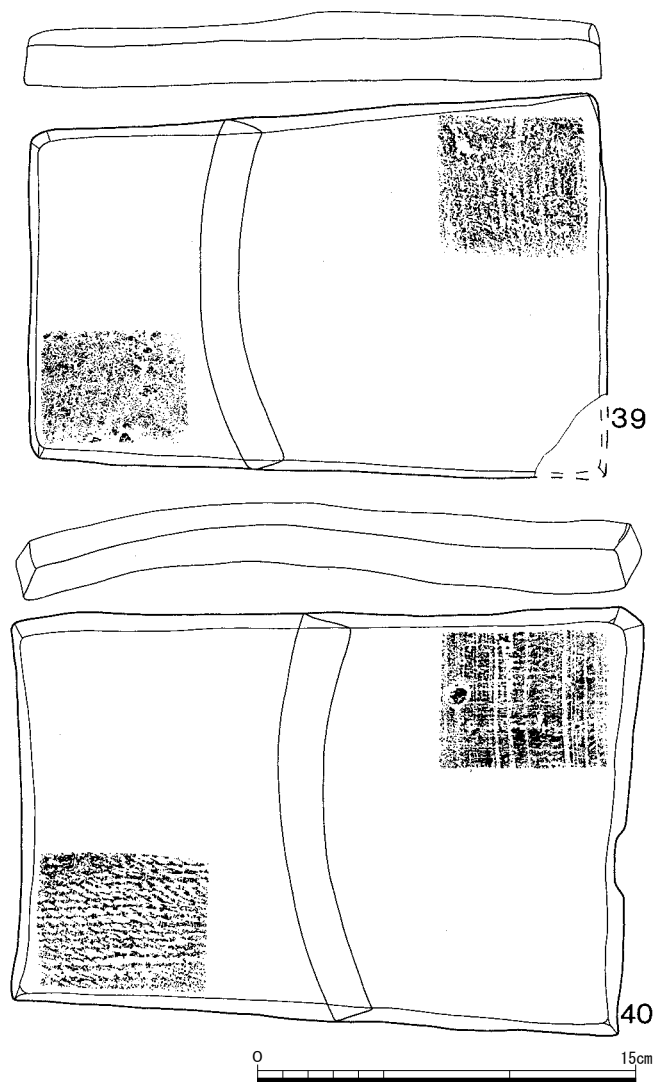


Fig. 28 平瓦実測図 (1:3)

な例である PL. 22-34・35、PL. 23-38 を除くほかのものは寸法において共通する規格を持っており、成形・調整・胎土・色調・焼成などの個体差を考慮しても明らかに差異が認められ、A・B の 2 種類に大別できる。まず完形品と全体が観察の可能なものを取り上げてみた（丸瓦 54 個体、平瓦 59 個体）。

A 丸瓦は 36、平瓦は 37 として例にあげたタイプで、今回 SK1・2・22 の三箇所瓦溜より最も多数出土している（丸瓦 47 点、平瓦 47 点）。

丸瓦は例にあげた 36 と成形、調整とも同様である。ただし全長はばらつきがあり、35cm ～ 39cm と差が大きい。丸瓦部の長さは 30cm ～ 32cm である。幅は中央部で 15cm ～ 18cm となり、弧深は前端部が押し広げられたものを除き 5cm ～ 6cm の間である。厚さも同様に 2cm 前後で大きな差はみられない。胎土は少量の砂を含むが、色調は黒褐色を呈するものは緻密で、砂はほとんどみられなくなる。焼成は硬質のものから、ややあまいものがあるが、前者の方が多くなる。色調は硬質のものが暗灰色から暗黄灰色、あまいものが淡黄灰色、黒褐色となる。玉縁部分の調整は広端面方向へのヘラケズリが数点みられるが、大部分は横方向へのヘラケズリであり、丸瓦後部との境に横方向のナデが施されている。

平瓦も例にあげた 37 と同様で凸面にタタキ目がみられず、凹面に離れ砂を使用する。寸法は全長 34cm から 37cm の差があり、幅は中央部付近で 22.5cm ～ 24.5cm ほどの差であり、厚さは 2cm 前後である。広端部と狭端部の幅は、広端部 24cm ～ 25cm、狭端部 22cm 前後と全体に共通した値が得られる。また弧深も 5.5cm ～ 6.5cm で個体差の範囲と考えられる。しかし、寸法については、前記のとおり 2 種とも変わりがなく A タイプの平瓦の範囲に収まり、次に述べる B タイプの平瓦より若干厚くなる程度である。胎土、焼成、色調ともに丸瓦と同様である。しかし黒褐色のもので瓦当を持つものは范が異なったり、胎土に若干の相違がみられるので、調整方法が同様であるため A に含めた。なお瓦当面を持つものは、図版にあげられなかったものも含めてすべて A タイプの手法である。

B（丸瓦 7 点、平瓦 9 点）平瓦で根本的に A と異なることは凹面に布目がみられることで、非常に硬質で須恵質を呈するものがほとんどである。凹面にタタキがみられ、布目の上を長さ 30cm 以上、幅 5cm ほどの平坦な板で狭端部を重点的にタタキ、広端部は簡単に済ませている。凸面は縄目のタタキ痕と、無文様のタタキ痕を持つものがある。縄目のタタキのあるもので凸面のタタキ目がつぶれたり、砂が付着したりする位置が、凹面でのタタキと同位置にくることからも推測することができよう。狭端面、広端面、側面はヘラケズリによりかなり丁寧に仕上げられる。

Bに含まれる丸瓦は、凸面のタタキのスリケシはAと同様であるが、焼成の堅牢さ、凹面前端内縁に面取りが斜め方向とされる点（前部端からみて右側の幅が広い）、全長がやや短い点（34cm～36cm）がAと異なる。Bの丸瓦、平瓦ともに胎土は細かい長石・石英などの白色系の砂粒子を含んでいる。焼成は硬質で、色調は淡青灰色から淡灰色を呈する。

三箇所の瓦溜からは破片も多量に出土しており、その総数は丸瓦片 396、平瓦片 1036であった。破片の分類において、平瓦ではA・Bに次の端的な相違点で分けてみた。A 凹面に離れ砂を用いる、B 凹面に布目がみられる（Tab. 5）。その結果Aは934片、Bが102片でほぼ90%がAであった。しかしBには凸面にタタキ、凹面に布目の残らない破片が若干あり、その部分がAに加えられたとしても、これだけの大きい差においてはあまり数値に変化はないと考えられる。丸瓦片ではA、Bの区別が破片では難しく、明確な答えが得られなかったので分別は省いた。

		凸 面				凹 面		
		総 数	タタキメあり		スリケシ	その他	布 目	離れ砂
丸 瓦	完形品	30	縄 目	斜格子	28	1	30	
	破 片		396	2				
平 瓦	完形品	47	9(B)	1	タタキメなし 37(A)	0	7(B)	40(A)
	破 片	1036	102(B)	0	934(A)	0	54(B)	982(A)

平瓦 A 完破 79% B 完破 21%
 破 90% 破 10%

Tab. 5 瓦分類表

表からわかるようにタタキメ痕を持つ瓦は非常に少なく、図版にあげた2点のほかには破片中でもみることができなかった。

この三箇所の瓦溜から出土する瓦の時期・生産地については、平瓦にみられる凹面に離れ砂を用い、凸面にタタキメのみられない一枚造りの瓦を、京都市醍醐の栢杜遺跡の方形堂跡出土のものと比較してみたい。栢杜遺跡の八角堂（醍醐栢杜堂）は久寿2年（1155）、方形堂（九体丈六堂）は建久6年（1195）の建立と考えられており、使用時期の明瞭な一括資料として十分な価値を持っている。したがってこの時期と推定している今回の瓦類と照らし合わせると、瓦当を持つ瓦には文様形態、軒平瓦頸部、軒丸瓦瓦当接合部などが明らかに異なっている。詳細を述べると、まず今回出土の軒丸瓦における瓦当部と丸瓦部の

接合方法は、瓦当裏面接合部に5mmほどの浅い溝を造り、丸瓦部を取り付け、凹面、凸面に粘土を貼り付けナデ調整で仕上げている。瓦当面には箔から取りはずすために使用した離れ砂の痕跡がみられ、平瓦でAタイプとした凹面に離れ砂を用いる手法と共通する特徴を持っている。他の特徴としては、瓦溜から出土した巴文軒丸瓦の巴文はすべて右巻き込みになっており、他の遺構から出土したものと逆である。軒平瓦には連珠文の一種だけがあり、これも瓦当文様面に離れ砂を用いた痕跡がみられる。また瓦当部と平瓦部の接合は、完成した平瓦の凸面広端部に粘土を足して瓦当部を成形し、その後箔をあてていると考えられる。瓦当裏面接合部は平瓦凸面へ2cm～3cmにわたって緩い傾斜で続き、顎部へ向けてヘラケズリを行う。平安時代からの伝統的な手法を残している。また瓦当面・文様面上部（凹面広端部）をヘラケズリして面取りを行っている。

栢杜八角堂の軒先瓦は、軒丸瓦では瓦当裏面の丸瓦前端部があたる部分を切り込み、丸瓦部を取り付ける。その際に丸瓦凹面接合部と凸面接合部に粘土を足して接合した後オサエるか、ヘラでケズっている。瓦当部側面はヘラケズリされている。また瓦当文様面に箔の木目痕のみられるものが多いが、一部離れ砂を使用したと思われるものもある。軒平瓦では広端部凸面に粘土を貼り付けて瓦当部を造っている。凹面広端部の面取りは軽くケズるか、ほとんど行わないかである。軒平・軒丸瓦を通じ、八角堂の瓦の胎土は全般的に密か、若干砂を含む程度であり、焼成は軟質なものが多い。この瓦について概報中では、軒先瓦のうち種類かは京都の洛北栗栖野瓦窯跡の製品にみられるものと同范であると結論されている。

一方、栢杜の方形堂の瓦は、軒丸瓦では瓦当部は4cmと厚く、瓦当裏面に深く（1cm～1.5cm）丸瓦部前端部にあたる部分を切り込み、丸瓦部を取り付けており、丸瓦凹面と瓦当裏面に粘土を足すことはしていない。凸面前端部と瓦当上面にのみ粘土を足して成形し、後ヘラケズリで調整を行っている。また今回出土の軒丸瓦と異なり、瓦当文様面は離れ砂を使用していない。軒平瓦では瓦当部の接合に、平瓦の凸面広端部に瓦当になる粘土を貼りつけ成形している。顎部の断面形はほぼ方形で、瓦当部裏面の平瓦凸面との接合面にのみわずかに強い傾斜がある。調整はヘラケズリを行っている。また瓦当文様面上部（凹面広端縁）の面取りはされていない。丸瓦、平瓦については、丸瓦の凸面は縄目のタタキをナデ、あるいはヘラでスリケシており、凹面には布目がみられ、側面はヘラで切る。全体的に肉厚であり、非常に堅牢な焼成となっている。平瓦は凸面が今回出土の瓦と同様タタキがみられず、ザラついている。凹面は布目であるがはっきりしない部分も多かった。側

面は型に対し垂直にヘラケズりする。

SK1・2・22の瓦溜出土の瓦と、栢杜遺跡の方形堂、八角堂出土の瓦と比較した場合、次の点が注目される。1、軒丸瓦・軒平瓦の瓦当部取り付けの手法において、今回出土の軒丸瓦と八角堂の軒丸瓦は、瓦当部、凹面、凸面接合部に粘土を足していることが共通するが、方形堂の軒丸瓦はそれをしない。軒平瓦においても今回出土のものと八角堂出土のものは、瓦当部になる粘土を接合した後、頸部を顎部から平瓦凸面にかけて緩やかな曲線を持ってケズるか、オサエるかするが、方形堂のものは頸部がほぼまっすぐに平瓦凸面に続く。2、今回出土の軒先瓦は、筈よりおこすために必ず離れ砂を使用するが、栢杜遺跡の軒先瓦は八角堂の一部のものを除いて、離れ砂を使用したとは思われない。3、今回出土の平瓦は凹面に離れ砂の痕跡がみられるが、栢杜遺跡の両遺構出土のものは布目がみられる。凸面は両方とも、縄目文様などのタタキがみられないものが多いことで共通する。4、今回出土の軒平瓦・平瓦を通じて、軒平瓦では凹面広端部、平瓦では凹面狭端部にヘラによる広めの面取りを行うのに反して、栢杜遺跡の両遺構出土のものは、ほとんど行わないか、ごくわずかな範囲である。5、生産地については八角堂出土の瓦が平安時代後期で、京都の洛北栗栖野瓦窯であろう。方形堂出土の瓦が鎌倉時代初期で、奈良系統の瓦であろうということが結論されている。

これらをふまえて今回出土の瓦に若干の考察を加えてみると、八角堂あるいは方形堂の瓦と共通する点は、軒先瓦に瓦当部を取り付ける際に粘土を足すというだけで、他は異なる。三遺跡内で分類した軒先瓦で同一の筈を使用したと考えられるものはなく、寸法などにも大きな差がみられる。したがって栢杜の八角堂・方形堂の瓦がそれぞれ京都系、奈良系なら、今回出土の瓦はそれ以外の系譜を引く地域の産であるとも考えられよう。しかし畿内を外れることはないと考えている。

今回出土の瓦の造られた時期については、八角堂出土の瓦の時期である平安時代末期のような粗雑で軟質な成形ではなく、また方形堂出土の鎌倉時代前期の瓦のように均整がとれ、硬質でもない。平安時代中期以前や室町時代の瓦とも異なる。したがってここでは今回出土の瓦を、平安時代末期から鎌倉時代中期までの期間幅としておきたい。

SX8より出土の瓦はすべて火を受けており、焼土・炭と共に投げ捨てられた状態であった。火災などの後に廃棄されたものと考えられる。PL. 18-3の軒丸瓦は、以前平安博物館が広隆寺を調査された際に出土している瓦と同范である。また同系統の文様を持つPL. 18-1は、当研究所が行った臨川寺^{註2}、相国寺^{註3}などの調査においても同范のものが出土し

ており、平安京内にかなり広く用いられていたと考えられる。軒平瓦は7タイプ出土しているが、瓦当面の成形はすべて折り曲げであり、瓦当部上面をヘラケズリで調整している。全体に小さく、長さ20cm、瓦当部幅14cmを超えるものはみられなかった。

今回のSX8出土の瓦類は、他の出土遺物と照合しても下限は室町時代初期である。軒先瓦類も京都市内の調査で、13世紀～14世紀と考えられる遺跡からの出土例が多いが、SX8出土のタイプの軒先瓦類は、成形、調整上にまだ古い手法を残しているところもあり即断できない問題がある。これらのタイプの瓦の時期比定については確実な資料が揃うまで待ちたい。

(鈴木廣司)

註

- 1 「離れ砂」とは、平瓦の型から粘土をおこす際に、あらかじめ瓦当面を持つ瓦の範よりはずすためにも使用している。「離れ砂」は一般用語にはなっていないが、今回の報告において凹面に布目を持つ平瓦と区別のため使用させていただく。
- 2 臨川寺跡遺跡発掘調査を京都市埋蔵文化財研究所が1977年2月～3月に行った。
- 3 相国寺跡遺跡発掘調査を京都市埋蔵文化財研究所が1977年7月、1978年3～6月に行った。

第4章 結 語

日本電信電話公社京都市管理部所有地を昭和52年(1977)2月から6月にかけて発掘調査を行った。総調査面積は3,040 m²で、京都市内における調査では規模の大きいものであろう。

調査地は、広隆寺寺域の北東部に推定されており、そのため発掘調査が必要になった。

調査の結果は、主目的としていた広隆寺関係の遺跡は発見できなかったが、古墳時代後期から連綿と江戸時代に至る遺跡が検出され、十分な成果であった。

古墳時代後期に属する遺構は、竪穴住居24戸を検出した。これらの大部分は切り合いをみせ、独立した形で検出したのは4戸だけであるが、調査地外にのびたり、後世の遺構で一部破壊を受けたりしている。ただ1軒(4号住居)だけが切り合うことなく北側で検出された(1群)。このほかが中央西寄り(2群)、南西部(3群)の二箇所集中する傾向がみられたため、3群に分けた。2群・3群には切り合いの順序から、住居建て替えの経過が判る。

2群 13→11→7→5→6号住居

3群 24→18→14→2・16号住居

しかしこれらの竪穴住居から出土した遺物は、第3章1で述べたように6世紀後半～7世紀前半の年代が与えられるが、土師器・須恵器の編年からも2形式以内に収まる。

竪穴住居と同時期と考えられる掘立柱建物を4棟検出した。これらは竪穴住居が造られなくなった後に建てられたものではなく、併存していたと考えられる。このような形は、中臣遺跡、正道遺跡などにもみられ、竪穴住居から掘立柱建物へ変わる過程やかかわり合いを明らかにする必要がある。

平安時代の遺構は、掘立柱建物4棟、石組みを持つ溝を検出している。掘立柱建物は2棟が規模も大きく、ほぼ全容をつかむことができた。石組溝は、多量に土師質の皿を包含しており、共伴するほかの土器・瓦より12世紀後半の時期とできる。しかし検出した遺構との関連は明らかにできなかった。

鎌倉時代以後の遺構は、60基の土壙墓、11箇所の瓦溜、12本の溝がある。土壙墓から二箇所の墓域が認められ、鎌倉時代中期以降から江戸時代中期に至るまで営まれていたものであろう。この間、墓域内に他の遺構はみられない。瓦溜は良好な一括資料と考えられ

る SK1・2・22 などがあるが、遺構との関連は認められない。

以上の古墳時代から江戸時代に至る遺構を検出したが、これらはすべて同一遺構面にみられたものである。遺構面までは、整地層で各時期の順次堆積ではなかった。

おわりに

桂川を境に仮定し、北岸以北の葛野郡条里内で嵯峨野一帯の遺跡分布をみると、太秦広隆寺を中心として蛇塚、天塚、仲野親王陵墓、馬塚など、首長級の大型の前方後円墳が点在し、さらに双ヶ丘の大型の円墳を始め、群集墳を形成する小型の円墳が北域を占める。東ノ町の調査により前方後円墳の付近にも群集墳がみつきり、さらに今回の調査により群集墳の間近に集落が存在することが発見されたのである。

これらの成果より視野を広げ、嵯峨野全体の開発の問題に触れて行くなれば、まず首長級の大きな古墳が平野部に築造され、次いで北方の丘陵、尾根上に小形の円墳による群集墳が次第に形成されて行く順序であろう。したがって、秦氏の生活圏も現在の広隆寺のある太秦一帯を起点と考えるなら、やはり古墳が北進するにつれ、北方へ広がって行ったであろうと考えられる。秦氏について現在知られている限りを要約して行けば、4世紀中頃に来朝したと伝えられ、5世紀中頃に葛野の地の太秦一帯を中心として生活を始め、前記の首長級の古墳を築造し始め、6世紀に至り勢力を広げて行き、末には群集墳の最盛期をむかえ、7世紀前半には蜂岡寺を建立するということになるだろうか。この秦氏の歴史上の展開中に仲之町、東ノ町の遺跡を当てはめるなら、この二遺跡は6世紀末から7世紀前半と考えられることから、嵯峨野では群集墳が最盛期をむかえ、次第に衰退にむかい始めた頃になり、丘陵、尾根上に形成された古墳群とほぼ同時期といえよう。その中でこの二遺跡の占める意義は、秦氏の勢力が広隆寺付近より外方へ広がりつつあった時期に、秦氏の中心地近くにも群集墳、集落が形成されたことであろう。即ち嵯峨野の後期古墳を調査した報告書『嵯峨野の古墳時代』『御堂ヶ池群集墳第20号墳』^{註1}などの遺物をみても、当研究所が行った2遺跡と明らかな形式差をみ出すことは難しい。したがって6世紀中頃よりは北方への開発が進み、氏族としての勢力範囲は拡大しつつあったが、単に一系統の秦氏でなく、広隆寺付近の秦氏が主系なら、北方へ開発を行ったのは傍系であり、秦氏族中の一派であると考えることができまいか。古墳時代後期の古墳があり、その傍に集落が形成されるなら、これが中心域のみの現象なら別として、音戸山や大枝山、広沢池付近などの群集墳近くにも集落跡が検出される可能性があるのではなかろうか。つまり嵯峨野に現在みられる程度の遺跡だけでなく、濃い密度で遺跡が存在すると想像する。秦 河勝により蜂

岡寺が建立(622年)されたと考えられる7世紀前半は、今回の集落跡・東ノ町古墳群とオーバーラップする部分が多く、秦氏の活動の盛んであった頃である。平安京遷都以前に葛野の地に居住し、治水を行い、養蚕業を興した彼らは、文献上に名を連ねることが多く、多人数、多項目にわたる歴史的な記録が残されている。また前記のような秦氏の築造した史跡、遺跡も相当数が現存している。にもかかわらず、他の古代の豪族、氏族と同様に多くの部分が歴史の底流に澱み、またある部分はずでに破壊されたり、忘れ去られたりしている。今回の調査はこれら忘れ去られつつある秦氏の生活文化、文献に残らない底流を解明する一つの手がかりになったものと考えている。また古墳時代のみでなく、平安時代、中世、近世と各時代の遺跡が良好な状態で嵯峨野に埋蔵されている可能性が大きい。一例をあげれば、太秦付近には昭和53年(1978)に当研究所が行った広隆寺弁天池経塚の調査^{註2}のように良好に遺構、遺物の残存していたところもあり、今回の調査においても平安時代から近世に至る遺構がかなり良い状態で検出されているのは前述のとおりであり、各時代の遺跡が良好に遺存する地域である。しかし京都市郊外の宅地化が進行し、嵯峨野一帯もその例に漏れず、年々現状は変化しつつはあるが、嵯峨野の持つ美しい景観があり、その中に数々の史跡や遺跡が大きな役割を果たしているのは今さらいうまでもない。清水山古墳や、常盤馬塚のように開発の波に押し流され十分な調査がされないで消滅した遺跡のあることも忘れてはならない。このことは我々文化財に携わる者にとっては恥ずべきことであり、開発当事者との連絡を緊密に行うこと、およびその地域に住む人々に文化財の重要さと意義を知らせなければならないという決意を新たにした問題でもあった。今回のように埋蔵文化財が良好に残っているようであれば、文化財に対する広報活動も必要となってこよう。しかし人々が生活して行く中では生活環境の改変もやむをえないことである。数多い史跡、埋蔵する遺跡の豊富な嵯峨野でこれに対処して行くことが我々の最も重要な問題であり、その解決こそ文化財保護の近道といえよう。(鈴木廣司)

註

- 1 上原真人『御堂ヶ池群集墳第20号墳』六勝寺研究会 1973年
- 2 江谷 寛「広隆寺弁天島の経塚群の調査」(『日本考古学協会昭和53年度総会研究発表要旨』1977年)

付 章 日本電信電話公社嵯峨野住宅集会所 新築に伴う発掘調査

この調査は日本電信電話公社の依頼を受け、京都市文化観光局文化財保護課の指導のもとに京都市埋蔵文化財研究所が行った。調査地は常盤仲之町集落跡調査地の西約30mにあたり、同集落関係の遺構・遺物の出土が予想された。また同地で多く検出された中世～近世の墓群、あるいは調査地南部に広がりをも想定されている広隆寺旧境内との関連も推測でき、調査を実施した。調査期間は昭和52年(1977)1月30日から2月18日までの20日間を発掘調査にあて、これ以後5月まで断続的に整理作業を行った。調査組織は以下のとおりである。

調査主体 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

調査員 平尾政幸・牛嶋 茂(写真担当)

補助員 堀内寛昭・渡辺丈俊・末松直子・村上 勉・武田光正

作業員 上杉 茂・上杉初雄・上田 博・白井次男・中山義雄・山田米蔵
井口義勝・加藤令之・夏原三郎・加藤昭二・勝見武次

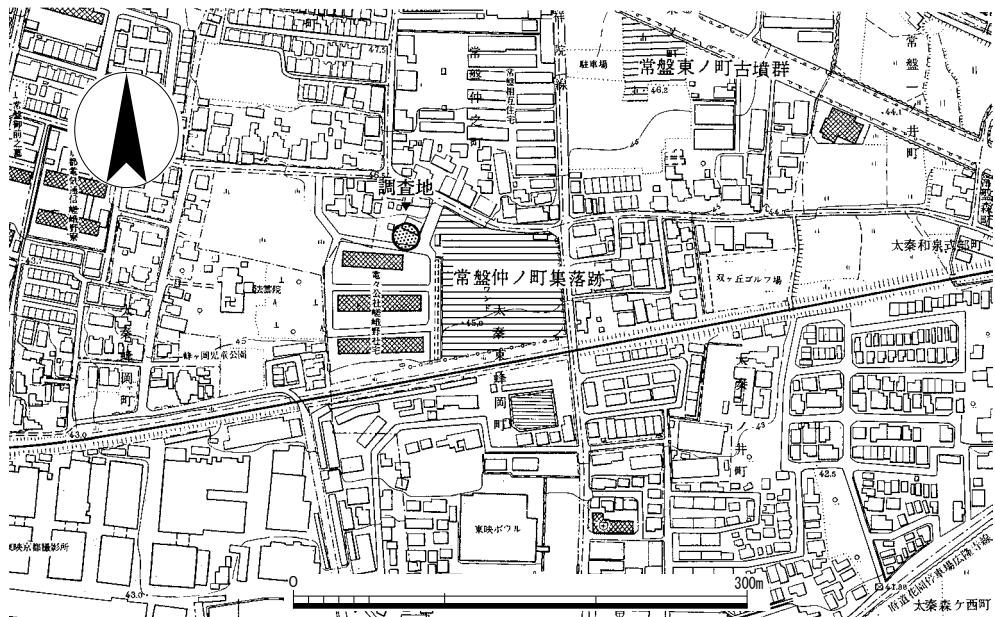


Fig. 29 調査位置図(1:5,000)

1 調査の経過

調査地中央には約 60cm の高低差があり、北へ一段高まっている。全面調査の前にこの段の性格を調べるため、南北に幅 1m のトレンチを設けて試掘した結果、現代の盛土であることがわかった。そこでトレンチを南北 12m・東西 16m に拡張し調査を行った。

トレンチ南半分の段の低い側では、住宅建設による整地層下に地山の淡黄灰色粘質土がみられた。整地前に上部を削平されており、コンクリート片・ガラス片・ベニヤ板などが地山上面に食い込んでいた。北側では厚い盛土に保護されていたため、南側よりも状態は良好であった。地山までの間に茶褐色砂泥、暗褐色砂泥の 2 層を確認した。

2 遺構

溝

トレンチ北寄りを東西に走る溝で、幅約 90cm、深さ約 40cm で茶灰色の粘性を帯びた均質な泥土が堆積していた。茶褐色砂泥上面で検出した唯一の遺構である。

ピット群

総数 92 基検出した。ピット群中や土壇との切り合いから時期差が認められるが、上部を削平されているとみられ、南半分で検出したものはわずかに底部を残すだけである。平面

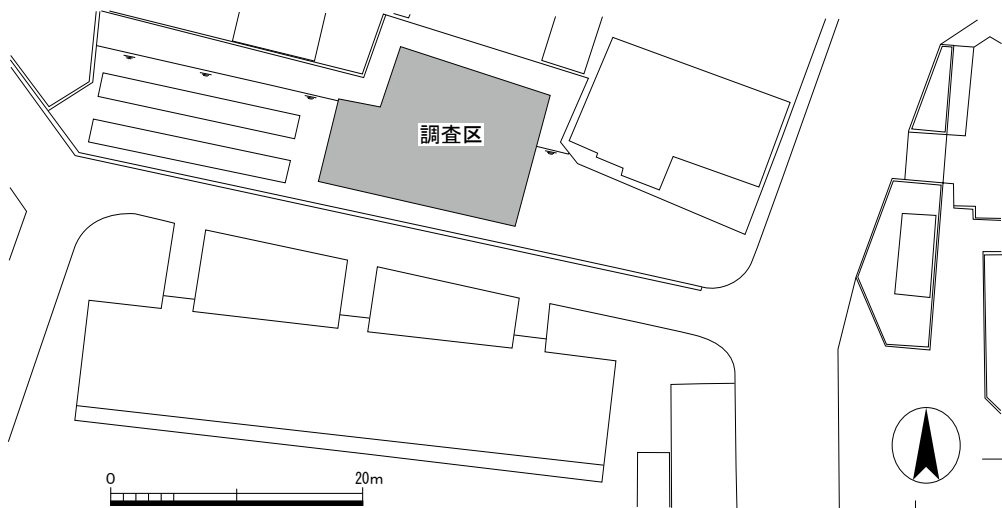


Fig. 30 調査地付近図(1:600)

的な相互関係は知り得ない。出土遺物で確認できるすべては中世のものであり、少なくともこの時期に小規模な建物の存在がうかがえるが、具体的に復元できるものはない。ここでは中世のピット群として報告する。

土壌

いずれもわずかに遺物を含むほかは、均一な砂泥の堆積したもので性格は不明である。ピット、土壌はすべて暗褐色砂泥上面で検出したものである。

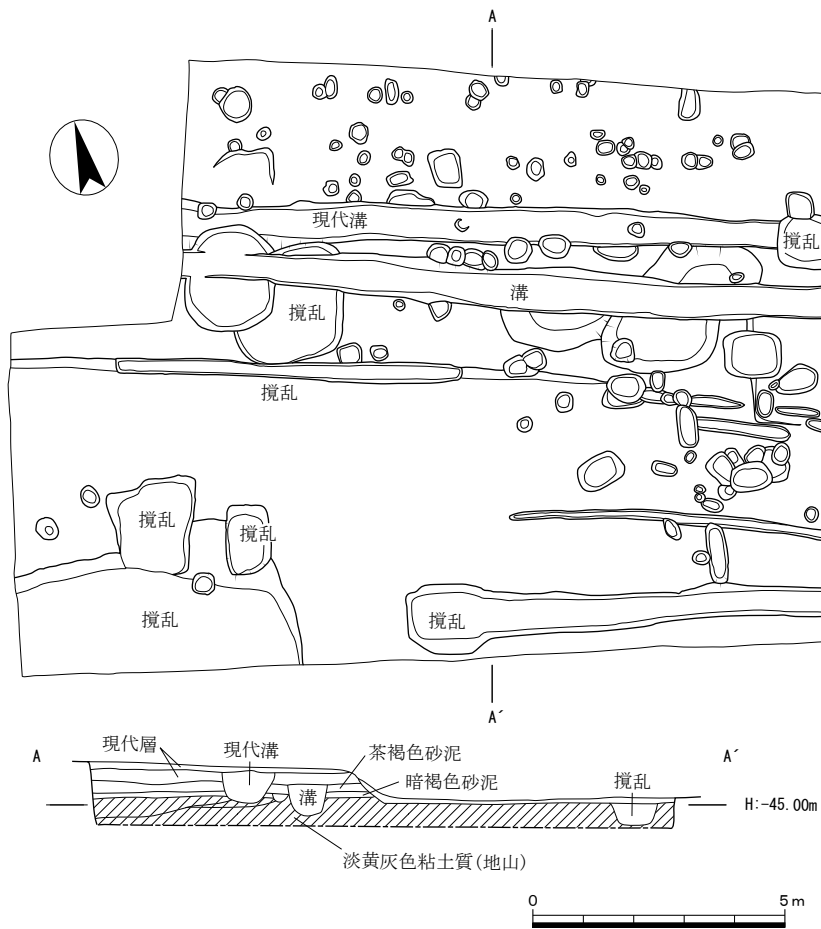


Fig. 31 トレンチ実測図(1:150)

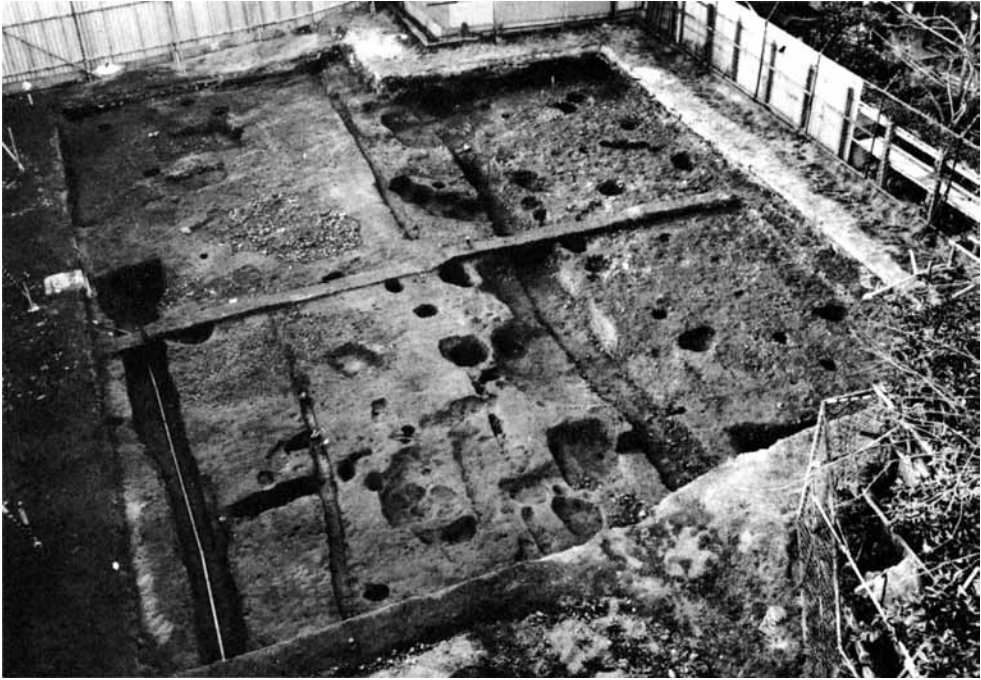


Fig. 32 調査地全景（東から）



Fig. 33 溝と土壌



Fig. 34 トレンチ北半ピット群

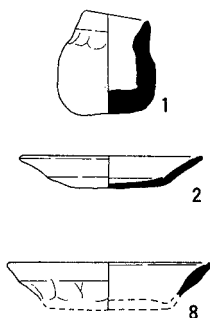
3 遺物

調査区全域を通じ、遺物は少ない。溝から出土した江戸時代後半のものが大半を占め、ピット・土壙からは、形状を知り得るものは少量で、図示 (Fig. 35-8・9・10) したものがすべてである。

溝出土遺物

1 土師器小壺

手づくねで造られたもので、頸部に指オサエの痕が残る。口縁部はナデる。厚手の粗製土器。



2 土師器皿 外面

指オサエ。内面全体

と口縁部外面を右回りにナデた後、内面の底部と体部の境にヘラ先状のものをあて一周する。

3～5 土師器小皿 小形の粗製土器。外面に掌痕を残し、口縁部は円形をなさず厚さも不均一である。

6・7 染付磁器椀 6は口縁部外面に波状を、7は外面に桐文を描く。6は胎土がやや粗く陶質である。

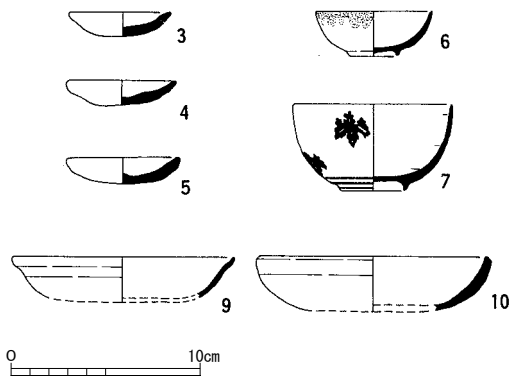


Fig. 35 遺物実測図 (1:4)

4 結語

今回の調査で期待された古墳時代集落関係の遺構・遺物は検出されなかった。この地区の地山である淡黄灰色粘質土は、常磐仲之町集落跡の調査で確認されたものと同一のものとみてさしつかえなく、遺構が存在するならば、この層を切って成立しているものと考えられる。このことは同集落跡の範囲がこの付近にまでは及んでいないことを思わせるが、遺物の散布もみられないことから、後世にすべて削平されていることの可能性を考慮して、今後の周辺の調査結果を待ちたい。また、中世の墓と考えられるものが一例もないことは、墓域がこの地区まで広がらないことを示すものであろうか。

(平尾政幸)

竪穴住居表

住居No.	形	規模(cm)	主軸	状態	複合関係	カマド				柱穴	床面	周溝	貯蔵穴		出土遺物	備考
						位置	材質	規模(cm)	状態				位置	規模(cm)		
1	隅丸方形	490 × 210 以上	N-5°-W	1/2以上調査 区域外					2 + α	貼り床 良好	ほぼ全周			土師器小片		
2	隅丸方形	320 × 280	N-55°-W	完全	14号をさる。	東壁中央	粘土	基部がわずかに のこる。	4	一部貼 り床	無	無		土師器 須恵器小片		
3	隅丸方形	350 × ?	N-25°-W	SD1にきられる。		北壁中央	粘土	半壊・支脚有り。	2 + α	全周	全周			須恵器蓋片 土師器小片		
4	方形	480 × 470	N-27°-W	SB1にきられる。		北壁中央						北西	100 × 50	土師器杯片 甗片		
5	方形	465 × 460	N-21°-E		6号にきられ、 7号をさる。	北壁やや東	粘土	壁をきらずにつくる。 支脚有り。	4						須恵器蓋 土師器甗小片	
6	方形	460 × 470	N-16°-W		5号・7号をさる。	北壁中央	粘土	壁をきらずにつくる。 支脚有り。	4						須恵器蓋片 甗片 土師器甗小片	
7	隅丸方形		N-17°-W		5号・6号に きられる。	北壁	粘土	壁をきらずにつくる。 支脚有り。	3 + α		無			須恵器蓋片 土師器小片		
8	方形	? × 350		SB5にきられる。					無		無			土師器小片		
9	方形				23号をさる。				2		無			土師器甗片		
10	方形	330 × ?	N-20°-W	SD1、SB8、 SB5にきられる。					無		無			須恵器甗体部 杯片 甗片 土付壺片 土師器高杯片		

住居No.	形 態	規 模 (cm)	主 軸	状 態	複合関係	カマド			柱 穴	床 面	周 溝	貯 蔵 穴		出 土 遺 物	備 考
						位 置	材 質	規 模 (cm)				状 態	位 置		
11	隅丸方形	385 × ?	N-130°-W		6号にきられ、13号をきる。	南壁やや東	粘土	80 × 90	壁をきらずにつくる。	3 + α	無		須惠器杯蓋片 土師器小片		
12	方 形	330 × 350		SD7、SK58にきられる。	15号をきる。						無		土師器小片 鉾澤 (柱穴内)		
13		? × ?			6号、11号にきられる。						南側の み				
14	方 形	515 × 515	N-14°-E	SD6にきられる。	2号、16号、18号にきられる。	北壁中央	粘土		2号住に壊される。	4	全周		須惠器杯片 礎頭部 土師器小片		
15	方 形	330 × 310	N-57°-W		12号にきられる。	北壁中央	粘土	50 × 50	壁に両袖がきり込む。	1 + α	無		須惠器器体部片 杯蓋・杯身 魏小片 土師器魏片 須惠器杯蓋片 土師器杯片 魏片		
16	方 形	450 × 330	N-8°-W	SD6にきられる。	14号、18号をきる。	北壁中央	粘土	? × 75	北壁は壊されている。支脚有り。	2 + α	東側の み				
17															
18		650 × 500 以上	N-90°-W	SD1、SD6にきられる。	16号をきられ、14号、21号をきる。	西壁中央			基部だけ。	2 + α	ほぼ全 周		須惠器杯蓋片 土師器鉢片		
19	隅丸方形	? × ?	N-10°-W	SD14にきられる。	20号にきられる。					2 + α	一部め ぐる		土師器小片		

住居 No.	形 態	規 模 (cm)	主 軸	状 態	複合関係	カマド				柱 穴	床 面	周 溝	貯 蔵 穴		出 土 遺 物	備 考	
						位 置	材 質	規 模 (cm)	状 態				位 置	規 模 (cm)			
20	方 形			SD14にきざられる。	SD14にきざらる。19号をささる。												須恵器杯身・甕 片 土師器小片
21				SD1、SD6にきざられる。	SD1、SD6に18号にきざられる。												土師器甕 土師器小片
22	隅丸方形																
23	方 形				9号にきざられる。												
24	方 形			SD1、SD6にきざられる。													

土壇墓表

土壇番号	形態	寸法			掘形内 堆積土	出土遺物	区分	時期	備考
		長さ・幅 (m)	径 (m)	深さ (cm)					
SK4 (北群)	楕円形 はっきりした肩を もたないくぼみ 状。	1.4 × 1.67	1.2	13	礫が多い中に、 暗褐色泥砂。 礫混黄褐色泥砂 赤褐色泥砂 } 上下	土師器・瓦器・瓦・常滑・須恵器	A	鎌倉時代 ～室町時代初期 (中世)	皿状の遺構、 瓦は礫と混じり、 埋め戻しに使う。
SK5 (北群)	円形 円筒形で壁面がほ ぼまっすぐな掘形 をもつ。 上層に礫が多い。 棺をもつと思われ る。			40					
SK6 (北群)	長方形 棺ないしは骨壺状 のものは検出され ない。	1.45 × 1.0		25	礫を含む茶褐色泥砂。	陶器・土師器・瓦・羽釜・石製品	D	近 世	釘を検出。
SK7 (北群)	楕円形 はっきりした肩を もたない皿状。 棺はない。	1.5 × 1.		15	礫が多い中に、 暗褐色泥砂。	須恵器・土師器・瓦・瓦器・白磁	A	中 世	土師器皿が副葬品である。
SK12 (北群)	長方形 棺をもつ土壇墓の タイプ。	1.7 × 1.3		15	礫は少ない。 暗茶褐色泥砂 系の2層。	土師器皿・瓦片	B	室町時代	釘をもつ。土師器皿が副葬品である。
SK14 (北群)	長方形。	1.7 × 1.0		5	礫は少ない。 暗茶褐色泥砂。	土師器皿・瓦瓦器片	B	室町時代	残りが悪く、不明確。
SK15 (北群)	隅丸長方形 浅い皿状。	2.2 × 1.5		7	礫を含む。 暗褐色泥砂。	土師器皿・瓦瓦器・常滑	A	中 世	
SK17 (北群)	長方形 浅く、ゆるい肩。	1.55 × 0.9		10	礫を含むが少 ない。暗茶褐色泥砂。	土師器皿・瓦	G	中 世	
SK20 (北群)	長方形 垂直な掘形。底は 平坦。	2.5 × 1.5		55	砂を含まない。 数層に分かれ 黄褐色の粒子 を含む。	土師器皿・瓦常滑・瓦器羽釜片		中 世	

土壌番号	形態	寸法			掘形内 堆積土	出土遺物	区分	時期	備考
		長さ・幅 (m)	径 (m)	深さ (cm)					
SK21 (北群)	長方形 底の丸い、浅いタイプ。	2.1 × 0.85		23	暗茶褐色泥砂 礫を含まない。	土師器・須 恵器・瓦	B	中世	
SK23 (北群)	長方形 棺をもつタイプ。	1.4 × 1.25		29	礫を含まない。 暗茶褐色泥砂。	土師器皿・ 瓦・羽釜・ 常滑	B	中世	釘をもつ。
SK24 (北群)	長方形 棺をもつタイプ。	1.75 × 1.25		32	礫を含まない。 暗茶褐色泥砂。	土師器皿・ 瓦羽釜・常 滑	B	中世	釘をもつ。
SK25 (北群)	円形 棺をもち、そのため2重様の形になる。		2.0	40	礫を下層に多く含む。 黄褐色・茶褐色の重層堆積。	陶器椀・棧 瓦・瓦・羽 釜・土師器・ 須恵器・釘	F	近世	釘と壁の状態 で、明らかに 円筒形の棺が わかる。陶器 の副葬品をも つ。PL. 14
SK28 (北群)	楕円形	1.95 × 1.46		25	礫を多く含む。 暗茶褐色泥砂。	瓦片・羽釜・ 陶器の鉢	A	中世	
SK29 (北群)	楕円形	1.8 × 1.6		17	礫をやや多く含む。 暗褐色泥砂。	土師器皿・ 陶器・瓦・ 石釜・羽釜・ 磁器	G	近世	釘をもつ。
SK30 (北群)	長方形	2.0 × 1.35		50	礫を多く含む。 暗褐色泥砂	土師器・須 恵器・瓦・ 磁器・羽釜		中世	PL. 14
SK31 (北群)	円形 棺をもつ。		2.3	45	礫を下層に多く含む。	土師器・陶 器・棧瓦・瓦 ・須恵器・鉄 製品	F	近世	SK52と切りあう。
SK32 (北群)	円形 ほとんどまっすぐな肩。		1.4	20	礫は少ない。 暗茶褐色泥砂。	土師器皿・ 磁器・瓦器・ 瓦	G	近世	
SK33 (北群)	楕円形	2.7 × 2.1		10	やや礫は少ない。	土師器皿・ 土鍋・磁器・ 須恵器	A	室町時代	半分を下水管に切られる。 土師器皿が副葬品である。

土壌番号	形態	寸法			掘形内 堆積土	出土遺物	区分	時期	備考
		長さ・幅 (m)	径 (m)	深さ (cm)					
SK34 (北群)	楕円形 傾斜をもつ壁でややオーバーハング気味になる。	1.4 × 0.95		50	礫は少ない。 暗褐色泥砂。	土師器皿・ 土鍋・天目・ 信楽・瓦・ 陶器・塩壺	G	近世	釘・寛永通寶を検出。
SK35 (北群)	楕円形	1.0 × 0.8		11	礫は少ない。 暗茶褐色泥砂。	土鍋・土師器・信楽・陶器	G	近世	Gのタイプであるが、残りが浅い。釘を検出。
SK37 (北群)	隅丸長方形 壁は垂直に近い。	2.0 × 0.8		30	礫は少ない。 暗褐色泥砂。	土師器皿・ 須恵器・瓦 質土器片	B	中世	
SK38 (北群)	長方形	1.4 × 0.7		15	礫は少ない。 暗褐色泥砂。	土師器皿・ 羽釜・瓦・ 磁器・天目 の香炉	E	近世	SK43を切る。
SK39 (南群)	方形 2重掘形で、Fタイプであるが、外掘形は隅丸方形になる。 円筒形の棺。	1.75 × 1.75		66	下層に礫を含む。黄褐色系統の3層以上。	土師器皿・ 陶器・瓦・ 磁器・須恵器	F	近世	土師器皿のセットが副葬品。棺の底板がかすかに残っていた。 釘も残る。 PL. 14
SK40 (北群)	円形 確実に棺(円筒形)をもつタイプ。		1.6	32	中・下層に礫を多く含む。 赤褐色・暗茶褐色系統の約4層。	瓦質盤・土師器皿・土鍋 瓦・信楽・棧瓦・須恵器	F	近世	釘をもつ。棺に使用していた材が一部残っていた。 PL. 35
SK41 (北群)	楕円形 一面に礫を敷くタイプである。 類例から墓と考えるが、確定はできない。	1.9 × 1.4		20	全面に礫を多く含む。 暗黄褐色泥砂。	土師器皿・ 常滑・陶器・ 須恵器・灰 釉	D	近世	
SK43 (北群)	長方形 壁を垂直にもつ。	1.25 × 0.7+ α		10	礫を含まない。 暗褐色泥砂。	土師器皿・ 信楽・陶器・ 瓦器(棧瓦 の胎土) 須 恵器	E	近世	半分を下水管に破壊されている。
SK44 (北群)	円形 ほぼ垂直な壁、底は平らに近い。		0.85	33	礫を含まない。 暗茶褐色泥砂。	土師器皿・ 陶器片・土 鍋・瓦・須 恵器	G	近世	土師器皿が副葬品。SK35・68に切られる。

土壙番号	形態	寸法			掘形内 堆積土	出土遺物	区 分	時 期	備 考
		長さ・幅 (m)	径 (m)	深さ (cm)					
SK45 (北群)	長方形 ほぼ垂直な壁。 底は平らに近い。	1.05 × 0.65		24	礫を含まない。 暗茶褐色泥砂。	土師器・羽 釜・陶器	E	近 世	
SK46 (北群)	円形 棺がやや一方に よっていたため か、完全な2重円 にならない。		1.5	45	下層に礫を多く 含む。 暗茶褐色泥砂3 層。	土師器皿・ 瓦 常滑・ 石臼 五輪 塔(火輪)・ 陶器	F	近 世	釘をもつ。(底 部から) PL. 14・36
SK47 (南群)	楕円形 掘形の形態からみ て、棺をもつFタ イプと考えられ る。	1.8 × 1.94		43	下層に礫を多く 含む。 暗茶褐色泥砂3 層。	土師器・瓦・ 陶器片	F	近 世	一部破壊されて いる。 釘は残っていない。
SK52 (北群)	円形 Fタイプで、SK31 を完掘したのち底 部より検出。		2.7	50	暗褐色泥砂。		F	近 世	PL. 14
SK55 (北群)	隅丸長方形 壁はやや傾斜する 程度。	1.5 × 1.0		30	礫を含む。 暗褐色泥 砂2層。	瓦・信楽	A	中 世	土師器皿は検出 されない。
SK56 (南群)	方形 棺をもっていたと 考えられる。 やや壁はオーバー ハンク気味にな る。	3.3 × 3.5		72	下層に礫を多く 含む。暗褐 色泥砂3層。	土師器皿・ 瓦器・火鉢・ 土鍋・瓦・ 釘	C	中 世	SK67と隣接して いる。 はっきりした副 葬品はみつから ない。 PL. 13・36
SK61 (南群)	円形 礫を含むがやや少 なく、Fタイプで ある。 棺をもっている。	1.9 × -		31	黄褐色砂礫。 暗褐色砂泥。	信楽・瓦	F	近 世	半分が調査地外 に出る。 釘は検出できな かったが、板の 残りがかすかに みられる。
SK62 (南群)	不整円 棺をもつ、内側の 掘形一面に板の腐 敗したものが残っ ていた。	1.9 × 1.6		58	黄褐色砂礫、 暗褐色泥砂に 大きい礫が多 い。	陶器・土師 器皿・瓦・ 信楽・天目	F	近 世	底部に釘をもつ。 陶器碗が大小 セットで副葬品 にされている。 土師皿も伴う。 PL. 36
SK63 (南群)	方形 掘形は垂直、礫は やや少ない。	1.7 × 1.6		26	黄褐色砂礫、 暗褐色泥砂2 層。	陶器・天目 土師器皿・ 瓦	G	近 世	

土壌番号	形態	寸法			掘形内堆積土	出土遺物	区分	時期	備考
		長さ・幅 (m)	径 (m)	深さ (cm)					
SK64 (南群)	長方形 やや傾斜のある掘形。 礫は少ない、但し、砂礫層で埋め戻されている。	1.75 × 1.36		20	黄褐色砂礫。	土師器・須恵器・陶器・瓦	E	近世	
SK65 (南群)	不整形 やや傾斜気味の壁。			17	暗褐色泥砂。	土師器皿・常滑・瓦・磁器	B	中世	SD7・SK56・66に切られ、完全な形は不明。
SK67 (南群)	方形 ほぼ垂直の壁をもつ。	1.2 × 1.15		41	礫を下層に含む。 暗褐色泥砂3層。	土師器皿・土鍋・瓦質・茶釜・瓦・陶器	C	近世	PL.13・36
SK68 (北群)				8	暗褐色泥砂。	瓦質・火鉢瓦・石硯	B	中世	SK44・45・79に切られ全体は不明。
SK69 (南群)	隅丸方形 垂直な壁。	1.5 × 1.0		49	礫を若干含む。 暗茶褐色泥砂。	信楽・瓦	C	中世	
SK70 (南群)	円形 ややなだらかな壁。底部は皿状で棺をもつ。		1.2	24	礫を若干含む。 暗茶褐色泥砂。	土師器皿・釘・磁器・瓦	G	近世	
SK71 (南群)	長方形 壁はやや垂直。	1.65 × 0.7		24	礫を含まない。 暗茶褐色泥砂。	土師器皿・瓦・陶器・須恵器	E	近世	SX8を切る。
SK72 (南群)	長方形	1.3 × 0.86		24	黄褐色砂礫。 暗褐色泥砂。	土師器皿・瓦	E	近世	SX8を切る。
SK73 (南群)	隅丸方形 羽釜を骨壺に使用している。	1.9 × 1.7		20	礫瓦を多量に含む。 暗褐色泥砂2層。	羽釜・土師器皿・瓦・須恵器・釘		鎌倉時代	大きめの礫で羽釜をかため、すえている。 PL.13・35
SK77 (南群)		1.1 × -		20		土師器皿・陶器・瓦・釘	G	近世	SK46に半分以上を切られる。
SK79 (北群)	楕円形 やや垂直に近い壁。	1.2 × 0.9		20	礫をかなり含む。 暗褐色泥砂。	土師器皿・陶器・瓦・常滑・信楽	D	近世	SK6に切られる。

土壌番号	形態	寸法			掘形内 堆積土	出土遺物	区分	時期	備考
		長さ・幅 (m)	径 (m)	深さ (cm)					
SK81 (南群)	円形		1.2	42	礫は少ない。 黄褐色砂礫、 暗褐色泥砂。	土師器皿・ 陶器・瓦・ 磁器	G	近 世	
SK82 (南群)	隅丸方形	1.2 × 1.0		30	礫は少ない。 暗褐色泥砂。	土師器皿・ 土鍋・瓦	C	近 世	土師器皿を、副 葬品にもつ。
SK88 (南群)				26	暗褐色泥砂。	土師器皿・ 瓦		中 世	SD7 に切られ、半 円にもならない。
SK89 (南群)	楕円形 ややならかな壁 をもつ。	1.15 × -		10	暗褐色泥砂。	土師器皿・ 釘・羽釜・ 瓦	B	中 世	土師器皿を副葬 品にもつ。 SX8 を切る。
SK92 (北群)	楕円形 垂直に近い壁をも つ。 皿状に近い底部。	1.7 × 1.4		15	暗茶褐色泥砂。	土師器皿・ 陶器	E	近 世	
SK93 (北群)	長方形 壁ほぼ垂直。	1.35 × 1.0		20	暗茶褐色泥砂、 わずかに礫を 含む。	土師器・陶 器・キセル の雁首	E	近 世	陶器碗の副葬品 をもつ。
SK94 (北群)	楕円形 3層にわたる、焼 土・灰の推移があ る。	- × 1.1		20	暗灰褐色泥砂。	土師器・須 恵器	E	近 世	SK92 に切られる。
SK95 (南群)	円形		1.5	20	わずかに礫を 含む。 暗茶褐色泥砂。	土師器皿・ 瓦	G	近 世	
SK101 (南群)	楕円形 傾斜をもつ壁。	2.1 × 1.5		54	暗茶褐色泥砂。	土師器皿・ 須恵器・陶 器 瓦	E	近 世	
SK115 (南群)	円形 2重掘形タイプ。		1.9	68	礫を多く含む。 暗茶褐色泥砂。	土師器皿・ 信楽・陶器・ 瓦・釘・石 臼	F	近 世	人骨を検出。 PL. 36
SK121 (南群)	長方形	1.45 × 0.9		23	暗褐色泥砂。	土師器・瓦	B	中 世	
SK127 (南群)	方形	0.7 × 0.65		20	暗褐色泥砂。	土師器・瓦	C	中 世	

土 器 観 察 表 (PL.15)

図版 番号	器 種	器 形	出土地点	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	焼成色調	胎 土	備 考
1		蓋	7号住 出土	器形は小形である。 天井部と口縁部とをわけ る稜や凹線は認められな い。	天井部外面へラケズリ。 内外面ヨコナデ。 天井部内面一定方向のナ デ。 回転方向は逆回り。	硬質 外面暗青 灰色 内面淡青 灰色	砂質の含 有が多い。	
2		蓋	5号住 出土	天井部と口縁部の境界に 段を有する。 口縁部は外方へひらく。	天井部外面へラ切り。 内外面ヨコナデ。 回転方向は逆回り。	軟質 灰白色	黒色砂の 含有が多 い。	生焼け
3		蓋	18号住 出土	全体に丸みをおびている。 天井部と口縁部との境界 には、わずかに稜がみと められる。	天井部外面はへラケズ リ。 天井部内面一定方向のナ デ。 内外面ヨコナデ。 回転方向は時計回り。	硬質 暗灰白色	砂質の含 有が少な い。緻密。	
4	須	蓋	11号住 出土	天井部は欠損している。 天井部と口縁部の境界は 凹む。	内外面ヨコナデ。	硬質 青灰色	細砂の含 有が多い。	
5 ・ 8	恵	杯	14号住 出土	たちあがりは低く内傾す る。 底部中央はやや尖ってい る。 受け部は外上方へのび端 部は丸くおさめる。	へラケズリは底部付近だ けである。 内外面ヨコナデ。 底部内面一定方向のナ デ。 回転方向は逆回り。	硬質 5は淡青灰色 8は暗褐色	5はやや砂 質の含有 が多い。8 は砂質の 含有が多 い。	
6	器	杯	12号住 出土	たちあがりは低く内傾す る。 受け部は短く端部は丸く おさめる。	内外面ヨコナデ。	やや硬質 灰白色	わずかに 砂質を含 有。 緻密。	
7 ・ 9		杯	遺物包 含層	たちあがりは内傾し非常 に低い。 受け部は水平方向にのび、 上面にはへらによる1条 の凹線を施している。	内外面ヨコナデ。	硬質 7は暗灰色 9は青灰色	7はわずか に砂質を 含有、緻 密。 9はやや砂 質を含有、 緻密。	
10		杯	10号住 出土	たちあがりは低く内傾す る。 受け部は外上方へのび、 端部は丸くおさめる。	内外面ヨコナデ。	硬質 灰色	砂質の含 有が少な い。 緻密。	

図版 番号	器 種	器 形	出土地点	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	焼成色調	胎 土	備 考
11		杯	15号住 出土	たちあがりは内傾し、非 常に低い。 受け部はわずかに外上方 へのび、端部は丸くおさ める。	内外面ヨコナデ。	硬質 青灰色。	やや砂質 の含有が 多い。 緻密。	
12		杯	遺物包 含層出 土	たちあがりは内傾し、非 常に低い。 受け部はわずかに外上方 へのび端部は丸くおさ める。	内外面ヨコナデ。	硬質 暗灰色。	砂質の含 有が少な い。 粗雑。	
13		長 頸 壺	10号住 出土	長頸壺の口頸部である。 ラッパ状にひらき、2段(1 段2条)に凹線がめぐる。 口縁端部は平坦で内傾す る。	内外面ヨコナデ。 回転方向は逆回り。	硬質 青灰色。	砂質の含 有が少な い。 緻密。	内外面自然 釉。
14	須 恵	甕	14号住 出土	頸部が細く口縁部が朝顔 状にひらく甕である。 頸部には2段(1単位5本) に縦方向の櫛描文をめぐ らし、文様帯の上下の限 界をそれぞれ2条の浅い 凹線によって区切ってい る。	内面ヨコナデ。	硬質 暗青灰色。	白い砂質 を含有。 緻密。	
15		器	甕	10号住 出土	口頸部欠損。体部は肩に 浅い凹線をめぐらす。 頸部と体部の境界には段 をもつ。	体部のヘラケズリは1/2 以下である。 体部上半ヨコナデ。 回転方向は逆回り。	軟質 灰白色。	砂質の含 有がかな り多い。
16		甕	15号住 出土	甕の体部破片である。 肩部に凹線をめぐらし、 明瞭な段を構成する。	体部のヘラケズリは(15) よりも幅がひろい。 回転方向は逆回り。	硬質 淡青灰色。	粗砂の含 有が多い。	
17			10号住 出土	脚付の壺底部と考えられ る。		硬質 青灰色。	黒色砂の 含有が多 い。	
18		直口 壺	14号住 出土	直口壺の体部下半と考え られる。	底部外面ヘラケズリ。 底部内面不定方向のナ デ。 回転方向は逆回り。	硬質 淡青灰色。	砂質の含 有が少な い。 緻密。	

図版 番号	器 種	器 形	出土地点	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	焼成色調	胎 土	備 考
19	須 恵	提 瓶	8号住 出土	提瓶の頸部から体部上半 である。肩部に円形凸起が左 右対称に1対つく。	頸部ヨコナデ、頸部と体 部を別々につくっている。	硬質 青灰色。	粗砂の含 有が多い。 粒子がや や粗い。	
20	大 形 甕	大 形 甕	14号住 出土	頸部の破片。頸部はやや 外反し、外上方へのびる。	体部外面平行タタキメ 文、体部内面青海波文が 施されている。	硬質 外は灰色 内は青灰色。	砂質の含 有が少ない。	
21	(高) 杯	(高) 杯	10号住 出土	体・口縁部は外上方への び口縁端部はさらに外反 する。 小破片であるため詳細は つかめないが高杯になる 可能性もある。	口縁部はナデ。 体部は摩滅しており不明。 内面はヘラミガキ。	硬質 赤褐色。	砂質の含 有が非常 に少ない。 緻密。	
22	杯	杯	4号住 出土	体・口縁部は丸みをもつ て外上方へのびる。 底部は欠損しており、不 明。	口縁部ナデ、内面は時計 回りに暗文を施してい る。	硬質 赤褐色。	細砂の含 有が多い。 緻密。	
23	土 杯	土 杯	5号住 出土	体・口縁部は丸みをもつ て外上方へのび端部はわ ずかにつまみ上げている。	口縁部ナデ。 体部外面は未調整。内面 は逆回りに暗文を施して いる。	硬質 赤褐色。	緻密。	
24	杯	杯	C-3 遺構検 出中	体・口縁部は外上方への びる。 口縁部内面に段を有する。	口縁部ナデ。 体・口縁部外面は粗く軽 いヘラミガキ。内面は時 計回りに暗文を施してい る。	硬質 赤褐色。	砂質の含 有が少ない。 緻密。	
25	師 椀	師 椀	11号住 出土	体・口縁部は直線的に外 上方へのび口縁端部は外 反する。	口縁部ナデ。 体部内面ヨコ方向のハケ メ。	硬質 淡赤褐色。	粗砂を含 有。	
26	深 鉢	深 鉢	18号住 出土	体・口縁部は外上方への び、口縁部はわずかに 外反する。	口縁部ナデ。 体部外面はやや粗いハケ メ調整。 体部内面は粗いハケメ。	やや硬質 赤褐色。	細砂の含 有が多い。	
27	器 甕	器 甕	15号住 出土	口縁部はやや内湾気味に 外上方へのび端部は平坦 である。	口縁部ナデ。	軟質 淡赤褐色。	砂質の含 有が多い。	
28	甕	甕	9号住 出土	口縁部はやや内湾気味に 外上方へのびる。	口縁部ナデ。	軟質 淡赤褐色。	微砂の含 有が多い。	
29	甕	甕	21号住 出土	口縁部から体部にかけて 「く」の字状をなし口縁端 部はわずかにつまみ出し ている。体部は砲弾形を 呈すると考えられる。	口縁部外面及び体部外面 は縦方向のハケメ調整が 施されているが、その境 界はナデ。口縁部内面は ヨコ方向のハケメ調整の のち軽いナデ。体部内面 ハケメ。	やや硬質 淡赤褐色。	微砂を含 有。緻密。	

中世～近世の遺物 (PL. 16・17)

図版 番号	器 種	器 形	出土地点	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	焼成色調	胎 土	備 考
30	土		SK12 上層	口縁部は、ほぼ水平に張り出し、やや内傾気味に上方にたちあがる。口縁端部の断面形は三角形をなし、口縁部内面につまみあげられた形を呈する。そのため口縁部内面が溝状をなす。底部は平底。体部はやや外傾気味に口縁部に至る。	口縁部はナデ。体部内外面ともオサエ。底部と体部の境に横ナデがみられる。	やや軟質 茶褐色。	砂質の含有が少ない。緻密。	すすを多量に付着させるため、全体的に黒褐色をなす。室町時代後期。
31			SK20	口縁部は、ほぼ水平に上方へのび、外傾気味に上方へのびる。口縁端部はやや肉厚で、わずかに丸みをおびる。	口縁部はナデ。体部内面を横方向にナデ。体部外面はオサエ。	硬質 淡灰茶褐色。	砂質の含有が少ない。緻密。	すすを多量に付着させ黒褐色をなす。鎌倉時代。
32			H3 茶褐色 泥砂	口縁部はほぼ水平に張り出し、つまみあげられた形で上方へのびる。口縁端部はほぼ平坦。	口縁部はナデ。体部内外面ともおさえてあるが、内面は軽いナデもみられる。	硬質 淡灰褐色。	わずかに砂を含む。	すすを付着させる。室町時代。
33	質 鍋		SK33	口縁部は外反する。口縁端部内面に段をもち、凹帯を作る。	口縁部、体部内面をナデ。体部外面はオサエ。	硬質 淡青灰色。	砂少なく緻密。	すすを付着させる。室町時代。
34			I6 黄褐色 泥土	口縁部は内湾気味に外方にのびる。口縁端部はほぼ平坦。底部は平底。体部はほぼ垂直に口縁部に至る。	口縁端部から内面にかけナデ。体部内面はナデ。体部外面はオサエ。	硬質 灰白色。	砂質の含有が少ない。緻密。	すすの付着多い。外面は黒褐色をなす。平安時代後期。
35・ 36・ 37	器		SK20	口縁部は、ほぼ水平に外方にのび、口縁端部上面が、つまみあげられた形で上方へのびる。口縁端部の断面形は三角形をなす。口縁端部:35は凹帯を作る。36・37は平坦。	口縁端部から内面にかけナデ。体部内面ナデ。体部外面はオサエ。	35は軟質 36、37は硬質 淡茶褐色。	36砂をやや多く含む。緻密。35、37は砂少なく緻密。	すすを多く付着させ、黒褐色をなす。鎌倉時代。

図版 番号	器 種	器 形	出土地点	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	焼成色調	胎 土	備 考
39	瓦	三脚付羽釜	SK73	口縁部は内傾する。口縁部に3本の螺線状の沈線を入れる。 口縁端部上面は平坦。 体部は内湾し、球状をなす。体部中部に3本の脚をつける。 底部は丸底。	つばの端部から口縁部にかけてナデ。 体部外面はオサエ。 つば、脚はとりつけ。	硬質 黒褐色。	砂の含有 少ない。 緻密。	ミニチュア。 鎌倉時代。
38 ・ 40	瓦	質 釜	SK20	口縁部から体部にかけて、やや内湾する。 口縁端部上面は平坦。 つばの端部は平坦。 口縁部中程に1本沈線が入る。	つばの下面から口縁部にかけてナデ。 体部内面、38はハケ調整、40はナデ。 体部外面はオサエ。	やや軟質 茶褐色。	砂の含有 少ない。 緻密。	鎌倉時代。
41			SK10	口縁部から体部にかけてやや内湾する。 口縁端部はやや台形状をなす。 口縁部に1本の沈線をもつ。 つばの端部は、わずかに丸みをもつ。	口縁端部からつば下面にかけてナデ。 体部内面ナデ。体部外面はオサエ。	硬質 灰褐色。	砂は少なく 緻密。	すすを付着させる。 室町時代。
42			SK20	口縁部はやや内傾。 口縁部外面に段を有する。さらに、下方に1本の沈線をもつ。 つばの端部は丸みをもつ。	口縁端部からつば下面にかけてナデ。 口縁部内面にハケメ。	硬質 黒褐色。	砂は少なく 緻密。	鎌倉時代。
43			J4	口縁端部上面は平坦であるが、内側をわずかにつまみ出す。 つばの端部を丸くおさめる。	口縁端部からつば端部にかけてナデ。 体部内面はナデ、外面はオサエ。	硬質 灰白色。	砂の含有 多い。	中世。
44			SK15	口縁部はやや外反する。 口縁端部上面は平坦。 つばの部分はやや長く、端部を丸くおさめる。	口縁部からつばの下方にかけてナデ。 体部内面はナデ。	やや軟質 赤褐色。	砂を多く 含む。	室町時代。
45			SK18	体部はわずかに内湾する。 口縁端部は丸くなり、やや内側にまきこむ。	口縁部からつばの端部にかけてナデ。 体部内面はナデ、外面はオサエ。	硬質 淡茶褐色。	砂は少ない。 緻密。	中世。
46	SK19	口縁部から体部にかけて内湾する。 口縁端部が、台形状をなし、外方にはりだす。 つばの端部はやや丸みをもつ。	口縁部からつばの下方にかけてナデ。 体部内面はナデ。 体部外面はオサエ。	軟質 灰白色。	砂は少ない。 緻密。	わずかにすすを付着させる。 中世。		

図版 番号	器種	器形	出土地点	形態の特徴	手法の特徴	焼成色調	胎土	備考
47	瓦 質 土 器	釜	SK10	口縁部はやや内傾する。 口縁部中ほどに段を有する。 つばの端部は丸みをおびる。 体部は内湾する。 底部は平底。 口縁端部内側に、つまみ出された凸帯をもつ。	口縁部からつば端部にかけてナデ。 体部内面はナデ。 底部近くになりナデを施さない。 体部外面はオサエ。	硬質。 茶褐色。	砂を多く含む。	すすを付着させる。 室町時代。
48			SK73	口縁部から体部にかけて内湾する。 口縁部中ほどに広い凹帯をもつ。 口縁端部上面は平坦。 つばの端部はとがり気味に丸くおさめる。 つばに1列2個の孔を対にもつ。	口縁部からつば下方にかけてナデ。 体部内面はザラザラしている。 ハケなどの調整はみられない。 体部外面はオサエ。	硬質。 黒褐色。	砂を多く含む。 ザラつく。	すすを付着させる。 鎌倉時代。
49	陶 器	椀	SK25	口縁部から体部にかけてまっすぐでやや内傾する。 口縁端部上面はやや丸みをおびる。 底部は丸みもちややとがり気味の高台をつける。	全面にナデをほどこし調整したのちに外面には高台中部まで釉（うわぐすり）。 底部外面はロクロの回転を利用したヘラ切り。	硬く、釉はガラス質を示す。 生地は赤褐色。	砂質少なく比較的密である。	釉:外面は明るい草色 内面は白地。 口縁部内面に紺色で四つ割花卉文の連続を配す。
50			SK25	口縁部から体部にかけてわずかに丸みもち開く。 口縁端部上面はややとがりぎみ。 底部は丸みもち、高台をつける。 高台端部は平坦。	49と同。	生地は灰白色。	砂質少なく緻密。	釉:外面は明るい草色 内面は白地。 口縁部内面、底部内面に紺色で四つ割花卉文の連続を配す。 49と共にSK25の副葬品。
51			SK62	口縁部から体部にかけて内湾し、半球状をなす。 口縁端部はとがり気味。 やや平坦な底部にわずかに外にふんばる小さな高台がつく。 端部は平坦。	全面ナデ。底部の高台ぎわまで釉をかける。 高台から内底部は生地のまま。	硬く、ガラス質の釉。 生地は茶褐色。	緻密。	釉は内外面ともに淡緑灰色。
52			SK62	内湾気味の体部をもち、途中よりやや内傾気味に上方に立ちあがる。 口縁端部は内傾気味で上端部は丸みをおびる。 底部は平坦で断面が方形をなす。 高台をつける。	51と同。	生地は淡灰褐色。	緻密。	釉は内外面ともに淡灰褐色（光沢） 51と共にSK62の副葬品。

図版 番号	器種	器形	出土地点	形態の特徴	手法の特徴	焼成色調	胎土	備考
53	陶器	椀	SK87	口縁部はほぼ垂直にたちあがる。 口縁端部上面はやや丸みをもつ。 底部は丸みをもち、幅広の高台をつける。 高台端面は平坦。	全面ナデ。 高台ぎわまで釉をかける。	硬質。 生地は乳白色。	緻密。	釉は内外面ともに淡黄褐色。 体部外面に暗褐色の帯を2本描く。
54			B5 黄褐色 砂礫	体部に丸みをもち口ひろがりに開く。 口縁端部上面はとがり気味。 平底。 長い三角形をなす高台をつける。	全面ナデ。 全体に暗緑灰色の釉をつける。	硬質。 ガラス質。 生地は青灰色。	砂を多く含む。	暗青灰色の飛ぶ鳥の図柄を示す。 重ね焼きのあと底部内面にのこる。
55			SK25	体部にやや丸みをもち口広がりに開く。 口縁端部上面は丸みをおびる。 平底。 三角形の高台をもつ。 端部はやや平坦。	全面ナデ。 全体を釉でおおう。	硬質。 ガラス質。 生地は灰白色。	砂は少なく緻密。	やや青みがかかった乳白色。 体部外面に濃紺色で草花の図柄をつける。
56	染付磁器	椀	SK31	体部から口縁部にかけてやや外傾気味にほぼまっすぐに至る。 口縁端部はやや丸みをおびる。 平底。 断面が長方形のやや外方にふんばる高台をつける。	全面ナデ。 全体を釉でおおう。	硬質。 光沢のあるガラス質。 生地は乳白色。	わずかに砂がみられるが、全体に緻密。	外面:口縁部に雲、体部に桐、底部に草花の図柄を配する。 内面:口縁部に四つ割り花弁文の連続。 底部に梅、松、楓の三つ追い模様。 底部外面に「大明年製」。
57			SK3	体部はやや内湾気味に口縁部に至る。 口縁端部は丸くおさめる。 平底。 高台をつける。 端部はまるみをおびる。	全面ナデ。	硬質。 ややにぶい光沢の淡青灰色。	砂は少なく緻密。	重ね焼きのあとが底部内面にみられる。 花と枝の図柄。(濃紺)
58			香炉	SK38	口縁部はやや外傾気味にまっすぐ口縁端部に至る。 口縁端部外側がやや張り出す。 口縁端部上面は平坦。 体部は外方に張り出す。 底部に短い三脚が付く。	体部内外面ともナデ。 底部に糸切り痕残る。	硬質。 生地は明茶褐色。	砂は少なく緻密。

図版 番号	器種	器形	出土地点	形態の特徴	手法の特徴	焼成色調	胎土	備考
59	陶器		SK38	口縁部は垂直に口縁端部に至る。 口縁端部はつまみ出された形で外方に張り出す。体部は外方に張り出す。豆形の三脚がつく。	体部・内外面ともナデ。底部に糸切り痕残る。	硬質 生地は淡茶褐色。	砂は少なく緻密。	釉は鉄釉が体部・口縁部内面にかかる。
60	土師器	香炉	I2 暗褐色 泥土	口縁部は垂直に口縁端部に至る。 口縁端部外側が外方に張り出し平坦面をなす。体部は外方に張り出す。	全体ナデ。	軟質 淡赤褐色。	砂は少ない。	
61	陶器		J3 暗茶褐色 泥砂	口縁端部外側が外方に張り出し平坦面をなす。体部は外方に張り出す。	体部内外面ともナデ。体部内面には釉がかからない。	硬質 生地はガラス質の灰白色。	砂は含まない。	脚の付いていた痕跡がある。
62	瓦質		SK7	体部はほぼ垂直で、口縁端部に至り、外反する。底部は平坦。幅広の三脚を付ける。	外面はナデ。体部内面はおさえたのちかるいナデ。	硬質 淡褐色。	微砂を含む。	体部に菱形を4つ組合わせた紋様をもつ。
63		高台付小皿	SK15	口縁部はゆったりと開く。口縁端部は丸くおさめる。三角形の高台をもつ。	全体にナデ。	硬質 灰白色。	砂を多く含む。	内面に自然釉を付着させる。
64	陶器	高台付皿	SK125	外傾する体部にやや内湾する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。平底。断面三角形の高台をつける。	全体にナデ。	やや軟質 生地は黄白色。	砂を多く含む。	体部、口縁部外面に鉄釉が付着するが高台には至らない。
65		おろし皿	H5 灰褐色 泥土	外傾する体部をもち、口縁端部両側がややつまみ出された形で凸帯を作り、そのため口縁端部上面はわずかに溝状をなす。片口をもつ。底部内面におろし目をもつ。	ナデ。底部は糸切り。	硬質 淡茶褐色。	砂を多く含む。	体部、口縁部内外面に緑灰色の釉を付着させる。
66	土師器	三脚付皿	SK124	ゆったりと広がる体部が口縁部に至り、垂直にたちあがる。口縁端部は丸みをおび、やや内側に巻き込む。三角形をなす脚をもつ。	脚は貼り付け。	軟質 淡赤褐色。	砂を多く含む。	摩滅が激しい。

図版 番号	器 種	器 形	出土地点	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	焼成色調	胎 土	備 考
67	陶 器	壺	SK6	やや張り気味の肩をもつ。 平底。肩部に5本の沈線をもつ。	肩部から頸部にかけてナデ。 肩部より下部はオサエ。	硬質 赤褐色。	細砂を多く含む。	口縁部を欠く。
68		花鉢	B6 暗茶褐色 泥土	口縁の平面形は隅丸の長方形をなす。 体部を3段に作る。 口縁部はまっすぐ立ちあがる。 口縁端部上面は平坦。耳、脚をもつ。	全面にナデ。 底部はヘラ切り。	硬質 茶褐色。	砂少なく 緻密。	緑灰色の釉が、外面全体にかかる。
69	瓦 質	鉢	B5 赤褐色 泥砂	やや外傾気味の体部をもち、口縁部に至りさらに開く。 口縁端部外側が張り出し気味で上端部は丸くおさまる。 平底。 脚をもつ。	口縁部上端面、体部内面をナデ。 体部外面にヘラミガキがされる。 口縁部内面、粗いヘラケズリ。 底部は、オサエのみ。	硬質 黒褐色。	細砂を多く含む。	
70		釜	SK67	体部は張り出し、丸みをもつ。 口縁部はほぼまっすぐ立ち上る。 口縁端部上面は平坦にする。 肩部に沈線。 横面に孔のあいた耳をもつ。	体部上面、口縁部ナデ。 他はオサエのみ。	硬質 黒褐色	砂は少なく 緻密。	つばの部分が欠ける。 胎土の色は茶褐色。
71		盤	SK40	口縁部は厚手で垂直に立ち上る。 口縁端部上面は平坦。 平底。 幅の広い厚手の3脚をもつ。	全体にナデ。 底部の脚より外側のみ横にヘラケズリ。	硬質 淡黒褐色。 やや光沢をおびる。	微砂を含む。	胎土の色は淡灰色。
72	土師器		C3 黄褐色 砂礫	口縁部は外反する。 口縁端部は丸みをもち、内面に広い凹帯をもつ。 枯れ木状のタタキをもつ。	口縁部ナデ。	軟質 赤褐色。	細砂を多く含む。	摩滅が激しい。
73	陶 器	壺	H2 石塊	口縁部はやや外傾し、端部に至り丸まり外に厚く張り出す。 体部は丸みをおびる。 肩部、体部に沈線をもつ。	全体にナデ。	硬質 赤褐色。	砂を多く含む。	
74			B4 暗褐色 泥土	口縁部は外反する。 口縁端部は上方につまみあげられた形で尖り、下方はやや厚手で、断面を長方形に引き出される。	全体にナデ。	硬質 赤褐色。	粗い砂を多く含む。	緑灰色の釉が一部にかかる。

(単位:mm)

瓦観察表 軒丸瓦 (PL. 18 ~ 20)

図版番号	出土地	同范出土数量	瓦当部										丸瓦部				瓦当部接合の手法	他の出土地	胎土備考							
			周縁径	文様区径	内区径	外区径	中房径	珠文数	蓮子数	弁の向き	凸面叩	凸面	凹面	側面	瓦当裏面	外径				内径	厚	玉縁長	丸瓦長	胎土の色調	焼成	色調
1 SX8		168	108	12	84	60	12	12	21	12	8		スリケシ	へラ	布	へラ	ナデ				暗灰色	硬	赤褐色	瓦当裏上部に溝をつけて接合する。瓦当部側面に左から右へのナデ。円弧状。接合線を示している。		長石、石英を多く含み表面はザラつく。中層に十字あり。
3 SX8		24	120	16	88	59	14	30	12	8		スリケシ	へラ	布	へラ	押圧				赤褐色	硬		外縁部にナデがある。瓦当裏上部に溝をつけて接合する。円弧状接合線を示している。	河内若江廃寺 三条西殿 広隆寺	長石、石英を含み中層に円がある。砂多い。	
6 SK1		4	168	10	148	100	24		21		左	スリケシ	へラ	布	へラ	押圧ナデ	165	117	30	250以上	灰白色	軟	黄灰色	外縁部にへラ。瓦当裏上部に溝をつけて接合する。円弧状接合線。		珠文がつぶれ気味。巴の尾端部が3つとも接合している。砂多い。

(単位mm)

図版番号	出土地	同范出土数量	瓦当部										丸瓦部						瓦当部接合の手法	他の出土地	胎土備考							
			周縁径	周縁幅	文様区径	内区径	外区径	中房区径	珠文数	蓮子数	弁数	巴文の向き	凸面	凸面叩	凸面	凹面	側面	瓦当裏面				外径	内径	厚	玉縁長	丸瓦長	胎土の色調	焼成
7 SK2		1	148	10	128	96	16	20	38	1+4	6			へラ	布		押圧	159	149				灰白色	硬	黒褐色	外縁部にへラケズリ。 瓦当裏面上部に溝をつけて丸瓦をはさんで接合する。 円弧状接合線。		砂少ない。 花紋雄蕊23。
8 SK1		3	170	11	148	120	12	45	24	1+8	8		へラ	布		押圧ナデ	162	149	20	1	10以上	灰白色	硬	黒褐色	外縁部へラケズリ。 瓦当裏面上部に丸瓦を接合する。 円弧状接合		やや砂を含む。 雄蕊32。	
9 SK22		1	154	10	134	96	19		23			左	指ナデ	布	へラ	指ナデ	155	146	20		250以上	灰白色	硬	暗褐色	瓦当部側面にへラケズリ。 瓦当裏面上部に溝をつけて丸瓦を接合する。 円弧状接合線。		砂少なく緻密。	
10 SD3		4	130	14	106	80	10		15			右	縄目	布	へラ	押圧ナデ						灰白色	やや硬	黒褐色	瓦当裏面に丸瓦端面をあてて接合する。 円弧状接合線。	西寺 鳥羽離宮跡	若干砂を含む。 筈キズ。	

(単位mm)

図版番号	同范出土数量	瓦当部										丸瓦部							瓦当部接合の手法	他の出土地	胎土備考			
		瓦当部					調整					成形	胎土の色調	焼成	色調									
		周縁直径	文様区径	内区径	外区幅	中房径	珠文数	蓮子数	弁文の向き	凸面叩	凸面					凹面	側面	瓦当裏面				外径	内径	厚
11 SK3 SD3	3 4	128	104	80	12	45	1+5	8	巴文の向き	凹面 布目数 20×20	凸面	へラ	凸面	布	側面	ナデ	外径	内径	厚	玉縁長	丸瓦長	瓦当裏面に丸瓦 端部をあてて接 合する。 台形状接合線。	内裏跡 朝聖院跡 鳥羽離宮跡 平安京・左 京四条一坊。	砂少なく緻密。 弁間文8。范キズ。
12 SK73 包含層	1 3	85 以上	68 以上	66 以上	2	41	1+6			14	スリ ケン	へラ	凸面	布	側面	押圧	外径	内径	厚	玉縁長	丸瓦長	瓦当裏面に溝を つけて接合する。 円弧状接合線。	細かい砂を含み 間隙が多くある。 雄蕊25以上。	
13 中央 拡張 区	4	125 以上	102 以上	67 以上	26	35 以上	8								側面	へラ	外径	内径	厚	玉縁長	丸瓦長	瓦当裏面に溝を つけて接合する。 台形状接合線。	雲母、長石、石英 を含む。 外縁に唐草文。	
14 SD1	1	107 以上	107 以上	80											側面	指ナデ	外径	内径	厚	玉縁長	丸瓦長	瓦当裏面に溝を つけて接合する。 円弧状接合線。	表面摩滅。長石、 石英を非常に多 く含む。 珠文は18と考え られる。	
15 SX8	4	93 以上	78 以上					右							側面	押圧ナデ	外径	内径	厚	玉縁長	丸瓦長	外縁はナデ。瓦 当裏面に溝をつ けて接合する。 円弧状接合線。	細かい砂を含む。 丸瓦の接合部か らはずれている。	

(単位mm)

図版番号	出土地	同范出土数量	瓦部										丸瓦部						瓦当部接合の手法	他の出土地	胎土備考					
			径	周縁幅	文様区径	内区径	外区径	中房径	珠文数	蓮子数	弁の向き	巴文の向き	凸面叩	凸面	凹面	側面	瓦当裏面	外径				内径	厚	玉縁長	丸瓦長	胎土の色調
16 B区 赤褐色 泥砂		1	110	12	86	49	18															黒褐色	やや硬	暗灰色	瓦当裏面に丸瓦 端部を接合する。 円弧状接合線。	石英・長石など の細かい砂を多 く含む。
17 SX8		3	90 以上	16 以上	73 以上	55	18															赤褐色	やや軟	赤褐色	瓦当裏面に溝を つけて接合して いる。 円弧状接合線。	范キズがある。 砂少なく緻密。
18 SX4 SX7 その他		1 1 3	125 以上	10 以上	115 以上	91	25															黄白色	軟	黒褐色		細かい砂をやや 多く含む。
19 SX65		1	110 以上	不明	85 以上	15	35 以上															灰白色	軟	灰白色	瓦当裏面に溝を つけて接合して いる。	細かい砂を含む がかなり密。 もともと黒褐色 であると考えら れる。
20 SK122		1		20		10																灰白色	軟	黒褐色	瓦当裏面に溝を つけて接合して いる。	若干砂を含む。

軒平瓦 (PL. 18 ~ 21)

(単位mm)

図版番号	出土地	瓦当部										平瓦部										胎土備考	他の出土地	瓦当部成形の手法	色の調	焼成	胎土の色調					
		同出土数量	幅	弧深	弧高	外区幅	文区	文区ヨコ	文区タテ	中心飾	単位数	起點	一転方向	反転数	珠文	狭端幅	厚	凹布糸	凹布糸×20	面百数	凸面叩							凸面	凹面	広端	狭端	側面
2 SX8		12	160	14	28	4	16	141	右	有					135	15	20	26		押圧	布	へう	へう	へう	へう	赤褐色	硬	赤褐色	赤褐色	折り曲げ。	かなり大きめの礫を多く含む。	
4 SX8		8	188	19	31	6	21	165	左	6					18				押圧	布	へう	へう	へう	へう	赤褐色	硬	赤褐色	赤褐色	折り曲げ。	非常に粗く、礫を含む。瓦当面に布目。		
5 SK1 SK22		4	245	30	44	7	5	28	233		9				10	230	18		離れ砂		へう	へう	へう	へう	黄褐色	硬	黄褐色	黒褐色	貼り付け。平瓦広端凸面に粘土を貼って厚くして瓦当を造る。	瓦当面に范キズIとX。砂少なく緻密。		
21 SX8		45	165	14	22	7	16	150	右	有					140	16	20	26	押圧	布	へう	へう	へう	へう	黄褐色	硬	黄褐色	淡黄褐色	折り曲げ。	小礫を含む。		
22 SK18		1	165		32	7	22	150	左							22			押圧	布	へう	へう	へう	へう	赤褐色	軟	赤褐色	赤褐色	折り曲げ。	へう記号「ル」。		

(単位 mm)

図版番号	出土地	同範出土数量	瓦当部										平瓦部					胎土の色調	焼成	色調	瓦当部成形の手法	他の出土地	胎土備考										
			幅	弧深	夕テ	周縁幅	外区幅	文区	文区	文区	中心飾	単位数	起点	一転方向	反転数	珠文	狭端幅							厚	凹布	面数	叩	凸面	凸面	凹面	広端	狭端	側面
23	SD3	20	195	25	35										28	186		有	一葉	下	上	左転										法金剛院 左京四条 一坊 鳥羽離宮 跡 京大病院 内遺跡 東洞院大 路 曇華院跡	砂はほとんど含まない。
24	15 灰褐色 泥土	2	100	以上	45	13				20	100	以上							二葉												岩倉幡杖瓦窯 か。 細い砂を含む がかなり緻 密。 緑釉瓦当面か ら10cmの幅 で釉が掛かっ ている。		
25	SX7	1	60	以上	80	以上	11			60	60	以上	以上				有														朝堂院 豊楽院	瓦当裏面に平 瓦広端部をあ て接合用粘土 を用いて接合 する。	
26	SK22	1	100	以上	47	6	7	34	85	以上																					瓦当裏面に平 瓦広端部を包 みこんで接 合。	砂少なく緻 密。 平瓦接合面よ りはずれしてい る。	

(単位 mm)

図版番号	出土地	同范出土数量	瓦当部										平瓦部										胎土の色調	焼成	色調	瓦当部成形の手法	他の出土地	胎土備考				
			弧幅	弧深	タ	周縁幅	外区幅	文区	文区ヨコ	文区ヨコ	刺文頭数	中心飾	単位数	起点	一転方向	反転数	珠文	狭端幅	厚	凹布糸	経緯	面数							凸面叩	凸面	凹面	広端
27	SX8	33	150	19	22	2	20	128									14	20	20	20	布	布	布	へラ	へラ	へラ	へラ	へラ	へラ	折り曲げ。		白色小砂粒多く含む。
28	SK82	11	186	16	32	7	22	160	6							20					押圧	布	布	へラ	へラ	へラ	へラ	へラ	折り曲げ。		小砂粒を含む。へラ記号X。全体に摩滅気味。	
29	SX8	1	95	以上	25	3	20	90	以上							13					押圧	布	布	へラ	へラ	へラ	へラ	へラ	折り曲げ。		1～3mmの小砂粒を多数含む。巻き込みの2つ巴を中心飾。	
30	SK10 その他	1 1	60	以上	45	5	25	60	以上													布	布	へラ	へラ	へラ	へラ	へラ		内裏内郭回廊跡 烏丸六角	1～8mmの小石粒を含む。	
31	中央拡 張区	1	57	以上	70	10	50	57	以上							22					ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	瓦当裏面に平瓦広端部をあて、粘土をたして接合する。		小砂粒を多く含むが緻密。	

(単位 mm)

図版番号	出土地	同范出土数量	瓦当部										平瓦部						胎土の色調	焼成	色	瓦当部成形の手法	他の出土地	胎土備考								
			弧幅	弧深	弧ヲ	周縁幅	外区幅	文区	文区タテ	文区ヨコ	刺文中心飾	単位蔵手数	起点	一転目方向	反転数	珠文	狭端幅	厚							凹布	凹布糸×20	面自数	凸面叩	凸面	凹面	広端	狭端
32	D4 暗褐色砂	1	100以上	65以上	65以上	13	40以上	40以上	90以上								27	10	11	指ナデ	布	ヘラ	ヘラ	ヘラ	側面	青灰色	硬	暗灰色	平瓦部と瓦当部を同時に去土で成形する。	側面のヘラケズリは瓦当から、狭端に向ってケズっている。指紋が残っている。砂少なく緻密。		
33	中央拡張区	1	115以上	25以上	25以上	8	5	17	100以上																		軟	灰白色	平瓦接合面にカキヤブリをつけている。平瓦広端部凸面に粘土を貼って厚くし瓦当を作る。	細かい砂を多く含む。平瓦接合面より平瓦部欠損。		

年 表

年 代	秦 氏	葛 野	広 隆 寺	そ の 他	常 磐 仲 之 町 遺 跡
4 世紀 (中～後期)	弓月君、百二十郡の人民を率いて来朝と伝えられる。			京都盆地初の古墳を向日町丘陵に築造、相次ぎ首長墓ノラスの古墳築造。	
5 世紀 (中期)	天皇ノ杜古墳・黄金塚1号墳・同2号墳相前後して築造。秦氏一族(嵯峨野定着)が桂川治水事業に成功、流域を支配下とする。以後一族の首長墓が相次ぎ築造される。				
5 世紀 (後期)	秦造酒、秦氏一族の統率に成功。朝廷に庸調の絹、繻を献じ萬豆麻佐の姓を与えられる。秦氏葛野の大堰を造る。	葛野の大堰完成		穀塚・清水山・天鼓ノ森古墳等一連の首長墓築造。	
532(欽明1)	秦大津父が大蔵掾の役につく。				
565(欽明26)					
593(推古1)	聖徳太子摂政となる。以後、山背秦氏と強く結ぶ。			高麗人ら渡来、山背国に住む。	常磐仲之町集落跡 常磐東ノ町古墳群 このころから始まるか。 ～7世紀中頃まで。
603(推古11)	秦河勝、小墾田宮で聖徳太子より仏像を受ける。			冠位十二階の制定。	
604(推古12)				十七条憲法つくる。	
607(推古15)				遣隋使派遣。北野白梅町一带に荘大な寺院建立。	
610(推古18)	双ヶ岡頂上に秦氏最後の首長墓級古墳築造。				
622(推古30)	嵯峨寺(葛野秦寺・広隆寺)建立。				
646(大化2)				大化改新の詔。薄葬令。	
672(弘文1)				壬申の乱。飛鳥浄御原宮に遷都。	
694(天武1)					
694(持統8)				藤原宮遷都。	
701(大宝1)	秦都里、松尾社を建立。			大宝律令制定。	
702(大宝2)		大宝令施行。以後、山背国の郡が葛野・愛宕・乙訓・紀伊・宇治・久世・綴喜・相楽の八郡となる。			
708(和銅1)				和銅開珎の鑄造。	
710(和銅3)				平城京遷都。	
711(和銅4)	秦伊呂具(深草居住の秦氏)稲荷社を創祀。				
742(天平14)	造宮歸秦嶋麻呂、恭仁宮大宮垣を築いた功により太秦公の姓を与えられる。				
757(天平11 宝字1)				養老律令施行。	

年 代	秦 氏	葛 野	広 隆 寺	そ の 他	仲 之 町 遺 跡
787(延暦6)				長岡京遷都。	
793(延暦12)		遷都のため、大納言藤原小黒麻呂、東大寺沙門賢璋ら、葛野郡宇太村の地を賜る。			
794(延暦13)		天皇(桓武)葛野に行幸し新京を顧る。遷都の詔を発する。詔を下し愛宕、葛野二郡の今年の田租を免じる。		平安京遷都。	
797(延暦16)		愛宕、葛野両郡の人が家の傍に死者の埋葬を禁じる。山城国府を葛野郡から長岡京の南に移す。			
800(延暦19)		山城・大和などの民一万人を徴発、葛野川の堤修理。			
806(大同1)		葛野郡大井山の材木伐採を禁じる。			
807(大同2)		葛野川大堰の修造。			
817(弘仁8)	秦忌寸藤刀自、九条深草の地を三普宿禰女帯女に売る。				
818(弘仁9)			広隆寺火災、金堂塔を失う。	左右京職に行路の死者を埋葬させ、創困者に賑給する。	
833(天長10)		葛野郡貧民の租税未進などを免除。			
834(承和1)		葛野郡上林郷の地、方一町を氏神を祀らせるために伴宿禰らに与える。			
836(承和3)	秦忌寸広野、高田郷の地を秦忌寸主に売る。				
838(承和5)			承和年中、少僧都道昌、広隆寺を復興。	諸家が京中に水田を営むことを禁じる。	
849(嘉祥2)	秦繩子、三条高栗田里の地を朝原魚麻呂に売る。秦彌女、同里十六坪の家地を秦永岑に売る。				
857(天安1)		葛野郡百姓地、6段352歩を鑄銭所に与える。			
870(貞観12)		葛野郡五条荒木西里六条久受原里、紀伊郡十条下石原西外里、十一条下佐比里、十二条上佐比里を葬送地に定める。			
871(貞観13)				洪水・雷雨・地震による被害多し。	
872(貞観14)		葛野郡上林郷の地一町を平野社の地に充てて。			
873(貞観15)					
885(仁和1)		紀伊内親王の創建した葛野郡田邑郷神心寺を定額寺とす。	『広隆寺資財帳』成る。		

年 代	秦 氏	葛 野	広 隆 寺	そ の 他	仲 之 町 遺 跡
887(仁和3)		大風雨による民家倒壊、鴨川・葛野川など洪水。	広隆寺『資財交替実録帳』作成。	仁和寺創建。	
896(寛平8)	秦有世、葛野郡山田郷の家地を秦阿古吉に売る。				
909(延喜9)	秦安吉、葛野郡13条小野田東里の地を大秦行康に売る。			平将門の乱。	
935(承平5)				西寺焼亡。	
978(天元1)	秦是子、葛野郡大豆田里の地、四段二百四十歩を秦連雅に乾元錢五十貫文で売る。			前九年の役。 後三年の役。	
990(正暦1)					
1005(寛弘2)	大秦公信、葛野郡三条大豆田の地、四段余を直米二十石で松尾神主秦奉親に売る。		広隆寺焼亡。 広隆寺、薬師寺像を新造。本堂に移す。		
1050(永承5)					
1083(永保3)					
1150(久安6)				保元の乱。 平治の乱。	SD3、この頃か。
1154(久寿1)					
1156(保元1)					
1159(平治1)					
1165(永万1)					
1197(建久8)	秦貞元が六角北、京極東の地、口二丈五尺、奥十丈一尺を米25石で四郎殿に売る。		広隆寺の供養が行なわれる。		
1218(建保6)	秦友久、西京田宇徳大寺の地、六反を錢五十貫で源氏部大夫に売る。				SK1・2・22の瓦の頃。
1232(貞永1)					
1266(文永3)			京中の貴賤、広隆寺に群参す。	御成敗式目制定。	土城墓群の始まり。 SX8瓦の頃。
1324(正中1)				正中の変。 尊氏、室町幕府を開く。 応仁の乱起こる。(～77)	
1336(延元1) (建武3)					
1467(応仁1)					
1474(文明6)			広隆寺炎上。		
1485(文明17)				山城国一揆。	

PUBLICATIONS OF KYOTO ARCHAEOLOGICAL
RESEARCH INSTITUTE (INC.)

NO. 3

SURVEYS ON DWELLING HOUSE-SITES
AT TOKIWA-NAKANOCHŌ (KYOTO)

ENGLISH SUMMARY

KYOTO ARCHAEOLOGICAL RESEARCH INSTITUTE (INC.)

Content

Chapter I	Research Work	
1)	Start of research work	1
2)	Progress of research work	2
Chapter II	Site	
1)	Kofun period	9
	Dwelling site	9
	Structural remains	15
	Conclusion	16
2)	From Heian period to the first half of Kamakura period	19
	Structural remains	19
	Ditch	20
	Pit of roof-tiles	22
3)	Second half of Kamakura period	24
	Graves	24
	Ditch	30
	Pit of roof-tiles	31
	Well	32
	Conclusion	32
Chapter III	Objects	
1)	Kofun period	36
	Conclusion	37
2)	From Heian period to Kamakura period	40
	SD3	40
3)	From Medieval period to Modern period	47
	Haji type pottery	47
	Coins	53
	Nails	54
	Wooden objects	55
4)	Roof tiles	56
	Conclusion	62
Chapter IV	Conclusion	68
Chapter Appendixes		
1)	Progress of research work	72
2)	Site	72
3)	Objects	75
4)	Conclusion	75
Supplementary Tables		
	Dwelling site	76
	Graves of medieval and modern period	79
	Earthenware	85
	Roof-end-tiles	94

Chronological table	102
English Summary	105

Plates

1) Site	Plan
2)	Sections
3)	Dwelling site (No. 2, 3, 14, 16, 18, 24)
4)	Dwelling site (No. 5, 6, 7, 11, 13)
5)	Dwelling site (No. 1, 4, 8, 10)
6)	Dwelling site (No. 9, 12, 15, 19 ~ 23)
7)	Sections of dwelling site (No. 1 ~ 24)
8)	Structural remains (SB4, 5, 6, 8)
9)	Structural remains (SB1, 3, 7)
10)	Structural remains (SB2, SK1)
11)	Ditch of stone work (SD3)
12)	Northern group of graves
13)	Graves (SK73, 54, 56, 67)
14)	Graves (SK4, 25, 30, 39, 46, 52)
15) Artifacts	Earthenware
16)	Earthenware
17)	Earthenware
18)	Round and flat roof-end-tiles (Rubbed copies and section)
19)	Round roof-end-tiles (Rubbed copies and section)
20)	Round roof-end-tiles (Rubbed copies and section)
21)	Flat roof-end-tiles (Rubbed copies and section)
22)	Round roof-tiles (Rubbed copies and section)
23)	Flat roof-tiles (Rubbed copies and section)
24)	Wooden objects
25) Site	Aerial view
26)	General view of adjacent site
	General view of dwelling site from north
27)	Dwelling site seen from east
28)	Dwelling site seen from east
	Dwelling site seen from north
29)	Dwelling site seen from northeast
	Dwelling site seen from north
	Dwelling site seen from west
	Dwelling site seen from south
	Furnace of dwelling site seen from south
30)	General view of structural remains seen from south
	SB1 seen from east
31)	SB2 seen from north
	SB7 seen from northwest

- 32) SK1 seen from northeast
SK22 seen from east
SX7 seen from southeast
- 33) SD3 seen from northwest
- 34) Northern group of graves seen from north
Southern group of graves seen from east
- 35) SK73 seen from north
SK5, 40 seen from north
SX10 seen from east
SK4 seen from south
- 36) SK115 seen from north
SK46 seen from north
SK56, 67 seen from north
SK62 seen from north
Ditch SD2 south-section
Kan-eitsuho in SE3
- 37) Artifacts Earthenware of dwelling sites
- 38) Haji type pottery (SD3, graves)
- 39) Earthenware
- 40) Chinaware
- 41) Round roof-end-tiles
- 42) Round roof-end-tiles
- 43) Round and flat roof-end-tiles
- 44) Flat roof-end-tiles
- 45) Flat roof-end-tiles
- 46) Round roof-tiles
- 47) Flat roof-tiles
- 48) Wooden objects and coins and ink stones

Figures and Diagrams in Text

1) Location	1
2) Surveyed area and plan of grid	3
3) View of excavation	5
4) View of excavation	6
5) View of excavation	6
6) View of excavation	7
7) View of excavation	7
8) View of excavation	8
9) Location of dwelling site	11
10) Sections (Furnace of dwelling site)	17
11) Sections (SD2)	20
12) Sections (SD9, 10)	21
13) Plan (SK22)	23
14) Southern group of graves (No. 1)	25
15) Southern group of graves (No. 2)	26

16) Photograph (SK30)	27
17) Photograph (SK25)	29
18) Section (SD1)	30
19) Section (SX8)	31
20) Classified diagram of graves	33
21) Earthenware (SD3)	41
22) Distributed diagram by caliber and height of Haji-type-pottery	43
23) Haji-type-pottery, ink stones	48
24) Haji-type-pottery (SK39)	49
25) Bowls	51
26) Coins	53
27) Nails	54
28) Flat-roof-tiles	62
29) Location	71
30) Surveyed area of vicinity	72
31) Trench	73
32) Surveyed area	74
33) Drains and graves	74
34) Northern group of trench (half)	74
35) Earthenware	75

Table in Text

1) Observations of earthenware (SD3)	45 ~ 46
2) Observations of objects (medieval and modern period)	52
3) Coins	53
4) Nails	55
5) Roof-tiles	64

SURVEYS ON DWELLING HOUSE-SITES AT TOKIWA-NAKANOCHŌ (KYOTO)

Survey area exists at No.15, *Uzumasa-Higashihachioka-chō*, *Ukyōku*, Kyoto city, the ground belonging to Nippon Telegraph and Telephone Public Corporation. Survey had been carried out from Feb. 1st, 1977 until Jun. 9th, bringing about under mentioned good results.

We excavated 24 dwelling-house sites in square type with round corner of the later *Kofun* period. These were built at the same period as the group of burial mounds at *Tokiwahigashi-no-chō* surveyed by this research institute in the fiscal year 1976, located at a distance of 120 meters in the north-east direction from this site. Both are located at an alluvium rising from 45 meters to 47 meters above sea level. In the neighborhood of this contour line are there *Uzumasa-Umazuka*-tumulus, *Goisan*-tumulus, the site of the *Ninnazi-shiin* and *Hōkongōin* temple.

Moreover widening our mental vision from 40 meters to 50 meters above sea level, we can find the *Kōryūzi*-temple, the *Nakanoshinnō*-tumulus, a group of *Tokiwano*-burial mounds, *Kamidanno-machi* site and *Ichinoi* site. Thus the neighborhood of the survey area, having a great deal of sites, is the home ground of *Hata* lineage “秦氏” and we are unable to tell these sites without considering the relation to them. Keeping in mind to the above-mentioned, we would like to consider the dwelling sites found this time. In the first place, average form of the house-plan is square type with round corner for the length of 2.8 meters min, and 4.7 meters max, on a side. It is surrounded by ditches on the inner border, having four pillars and a horseshoe-shaped oven. There are so many floors boarded with viscosity soil on a sand-gravel stratum.

We could not confirm a floor boarded regarding on which was found only a part of residential site, and on which the face of floor was laid waste by the other structural remains. Ones having no floor boarded among dwelling house sites found with whole shape and oven, are nothing but No.8, No.14 and No.15. Then, in case of a floor boarded, it is almost partially repaired, and no more than three-fourth of a floor space max. Repairing is especially distinct where residential sites were crossed over.

Ovens were confirmed in 13 houses. We are unable to assure that ovens did not exist certainly, in case of unconfirmed residential sites extended outside of the survey area and were cut by the other structural remains. The situation of confirmed ovens on the residential sites is described as follows, 9 houses in the north, 2 houses in the west, a house in the south and a house in the south-east. Most of them are on the north side. Thinking of the order of houses crossing each other, it might be thought that ones having ovens on the north side are belonging to older phase.

Then groups of residential sites will come into question. We have tried to divide the residential sites found this time from the north into three groups. That is to say, they are the first one -No.4 residential sites (SB4), the second one -8 houses besides No.5 residential site (SB5, 8), and the third one -13 houses besides No.1 residential site (SB6). Though, the residential site of each group is complexly crossed over and concentrated. One

group keeps at a long distance from another and there are no structural remains of the same period at all. Then, they are crossing each other with *Tateana*-type dwelling-house sites. *Hottatebashira* (wooden pillar without stone base)-type houses are found with each groups. There are no relics except broken pieces in the holes dug up for pillars. Nevertheless, it will be brought to light that they are from the later Kofun Period. *Hottatebashira*-type house has been said to be a warehouse, a residence of leader or special place.

No.1 group, SB4 is thought to be a warehouse in this case. But we are unable to declare it, because a ditch in the posterity is running on the spot where a central post must be settled in evidence of warehouse. Then, other *Hottatebashira*-type house is each other crossing with No.5, No.8 and No.15 residential sites, but there are nothing to be able to confirm the whole shape except SB5 of which the whole scale is perfectly brought to light. The direction of pillars' was not same and there are nothing to make equal a direction even in the same group. Their simultaneity with *Tateana*-type dwelling-house might be thought from crossing each other.

As it was said in the beginning, such period in *Uzumasa* area ought to be attached importance to the relation of *Hata* lineage “秦氏”. This survey not only found groups of residential sites, but contributed to bring to light their living area and moreover, it may be said to have found a clue to bring to light *Kadono-gun* which might have been dominated by them. Structural remains were also found by the current survey not only from the Kofun Period but also from the Heian Period till recent times. That is to say, there are SB1~3 *Hottatebashira*-type houses etc, belonging to the Heian Period. SB1 is 5 ken × 3 ken, and a house having the east-west axis of architecture with eaves on the south. SB2 is 3 ken × 2 ken and a house having the south-north axis of architecture. SB3 was not brought light the whole scale, because it was beyond the survey area. They were built being conscious of the north, but made equal a direction and there are few relics found on the pillar hole. These houses were unable to be divided periods clearly. Besides this, a ditch with side walls of stone including the relics of the earliest Kamakura Period, SD3, a ditch including roof tiles and potteries of the Muromachi Period, SD1, are there.

There are groups of tombs as the recent structural remains. They are able to be divided roughly in 2 groups of the north and the south inside the survey area. The form of tombs is classified to round form, square and rectangular ones and some of them thought to have a coffin. There are so many tombs including a gravel about a size as a head of child and a fist, which are able to be said above 60 %. Some relics found in tombs as accompanied-object belong to the comparatively new age in the recent times. They might be used for a fairly long time as a burial place. Ancestors had been used this place for a long time except a short time when there were bamboo woods in the Meiji Period. The discovery of these structural remains certifies that grounds put between the *Arisu* river and the *Tenjin* river were the place to be most suitable for living.